

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか くわばら

元岡・桑原遺跡群22

—第56次調査の報告1—

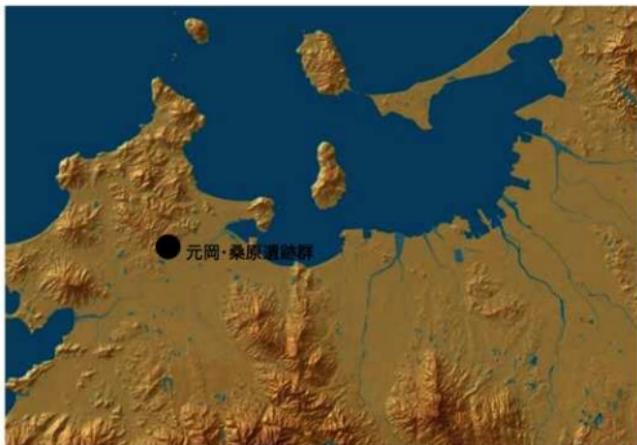
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか

くわばら

元岡・桑原遺跡群 22

—第56次調査の報告1—



調査番号1043

2013

福岡市教育委員会

大正元年正月一日東宮日亨作刀凡十二栗使



元岡古墳群 G 群全景（南から）

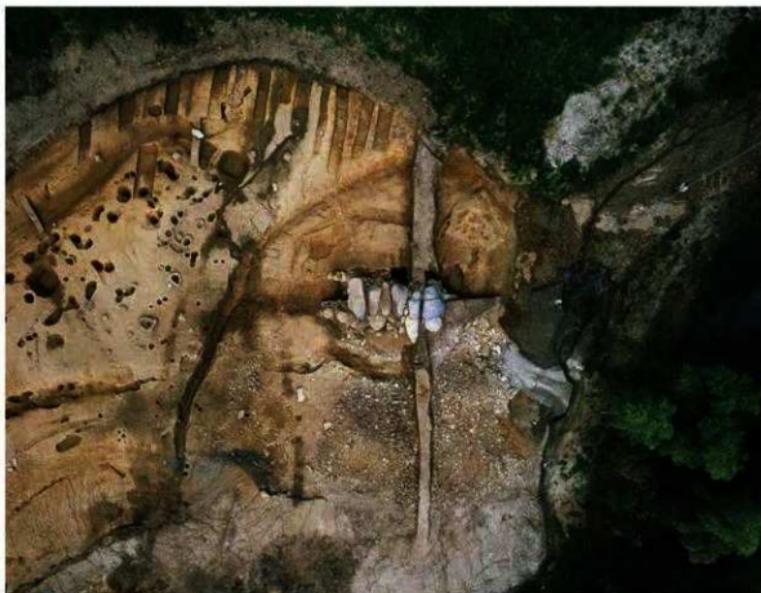
卷頭図版 2



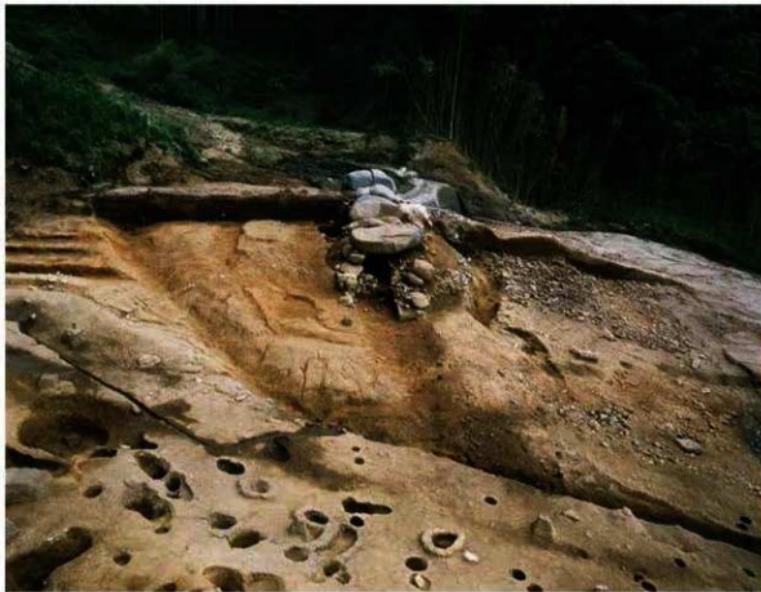
元岡古墳群 G 群全景（3・6 号墳調査前）



6 号墳・56 次 1 区全景（南東から）



6号墳墳丘・石室俯瞰（東から）



6号墳墳丘・石室（南から）

卷頭図版 4



6号墳玄室内遺物出土状況（北から）



「庚寅」銘大刀 出土状態（左）・X線写真（中）・銘文部分（右）

卷頭図版 6



大型青銅鈴（上）・青銅鈴出土状況（南西から）



6号墳出土耳環



6号墳出土玉類

卷頭圖版 8



(1) 3号填石室全景



(2) 3号填出土装身具

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区的移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から福岡市が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査も行っており、現在も発掘調査を継続しております。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次発行しており、本書は九州大学を委託者とする第4冊目の調査報告書で、その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が18冊、概要報告書が2冊、関連パンフレットが2部発行されております。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことができない成果と考えております。

本書で報告する第56次調査では、元岡古墳群G群6号墳から「庚寅」銘大刀をはじめとする数多くの重要な遺物が出土しました。その内容は新聞やテレビなどで大々的に報道され、全国的にも注目されています。今後、大刀の分析が進むことによってさらに多くの成果が期待されるとともに、今後の古墳時代の研究にとって欠かすことのできない調査であると言えるでしょう。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係各機関並びに地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　　言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて実施した元岡・桑原遺跡群第56次調査報告書の第1冊である。本書では第56次調査のうち、元岡古墳群G群3号墳、同6号墳の報告を行い、今後数冊に分けて報告を実施する予定である。
- 2 本書で報告する元岡・桑原遺跡群は旧石器時代～中世にかけての複合遺跡で遺跡略号はMOTとしている。遺跡群には群集墳や前方後円墳も含まれ、それぞれに固有の名称が付けられているが、今回の調査では古墳の調査についても遺跡略号は「MOT」で統一している。
- 3 本書に掲載した遺構実測図は担当の大塚紀宜・比嘉えりかの他、名取さつき・坂口剛毅・阿部洪太郎が作成した。遺構写真は大塚・比嘉が撮影した。
- 4 本書に掲載した遺物実測図は3号墳出土遺物を比嘉が作成し、6号墳出土遺物を大塚が作成した。製図は大塚・比嘉が行った。遺物写真は大塚・比嘉が撮影し、「庚寅」銘大刀のX線写真是上角智希（福岡市埋蔵文化財センター）が、ガラス玉の撮影は田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が撮影した。
- 5 本書に使用した座標は日本測地系で、国土調査方第II座標系に依拠している。
- 6 本書に使用した方位は座標北である。
- 7 押印番号・遺物番号は3号墳、6号墳ごとの通し番号としている。
- 8 本書の執筆は以下の通り実施した。

第1章1・2、第2章：比嘉
第1章3～5、第3章、第4章1～3：大塚
第4章4：上角
第4章5：田上
- 9 「庚寅」銘大刀の背景となる層に関して、九州大学大学院人文科学研究科教授　坂上康俊氏に原稿を頂いた。
- 10 調査から報告まで九州大学をはじめ多くの方々・機関の御援助・御協力を得た。また以下の方々から報告書作成にあたり重要な御教示を得た。記して深謝申し上げます。

今津節生（九州国立博物館） 尾崎誠（元興寺文化財研究所） 小田裕樹（奈良文化財研究所） 尾野善裕（京都国立博物館） 加藤和哉（九州歴史資料館） 下原幸裕（九州歴史資料館） 西山要一（奈良大学） 平川南（国立歴史民俗博物館） 桃崎祐輔（福岡大学）（五十音順）

久住猛雄 藏富士寛 吉留秀敏（以上、福岡市文化財部）
- 11 編集は、比嘉の協力を得て、大塚が行った。

目 次

第1章 はじめに	
1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過	1
2. 元岡・桑原遺跡群の位置と環境	2
3. 第55・56次調査の概要	6
4. 調査組織	8
5. 調査工程・作業方法	8
第2章 G群3号墳の調査	
1. 墳丘・周溝の調査	9
2. 主体部の調査	9
3. 出土遺物	9
4. 小結	12
第3章 G群6号墳の調査	
1. はじめに	15
2. 墳丘・周溝の調査	
(1) 現況	15
(2) 墳丘	15
(3) 周溝	25
(4) 墓道	26
(5) 溝状通路	26
3. 主体部の調査	27
(1) 玄室	27
(2) 渠道	32
(3) 閉塞施設	32
4. 出土遺物	
(1) 玄室	34
(2) 渠道・閉塞部	43
(3) 墓道・周溝・墳丘	46
(4) 鉄器・鉄製品	57
(5) 青銅製品	68
第4章 考察	
1. 6号墳の築造年代と大刀の副葬時期について	69
2. 玉・装飾品からみた被葬者数	70
3. 墳丘の構造について	71
4. 「庚寅」銘大刀の保存処理について	73
5. 3号墳・6号墳出土ガラス製品について	
.....	74
6. 庚寅銘鉄刀の背景となる暦について (坂上康俊)	84

挿図目次

fig. 1 元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡 (1/100,000)	1
fig. 2 元岡・桑原遺跡群調査区位置図 (1/15,000)	3
fig. 3 元岡古墳群 G 群全体図 (1/1,500)	7
fig. 4 3号墳前面トレンチ土層実測図 (1/60)	9
fig. 5 3号墳全体図 (1/100)	10
fig. 6 3号墳石室実測図 (1/60)	11
fig. 7 3号墳出土土器実測図 (1/3)	11
fig. 8 3号墳玉類出土状況 (1/3)	12
fig. 9 3号墳出土装身具類実測図 (1/1)	13
fig. 10 6号墳周辺現況図 (1/200)	16
fig. 11 6号墳墳丘測量図 (1/200)	17
fig. 12 A～D トレンチ土層概要図 (1/100)	18
fig. 13 A トレンチ土層図 (1/50)	19
fig. 14 A-2 トレンチ土層図 (1/50)	20
fig. 15 B・D トレンチ土層図 (1/50)	21
fig. 16 C トレンチ土層図 (1/50)	22
fig. 17 C-2 トレンチ土層図 (1/50)	23
fig. 18 墳丘トレンチ配置図 (1/200)	24
fig. 19 E トレンチ土層図 (1/50)	25
fig. 20 G トレンチ土層図 (1/50)	25
fig. 21 H トレンチ土層図 (1/50)	25
fig. 22 F トレンチ土層図 (1/50)	26
fig. 23 周溝内土器出土状況 1 (1/50)	26
fig. 24 周溝内土器出土状況 2 (1/50)	27
fig. 25 蔓道トレンチ土層図 (1/50)	27
fig. 26 石室内部土層図 (1/40)	28
fig. 27 玄室第1面(中世)・第2面敷石実測図 (1/60)	29
fig. 28 石室実測図 (1/60)	30・31
fig. 29 閉塞施設実測図 (1/40)	33
fig. 30 玄室・漢道内出土中世遺物実測図 (1/3)	35
fig. 31 玄室内遺物出土状況図 (1/30)	36
fig. 32 玄室内出土遺物実測図 (1/3)	37
fig. 33 玄室内出土装身具・玉類実測図 1 (1/1)	39
fig. 34 玄室内出土装身具・玉類実測図 2 (1/1)	40
fig. 35 玄室内出土装身具・玉類実測図 3 (1/1)	41
fig. 36 漢道内遺物出土状況図 (1/30)	43
fig. 37 漢道内出土遺物実測図 1 (1/3)	44
fig. 38 漢道内出土遺物実測図 2 (1/3)	45
fig. 39 墓道部遺物出土状況図 (1/50)	46
fig. 40 墓道出土遺物実測図 1 (1/3)	47
fig. 41 墓道出土遺物実測図 2 (墓道上層出土遺物) (1/3)	47
fig. 42 墓道出土遺物実測図 3 (黒色土上層出土遺物) (1/3)	47
fig. 43 墓道出土遺物実測図 4 (黒色土出土遺物 1) (1/3)	48
fig. 44 墓道出土遺物実測図 5 (黒色土出土遺物 2) (1/3)	49
fig. 45 墓道出土遺物実測図 6 (1/3)	51
fig. 46 周溝内出土遺物実測図 (1/3)	52
fig. 47 墳丘部出土遺物実測図 1 (1/3)	53
fig. 48 墳丘部出土遺物実測図 2 (1/3)	54
fig. 49 墳丘部出土遺物実測図 3 (1/6)	55
fig. 50 墳丘部出土弥生時代・中世遺物実測図 (1/3)	56
fig. 51 玄室・漢道出土鉄器・鉄製品実測図 (1/2)	57
fig. 52 漢道内出土鉄製品実測図 1 (1/2)	58
fig. 53 漢道内出土鉄製品実測図 2 (1/2)	59
fig. 54 漢道内出土鉄製品実測図 3 (1/2)	60
fig. 55 漢道内出土鉄製品実測図 4 (1/2)	60
fig. 56 「庚寅」銘大刀実測図 (1/2)	61
fig. 57 鉄矛実測図・出土状況図 (1/2・1/40)	63
fig. 58 鉄製馬具実測図 (1/2)	64
fig. 59 鉄製工具実測図 (1/2)	65
fig. 60 大型青銅鏡出土状況図 (1/30)	66
fig. 61 大型青銅鏡実測図 (1/2)	67
fig. 62 玄室出土青銅製品実測図 (1/1)	69
fig. 63 6号墳出土須恵器分類表 (1/10)	70
fig. 64 玄室内玉類・装身具出土状況 (1/40)	71
fig. 65 6号墳墳丘復元モデル図 (1/400)	72

目次

tab. 1 元岡・桑原遺跡群発掘調査一覧表	4
tab. 2 発掘調査報告書一覧	5
tab. 3 3号墳出土装身具類観察表	14
tab. 4 6号墳出土玉類観察表	42

図版目次

- 卷頭図版 1 元岡古墳群 G 群全景（南から）
卷頭図版 2 元岡古墳群 G 群全景
(3・6号墳調査前)
6号墳・56次1区全景（南東から）
卷頭図版 3 6号墳丘・石室俯瞰（東から）
6号墳丘・石室（南から）
卷頭図版 4 6号墳玄室内遺物出土状況
(北から)
卷頭図版 5 「庚寅」銘大刀 出土状態（左）・
X線写真（中）・銘文部分（右）
卷頭図版 6 大型青銅鏡（上）・
青銅鏡出土状況（南西から）
卷頭図版 7 6号墳出土耳環
6号墳出土玉類
卷頭図版 8 3号墳石室全景
3号墳出土装身具
- PL.1
(1) 3号墳遠景（南東から）
(2) 3号墳石室全景（上が南東）
(3) 3号墳全景（南東から）
PL.2
(1) 3号墳全景（南から）
(2) 3号墳玉類出土状況
(3) 出土遺物 1
(4) 出土遺物 2
PL.3
(1) 6号墳調査前全景（東から）
(2) 6号墳調査前全景（南西から）
(3) 6号墳調査前上石露出状況（西から）
PL.4
(1) 6号墳 D トレンチ・前庭部西側（南から）
(2) 6号墳 C トレンチ（南東から）
(3) 6号墳 C トレンチ土層（南から）
PL.5
(1) 6号墳 G トレンチ土層（北から）
(2) 6号墳 H トレンチ土層（東から）
(3) 6号墳 C-2 トレンチ土層（北東から）
PL.6
(1) 6号墳 B トレンチ土層（西から）
(2) 6号墳 A トレンチ土層（南西から）
(3) 6号墳 A トレンチ東部分（南から）
PL.7
(1) 6号墳 A-2 トレンチ土層（北から）
(2) 6号墳丘IV区地山露出状況（東から）
(3) 6号墳丘IV区北側地山露出状況（東から）
PL.8
(1) 6号墳丘III区（西から）
(2) 6号墳丘IV区（南西から）
PL.9
(1) 6号墳・56次調査1区全景（南西から）
(2) 6号墳・56次調査1区全景（南から）
PL.10
(1) 6号墳石室正面（南から）
(2) 6号墳石室外観（西から）
(3) 6号墳石室奥壁部分外観（北西から）
PL.11
(1) 6号墳石室外観（北東から）
(2) 6号墳石室外観（東から）
(3) 6号墳閉塞施設正面（南から）
PL.12
(1) 6号墳閉塞施設検出状況（南東から）
(2) 6号墳閉塞部 青銅鏡出土状況（南から）
(3) 6号墳青銅鏡出土状況（南西から）
PL.13
(1) 6号墳墓道部・D トレンチ土層（西から）
(2) 6号墳墓道 1 トレンチ土層（南から）
(3) 6号墳墓道 2 トレンチ土層（南から）
PL.14
(1) 6号墳墓道前面部 周溝断面（西から）
(2) 6号墳周溝 須恵器瓶出土状況（北から）
(3) 6号墳溝状通路 須恵器平瓶出土状況
(東から)
PL.15
(1) 6号墳閉塞部断面（南西から）
(2) 6号墳閉塞施設（南から）
(3) 6号墳閉塞施設俯瞰（西から）
PL.16
(1) 6号墳玄室内
中世石敷き面（南西から）
(2) 6号墳玄室横断面土層（北から）
(3) 6号墳青磁碗出土状況（北から）
PL.17
(1) 6号墳玄室下層縦断面土層（北東から）
(2) 6号墳玄室内 大刀出土状況（北西から）
(3) 6号墳玄室内 大刀出土状況俯瞰
(北西から)

PL.18

- (1) 6号墳玄室内 遺物出土状況（北から）
- (2) 6号墳玄室内 遺物出土状況俯瞰（西から）
- (3) 6号墳玄室右袖石付近 遺物出土状況（北西から）

PL.19

- (1) 6号墳玄室内 遺物出土状況（南から）
- (2) 6号墳玄室奥壁付近 遺物出土状況（南から）

PL.20

- (1) 6号墳羨道部 遺物出土状況（南から）
- (2) 6号墳羨道部 遺物出土状況（北から）
- (3) 6号墳羨道右奥部 遺物出土状況（南西から）

PL.21

- (1) 6号墳羨道部下層 遺物出土状況（南から）
- (2) 6号墳羨道右側壁際 鉄鎌出土状況（南西から）
- (3) 6号墳羨道南側 鉄鎌出土状況（西から）

PL.22

- (1) 6号墳羨道右側壁（南西から）
- (2) 6号墳羨道左側壁（南東から）
- (3) 6号墳羨道部床面（南から）

PL.23

- (1) 6号墳玄室右側壁（南西から）
- (2) 6号墳玄室左側壁（南東から）
- (3) 6号墳玄室右袖石・羨道右側壁（北西から）

PL.24

- (1) 6号墳玄室左袖石・羨道左側壁（北西から）
- (2) 6号墳羨道部床面（北から）
- (3) 6号墳閉塞基壇部（北から）

PL.25 6号墳玄室内出土土器

PL.26 6号墳羨道内出土土器

PL.27 6号墳羨道出土土器1

PL.28 6号墳羨道出土土器2・周溝・溝状通路出土土器

PL.29 3号墳出土ガラス玉1

PL.30 3号墳出土ガラス玉2

PL.31 6号墳出土ガラス玉1

PL.32 6号墳出土ガラス玉2

第1章 はじめに

1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過

九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成7(1995)年に対象地内の踏査を行い、平成8(1996)年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成8年3月から同年9月までに実施し、あわせて桑原金屎古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全域を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成8年から平成20(2008)年まで実施された。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。平成15(2003)年から九州大学との受託契約による発掘調査を開始し、現在も調査は継続中である。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成24(2012)年度までに59次の調査が実施されている(tab.1)。

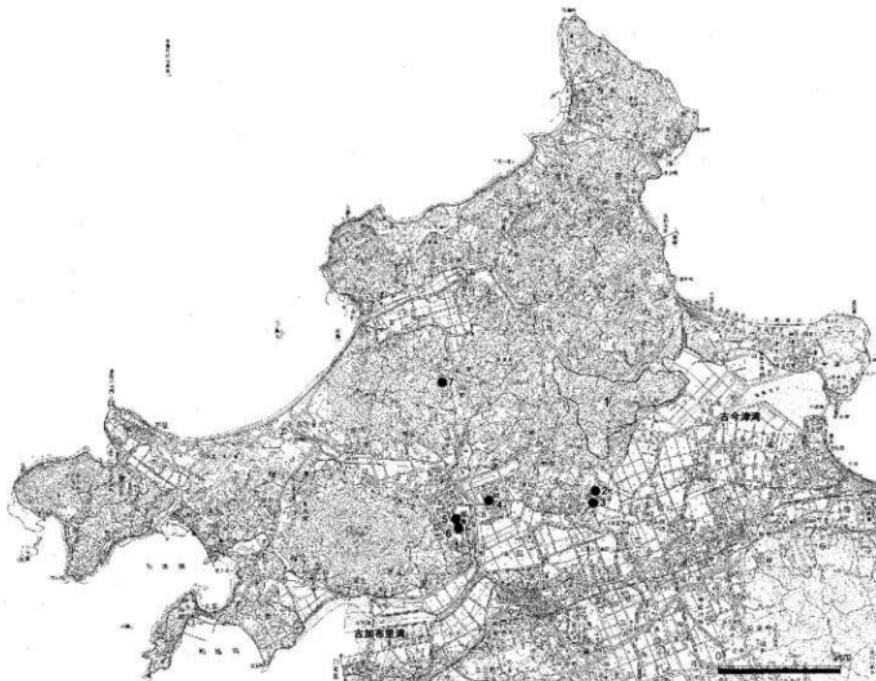


fig.1 元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡 (1/100,000)

1元岡・桑原遺跡群 2泊大塚古墳 3御道具山古墳 4津和崎権現古墳 5稻葉1号墳 6稻葉2号墳 7開1号墳

2. 元岡・桑原遺跡群の位置と環境

(1) 地理・歴史的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、绳文海進以降、中世のある時期までは中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。この東西の湾入部が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在のような地形をなすに至っている。元岡・桑原遺跡群は、その東側の湾（古今津湾）の奥部北側に位置する（fig. 1）。

今回報告する元岡古墳群G群（元岡・桑原遺跡群第56次調査区）は、古今津湾の最奥部に位置する谷の奥部にあたる（fig. 2）。同じ谷の下流域で実施した第42・52次調査では、自然流路から弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物が1万箱以上出土した。そのなかには、五銖銭や小銅鐸、朝鮮半島系土器、山陰や瀬戸内地域の遺物も含まれ、朝鮮半島をはじめ広範囲の地域と海を通じた交易を行っていたことがうかがえる。周辺に「泊」という地名が残ることからも、古来、この周辺は玄界灘の荒波を避けた船が停泊する良港であったのであろう。

(2) 既往の調査成果

元岡・桑原遺跡群は、旧石器時代から近世に至る複合遺跡であり、遺跡の大部分は丘陵上や谷部に立地する。これまでの調査成果については既往の報告書に詳述されているので、ここでは今回の報告に関連する古墳時代および古代の調査に限って、周辺地域の状況も踏まえながら述べる。

元岡・桑原地区には6基の前方後円墳（塙除、金屎、石ヶ原、池ノ浦、元岡E-1、峰古墳）、1基の大型円墳（経塚古墳）があり、元岡・桑原遺跡群のすぐ南側に位置する糸島市御道具山古墳や泊大塚古墳を含めると、古墳時代前期から後期にかけての当地域の首長墓系譜を辿ることができる。いずれの古墳も古今津湾に面し、湾内を見渡せる丘陵上に位置することが注目される。これらの古墳のうち、桑原金屎古墳、元岡石ヶ原古墳、元岡E-1号墳、経塚古墳の4基で発掘調査あるいは確認調査が実施された。

桑原金屎古墳 全長約24mを測る4世紀代の前方後円墳である。大部分が地山整形で形作られるが、一部に盛土が認められた。主体部は粘土構で、割竹形木棺を納める。棺内には水銀朱とベンガラの赤色顔料が施され、被葬者頭部付近の両側に菱雲文鏡と芝草文鏡各1面が副葬されていた。

元岡石ヶ原古墳 全長49mを測る二段築成の前方後円墳で、両袖式単室の横穴式石室を主体部とする後期古墳である。石室の石材は大部分が抜き取られ、一部を留めるに過ぎない。石室内から原位置を保つ遺物は出土しなかったが、墳丘上を中心に皮袋形瓶や台付子持鶏、鹿形埴など珍しい器種の須恵器が出土した。6世紀後半～末頃の築造と考えられる。

元岡E-1号墳 全長35mと推定される二段築成の前方後円墳である。墳丘や主体部の大部分が破壊され、遺存状態は良くない。後円部で確認された主体部付近で灰白色粘土と赤色顔料が確認されたことから、埋葬施設は木棺直葬の粘土構と推定される。この灰白色粘土上から方格T字鏡1面が出土した。

経塚古墳 直径30mを測る二段築成の大型円墳で、テラス部以外の墳丘斜面全体に葺石を施す。主体部の石室は保存のため調査されていない。墳丘上から家形埴輪や円筒埴輪が出土した。

また、元岡・桑原地区にはいくつかの群集墳が存在する。なかでも、32基の古墳で構成される桑原石ヶ原古墳群は、鍛冶工具や金銅製單鳳環頭大刀、馬具などが出土したことで注目される。鍛冶工具は元岡古墳群A群でも出土しており、この地域に鍛冶工人集団が存在し、集落や墓域を形成していたと考えられる。

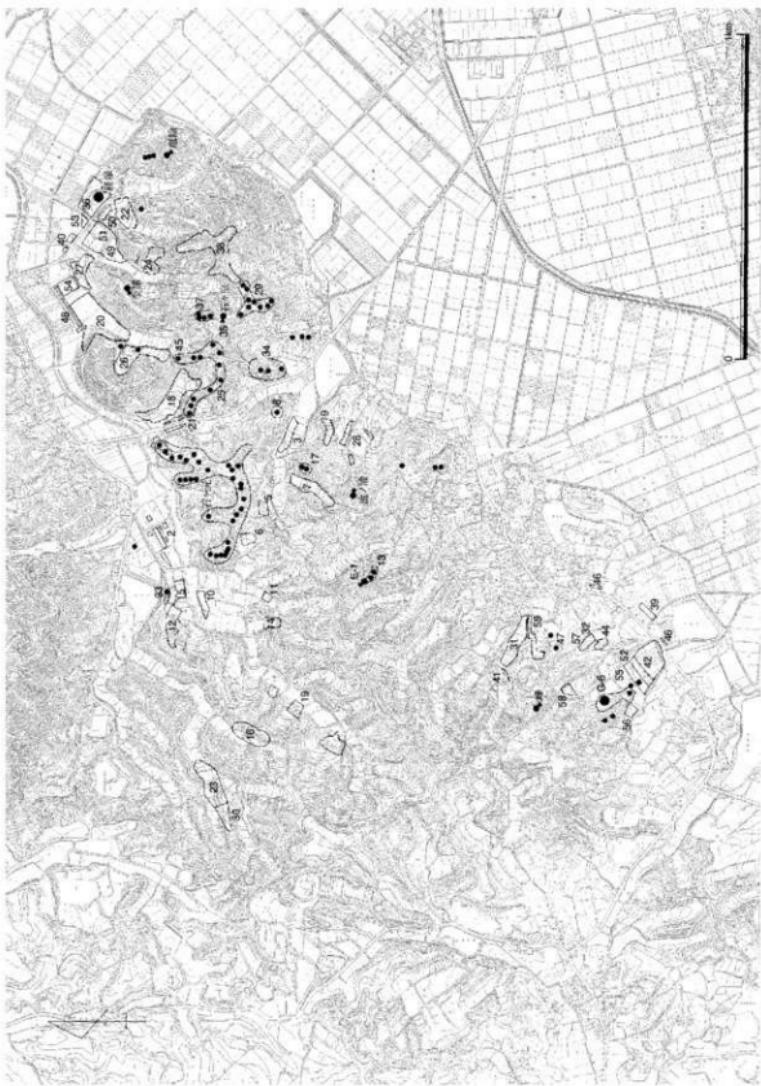


fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地位置図(1/15,000)

tab.1 元岡・桑原遺跡群発掘調査一覧表

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積(㎡)	古墳数	内容	報告書(集)
9602	第1次	確認	971201 ~ 981031			試掘調査	
9656	石ヶ原古墳群第1次	確認	961111 ~ 981031		19	円墳	743
9657	桑原金屋古墳第1次	確認	960820 ~ 961129	500		前方後円墳	909
9658	石ヶ原古墳第1次	確認	960827 ~ 961129	1280		前方後円墳	909
9656	石ヶ原古墳群第2次	公社	971201 ~ 981031	8154	12	円墳	743
9659	第2次	公社	961111 ~ 970325	3007		古墳時代~古代溝、土坑、水田	722
9763	第3次	公社	971129 ~ 990222	3500	1	縄文時代石組炉・弥生時代住居跡、円墳	829
9764	第4次	公社	971201 ~ 980331	1219		古代~中世掘立柱建物・溝	829
9771	元岡古墳群第2次	確認	971110 ~ 971128	60			
9811	第5次	公社	980427 ~ 980623	2500		古代土坑・包含層	639
9812	第6次	公社	980630 ~ 980828	2800		古墳時代包含層	639
9813	第7次	公社	980506 ~ 990611	7500		古墳時代~古代住居跡・掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉	1012
9829	第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916 ~ 981225	300	1	円墳	829
9851	第9次	公社	981102 ~ 981210	190		弥生時代住居跡	1172
9854	第10次	公社	990106 ~ 990225	1336		古代~中世包含層	639
9855	第11次	公社	990106 ~ 990320	1650		古墳時代~古代土坑・包含層	829
9902	第12次	公社	990406 ~ 000328	5500		古代製鉄炉	860・1063
9903	第13次	公社	990412 ~ 000316	600	3	前方後円墳、円墳	861
9904	第14次	公社	990422 ~ 990722	1200		古代包含層	639
9923	第15次	公社	990611 ~ 990928	3500		古代包含層、中世水田	860
9933	第16次	公社	990602 ~ 991110	1200		古代包含層	639
9934	第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910 ~ 991208	517	2	円墳	861
9946	第18次	公社	991010 ~ 020215	16800		古墳時代~古代住居跡・掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	1063・1102・1172
9947	第19次	公社	991016 ~ 991215	3000		古代包含層	743
0001	第20次	公社	000405 ~ 000523	20130		古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962・1002・1062・1065
0002	第21次(石ヶ原古墳群)	公社	000405 ~ 000921	3170	3	円墳	861
0033	第22次	公社	000410 ~ 001025	4750		古代掘立柱建物、製鉄炉関係遺構	909
0019	第23次	公社	000601 ~ 010331	8110		確認調査	743
0034	第24次	公社	000821 ~ 030320	500		古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052	第25次(元岡古墳群A群)	公社	001124 ~ 011130	2200	7	円墳	861
0110	第26次	公社	010405 ~ 011130	5487		古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153	第27次	公社	011201 ~ 020820	4495		古墳時代住居跡	909
0154	第28次	公社	020201 ~ 020704	2200		古代~中世包含層	909
0202	第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405 ~ 030930	4000	11	円墳	861
0240	第30次	公社	020801 ~ 020930	2450		古代包含層	743
0242	第31次	九大	030401 ~ 060113	9000		古代瓦窯、掘立柱建物、鍛冶炉、古墳時代祭祀関連	1103
0255	第32次	九大	030120 ~ 030331	1700			
0303	第33次	九大	030408 ~ 030519	450	1	円墳	1064
0310	第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401 ~ 030812	1200	3	円墳	909
0340	第35次(石ヶ原古墳)	公社	030520 ~ 050112	1853	1	前方後円墳	909
0341	第36次(經塚古墳)	公社	030901 ~ 050331	3500	1	大型円墳、中近世墓群	1011・1105
0365	第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020 ~ 040226	461	4	円墳	861
0371	第38次(水崎城)	公社	040308 ~ 050117	1000		中世山城	1105
0404	第39次	民社	040405 ~ 040416	88		弥生時代包含層	
0410	第40次	九大	040407 ~ 040430	1000		包含層	1064
0435	第41次	九大	040507 ~ 041130	900		古代包含層、製鉄関連遺構	1064
0451	第42次	九大	041001 ~ 090331	7000		縄文時代晚期~古墳時代初頭自然流路	1174
0486	第43次		050207 ~ 050308	500		古墳窟道	1173
0523	第44次	九大	050601 ~ 051020	1189		古墳~古代集落	1064
0535	第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720 ~ 051122	1128	3	円墳	1105
0538	第46次	福岡市土木局	050808 ~ 051011	403	1	弥生~中世集落	965
0562	第47次(元岡I-1号墳)	九大	060105 ~ 060310	107	1	円墳	1064
0563	第48次	公社	060110 ~ 060223	447		弥生~古代集落	1173
0611	第49次	公社	060403 ~ 070322	4000		古墳時代~古代集落	1173
0709	第50次	公社	070401 ~ 070827	811		近世末~近代墓地	1173
0741	第51次	公社	070829 ~ 081003	6888		古墳時代~古代集落	1173
0763	第52次	九大	080121 ~ 100331	3000		弥生~古墳時代初頭自然流路	
0768	第53次	九大	080215 ~ 080409	770		古代集落	
0844	第54次	公社	081006 ~ 090109	1872		古代集落	1173
1001	第55次	九大	100401 ~ 繼続中	3800	2	大型方墳	
1043	第56次	九大	110411 ~ 繼続中	6970	2	大型円墳、中世集落	1210(本報告)
1103	第57次	九大	110413 ~ 繼続中				
1110	第58次	九大	110620 ~ 繼続中				
1140	第59次	九大	120123 ~ 繼続中				

また、群集墳には陶質土器を供獻した事例もあり、鍛冶工人集團の存在も含め、糸島半島と朝鮮半島との交流を示す資料として注目される。

古代の糸島半島は鶴（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶴永の八郷が存在したとされる。本遺跡群がどの郷に該当するかは不明であるが、『日本書紀』推古天皇10（602）年に撃新羅將軍に任命された来目皇子が二万五千の兵を鶴郡に駐屯させたとの記事や、国内最古とされる大宝二（702）年の鶴郡川辺里戸籍の存在は、糸島半島が古代において政治・軍事的に重要な地域であったことを物語る。

この時期の本遺跡群では、谷部の調査で数多く確認された製鉄に関する遺構・遺物が注目される。第12次調査で発見された27基の製鉄炉をはじめ、第7・18・20・22・24・41次調査で製鉄関連遺構が多数確認された。また、製鉄関連遺構とともに、木簡や墨書き土器、祭祀具、帶金具・銅權・硯などの官衙施設に関連する遺物などが出土している。特に、木簡や墨書き土器は、第7次調査では「壬辰年韓鐵□□」の鉄に関する木簡、第20次調査では「太寶元年」「延曆四年」などの年号、「鶴郡赤敷里」の地名、「建部根足」「久米部」「大神部」などの人名、「道塞」など祭祀に関わる木簡など、当時の社会情勢を知るうえで重要な文字資料を提供している。元岡・桑原地区における鉄・鉄器生産は6世紀後半に開始され7世紀末頃から本格化する。特に、製鉄遺構は8世紀に最盛期を迎えるが、鉄の大量生産が必要となる背景として8世紀中ごろの対新羅政策との関連性も指摘されている。

このように、古墳時代から古代にかけての元岡・桑原地域は、中央政府や大宰府の対外交渉政策のなかで重要な役割を持っていたことが窺える。

tab.2 発掘調査報告書一覧

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集 2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集 2003
元岡・桑原遺跡群1 第2次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集 2002
元岡・桑原遺跡群2 桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 2003
元岡・桑原遺跡群3 第3・4・8・11次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集 2004
元岡・桑原遺跡群4 第12・15・24次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集 2005
元岡・桑原遺跡群5 第13・17・25・29・37次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集 2005
元岡・桑原遺跡群6 第22・27・28・34次 金屋古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集 2006
元岡・桑原遺跡群7 第28次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集 2006
元岡・桑原遺跡群8 第20次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集 2007
元岡・桑原遺跡群9 第26次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集 2007
元岡・桑原遺跡群10 第46次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第964集 2007
元岡・桑原遺跡群11 第23・30・36次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集 2008
元岡・桑原遺跡群12 第7次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集 2008
元岡・桑原遺跡群13 第20次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集 2008
元岡・桑原遺跡群14 第12・18・20次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集 2009
元岡・桑原遺跡群15 第33・40・41・44・47次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集 2009
元岡・桑原遺跡群16 第18次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集 2010
元岡・桑原遺跡群17 第31次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010
元岡・桑原遺跡群18 第20次-4・36次-2・38・45次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集 2011
元岡・桑原遺跡群19 第9・18次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1172集 2012
元岡・桑原遺跡群20 第43・48・49・50・51・54次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集 2012
元岡・桑原遺跡群21 第42次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集 2012
桑原遺跡群1 第1次発掘調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集 1995
桑原遺跡群2 飛櫛貝塚第1次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集 1996

3. 第55・56次調査の概要

(1) 第55次調査の概要

第55次調査地点は弥生時代～古墳時代の遺物が大量に出土した42・52次調査地点の北側に隣接する、南に開く谷部の上流部にある。調査範囲は谷を横断するように設定され、東西幅約100m、南北幅約30mの帯状の部分である。現標高は15～17mである。

55次調査区は東側谷部、中央尾根部、西側谷部の3つに区分できる。東側谷部では古代後半(10世紀)の水田面を確認した。水田面上にヒト足跡と共に偶蹄目(ウシ?)の足跡が多数整列した状態で検出され、古代後半の農耕形態を知る上で貴重な資料を得た。西側谷部でも水田面を検出したが、遺存状態が悪く、水田床面の存在を確認するにとどまった。

中央尾根部分では2基の古墳を確認し、元岡古墳群G群1・2号墳として調査を実施した。1号墳は尾根の先端部分に位置する東西18mの方墳であることが確認された。この規模は元岡・桑原地区の同時期の古墳の中では大型のもので、群集墳の多くが円墳であるのに対して方墳である1号墳は他の古墳とは一線を画す特異なものである。

石室は横穴式石室で、花崗岩の巨石を用いて構築されている。天井石は失われていたが、石室壁面の腰石は築造時の状態で遺存している。石室の規模は長さ3.6m、幅2.1mで、これも元岡・桑原地区の群集墳の中では最大級で、使用されている石材が巨大であることも注目される。

石室の床面からは多くの副葬品が出土している。主な出土品として、鉄刀5振(うち装飾付圭頭太刀1振)、鉄鎌多数、胡簫、馬具、銅鏡1面、銅鑑1点、耳環、玉類、須恵器などが挙げられる。これらの出土遺物を検討した結果、現在のところ、古墳の年代は7世紀初頭と考えられている。

1号墳の北側に隣接する2号墳は、削平の影響が石室床面まで及んでいるが、古墳壁面を構成していた巨石と、壁石が設置されていた痕跡が残っており、径15mの円墳と推定される。

元岡古墳群G群1号墳・2号墳を含む第55次調査の報告は、後日行われる予定である。

(2) 第56次調査の概要

56次調査区は55次調査区の北側尾根線上、および尾根の東西両斜面を主体とする範囲で、標高17～40mに及ぶ、高低差の大きな範囲である。近現代に果樹園の造成によって大きく改変され、さらにその後の竹林の繁茂によって本来の自然地形はほとんど失われている。周辺の試掘調査の結果、尾根東側斜面に形成された段造成の部分から古代～中世の遺構・遺物が確認されている。

56次調査は、6号墳を含む1区と東側谷部分の2区、西側谷部分と尾根上の3号墳を含む3区に分かれる。1区では6号墳と中世の建物群が検出され、6号墳は調査の結果、古墳時代終末期の古墳であることが判明した。6号墳の詳細は本紙で報告している。中世の建物群は、12～14世紀のものとみられ、大型の柱で建てられた2間×3間の建物が7棟検出された。いずれも建物の方向を揃えている。

2区では弥生時代の遺構面が検出され、遺物が散布した状況で検出された。42次調査と同様に、自然流路の水辺に土器を投棄した状況と推定される。

3区では3号墳と西側谷部分の調査を行った。3号墳の詳細についても本紙で報告している。西側谷部分については遺跡上層を対象に実施し、古代から中世の遺構・遺物を検出した。

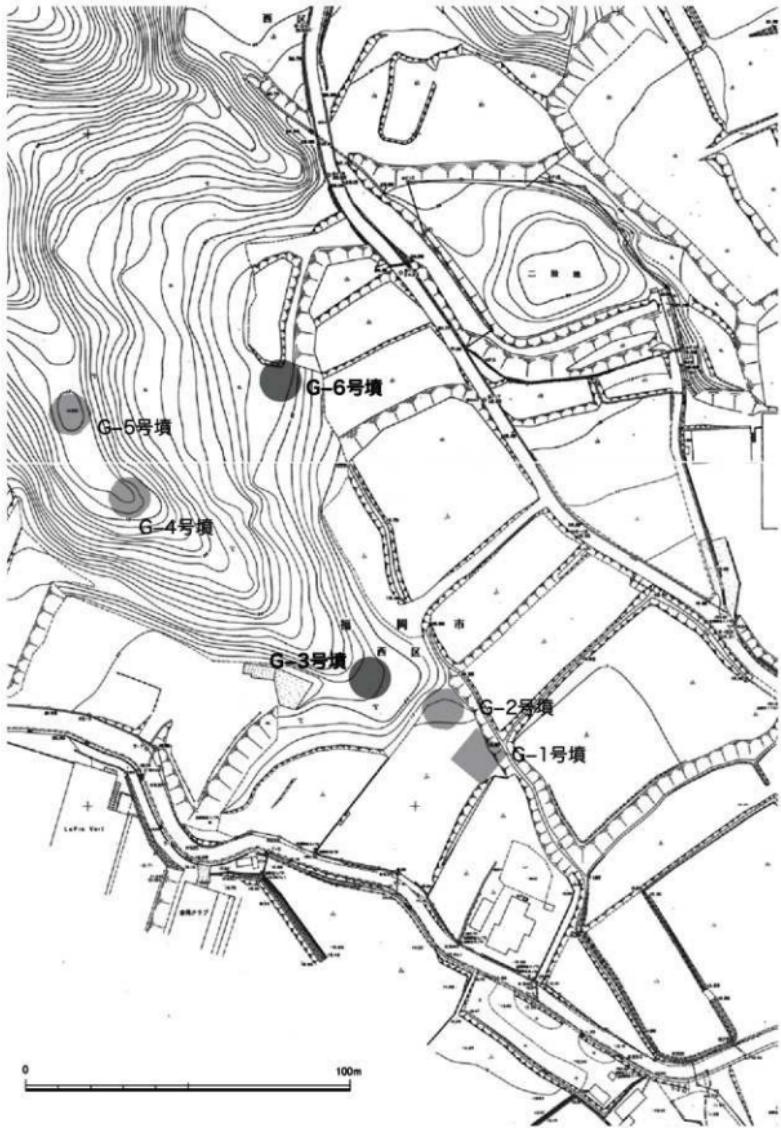


fig.3 元岡古墳群 G 群全体図 (1/1500)

4. 調査組織

平成 22・23 年度（第 55 次・56 次発掘調査）

調査担当 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第 2 課

総括課長 田中壽夫

第 1 係長 米倉秀紀

第 2 係長 菅波正人

現地担当 第 2 係主任文化財主事 吉留秀敏（平成 22 年度）

第 1 係主任文化財主事 長家伸（平成 23 年度）

第 1 係文化財主事 大塚紀宜（平成 22 年 12 月～）

第 1 係文化財主事 比嘉えりか（平成 23 年度）

平成 24 年度（第 56 次整理・報告）

調査担当 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

総括課長 宮井善朗

第 1 係長 常松幹雄

第 2 係長 菅波正人

現地担当 第 1 係主任文化財主事 大塚紀宜

第 1 係文化財主事 比嘉えりか

第 1 係文化財主事 大森真衣子

5. 調査工程・作業方法

発掘調査は平成 23 年 2 月より調査区内にあった巨石周辺を対象に開始し、その際に巨石が古墳に関係するものという前提で暫定的に A～D の各トレンチを設定した。その後大型青銅鏡が出土したことで、この巨石が古墳に関連するものと確定され、元岡古墳群 G 群 6 号墳と認定した。

これと並行して 3 号墳の確認調査も同年 2 月に着手したが、床面から玉類が多く出土したため作業を中断し、準備を整えて 10 月から 11 月まで調査を実施した。調査後は石室部分に土糞を積んで埋戻している。

5～7 月には 6 号墳の作業を一時中断して古墳南側の中世遺構群の調査を進め、7 月中旬より 6 号墳の石室内調査に着手した。完全に破壊し不安定な状態だった玄室天井の 2 石を取り外して玄室内を掘削したため、石室実測図では玄室天井石部分は除去時に計測した断面線を入れるのみにとどまる。また、石室調査以前に暫定的にトレンチを設定したため、墳丘測量の主軸と石室実測の主軸は異なっている。なお、石室内の調査において、中世敷石以下の覆土は全て水洗している。

8 月 17 日午前、玄室床面付近で大刀を確認した。記録のため遺物は出土位置に残したが、その後取り上げまでに雨による浸水で石室内は 2 回水没している。9 月 7 日午後に大刀を取り上げ、同日夕方に福岡市埋蔵文化財センターで X 線撮影を行った所、19 文字の象嵌銘文が確認された。

このことを踏まえて埋蔵文化財第 2 課では、一旦 6 号墳の調査を中断し、古墳と大刀の意義付けを再検討した。9 月 21 日には記者発表を実施し、9 月 23 日に現地説明会を実施した。

現地説明会後に 6 号墳の調査を再開したが、石室は調査時点での現状を維持する方針となり、敷石下部や壁石背部については未掘の状態で残されている。現地での調査作業は 12 月 28 日まで実施され、その後石室内部には土糞を詰め、6 号墳全体を埋め戻している。

第2章 G群3号墳の調査

1. 墳丘・周溝の調査

元岡古墳群G群3号墳は、1号墳と同じ丘陵の尾根線上に位置し、周囲の標高は現況で21～23mを測る。3号墳の周囲は現代の果樹園の造成により削平を受け、収穫物運搬用のレールが石室中央を貫通し、地形は大きく改変されていた。また、3号墳北西側の丘陵頂部は平坦に造成されており、平坦面では地山に掘削された複数の土坑やビットを確認したが、いずれも近・現代のものである（fig.5）。残された丘陵全体を精査したが、地山が完全に露出し、墳丘盛土は消失していた。

削平された丘陵の斜面部にはテラスが造成されているが、テラス部に周溝等の古墳の痕跡が残っている可能性を想定し、石室の南東側で丘陵の尾根筋に平行する方向にトレーニングを設定して確認を行った（fig.4）。その結果、丘陵全体は造成により大きく削平されて厚く盛土造成されており、墳丘盛土や周溝掘削の痕跡は確認できなかった。よって、この古墳の築造方法や墳丘の形態・規模など、墳丘に関する情報は全く得られなかった。

2. 主体部の調査

主体部は主軸方位をN-35°-Eにとる両袖式单室の横穴式石室で、丘陵に直行するように南西方向に開口する（fig.6）。後世の造成と石材の抜き取りにより、石室は大きく破壊されていた。

玄室の石材は奥壁1、左側壁2、右側壁1石が残り、床面の敷石はほぼ全面に残っていた。石材の抜き取り痕跡からみて、本来は奥壁が2列、側壁が3列配置されていたと推測される。玄門部の石材は全て抜き取られているが、抜き取り痕跡からみると、本来は第二框石が2石、両袖石が各1石存在していたと推測される。第一框石は、第二框石から約1mの位置にあり、2石の抜き取り痕跡が確認できる。床面は1面のみで、全面に扁平な石材を敷き並べる。以上により推定される石室の規模は、玄室が長さ2.05m、幅1.1mである。平面形態はほぼ長方形で、長幅比は1.86である。

3. 出土遺物

遺物は、玄室内から須恵器、耳環や玉類の装身具類が出土した。玉類は主に右奥壁付近に集中し（fig.8）、床面からやや浮くもの、床石直上にあるもの、および床石と床石の間にあるものがある。これらの玉類は、紐で連結されて頭位付近にあったものが紐の腐朽により散乱したものと考えられる。

1～3は須恵器である（fig.7）。1は平瓶である。口縁部と胴部は直接接合しないが、同一個体に復元される。復元口径7.0cm、最大胴部径19.6cm、復元器高14.8cmを測る。胴部は断面梢円形で

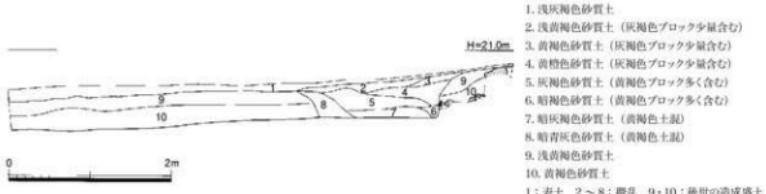


fig.4 3号墳前面トレーニング土層実測図(1/60)

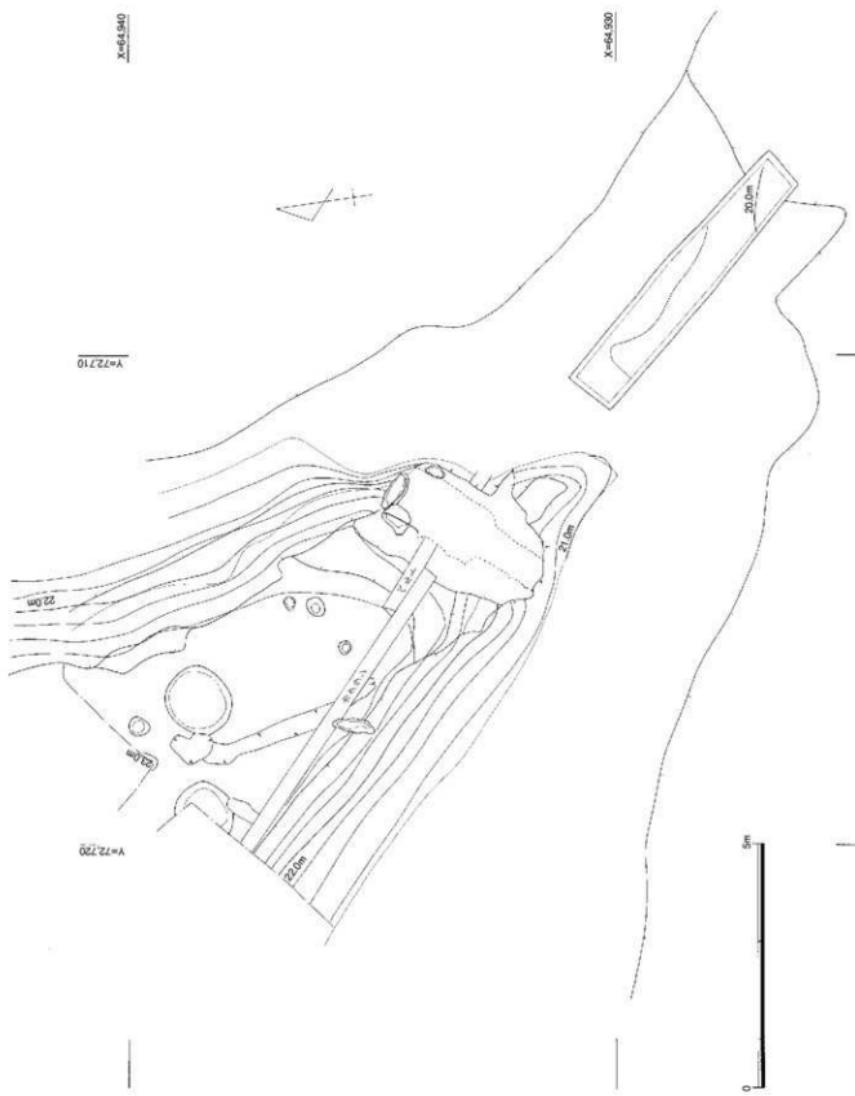


fig.5 3号墳全体図 (1/100)

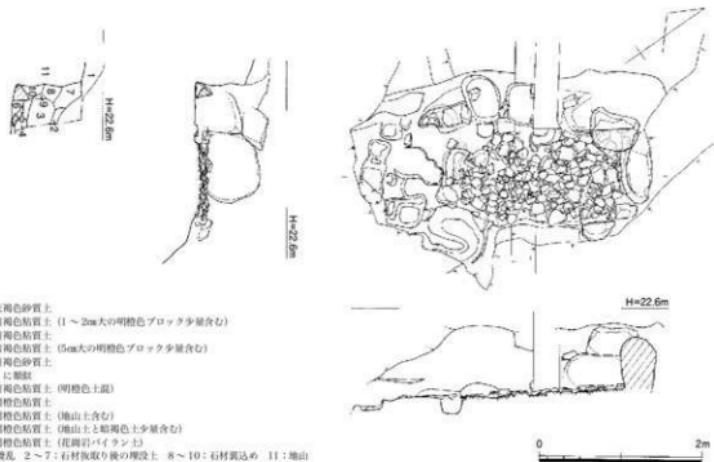


fig.6 3号墳石室実測図 (1/60)

丸みを帯び、底部は丸底と推測される。胴部外表面は叩き締めた後に横方向のカキ目を施し、胴部中央部付近は丁寧にそれをナデ消す。内面全体には平行線文の當て具痕跡が密に残る。胴部上面の内面はほぼ中央部には、円盤状の粘土で口を塞ぎ、指で丁寧に押さえた痕跡が確認できる。胴部から斜め方向に接合された口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く取める。接合部は内外面ともに丁寧に横方向にナデ調整する。玄室床面および左袖石抜取り跡から出土した。2は提瓶もしくは平瓶等の瓶類の口縁部片である。全体をナデ調整する。復元口径8.5cmを測る。玄室内出土。3は壊身の口縁部片である。受け部は比較的幅広く、やや下方へ下がる。全体をナデ調整する。玄室床面出土。

4~64は装身具類である (fig.9)。すべて石室床面付近から出土した。4は耳環である。外径は縦3cm、横3.4cm、内径は縦1.7cm、横2.0cm、厚さ7mmを測る。開口端部に絞り皺が見られることから、銅芯金薄板張と考えられる。5は滑石製勾玉である。紐孔部付近は紐ズレによるも

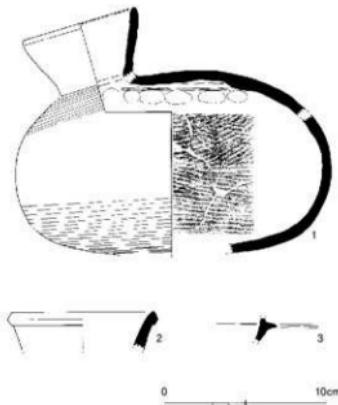


fig.7 3号墳出土土器実測図 (1/3)

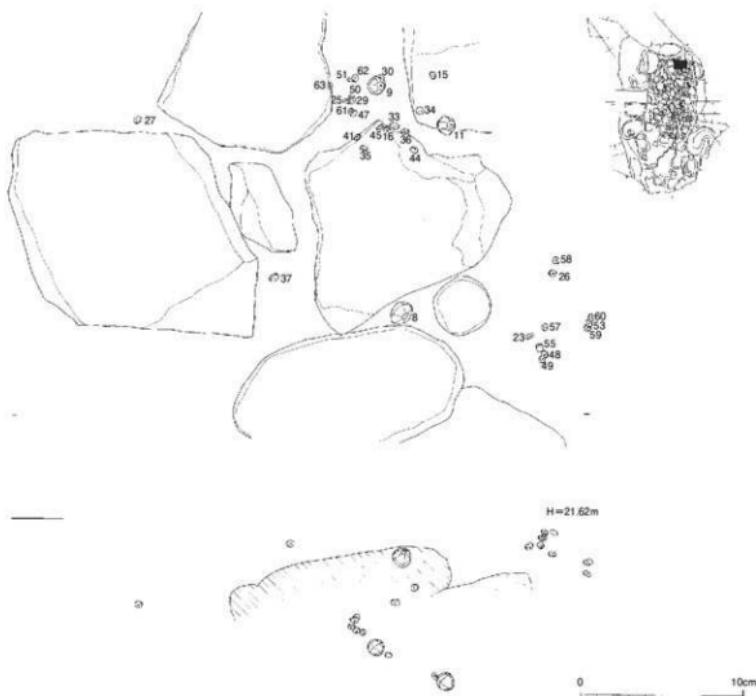


fig.8 3号墳玉類出土状況 (1/3)

のか摩耗する。6・7は水晶製の切子玉である。中央の紐孔は片側から穿孔されるため、片方の孔径が広くなる。8・9は瑪瑙製の算盤玉、10～12は丸玉、13・14は扁平な小玉である。15～64はガラス製の玉類で、15は管玉、それ以外は小玉である。16～22はカリガラス、それ以外はソーダ石灰ガラスで、後者が全体の85%を占める。平面・断面形態は、同じ成分のガラスであっても、丸みを帯びるもの、扁平なものなど変化に富む。

4. 小結

3号墳は後世の削平や石材の抜き取りにより大きく破壊されていたものの、石室の規模や形態がある程度復元可能であり、玄室内、特に頭位付近では玉類をはじめとした装身具類のセットを確認することができた。時期判別が可能な須恵器が少ないが、平瓶や壺身の形態は小田編年IV A期に属する。追葬の有無が不明であるため、この須恵器が初葬時のものか追葬時のものかは不明であるが、石室の形態が終末期古墳の様相を見せることから、6世紀末から7世紀初頭頃をこの古墳の使用時期の一点として捉えることができよう。

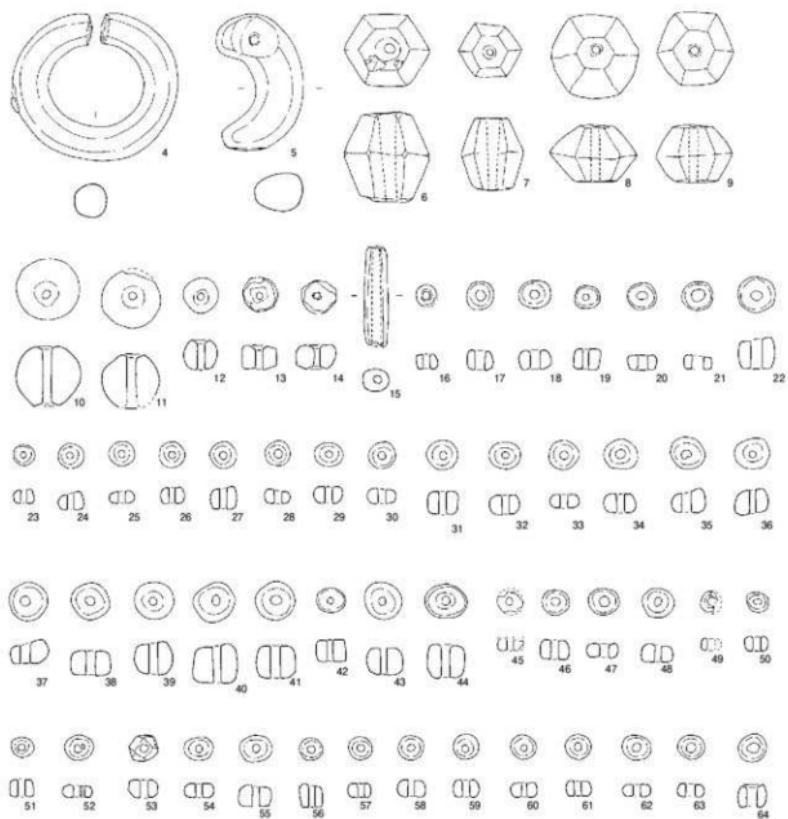


fig.9 3号墳出土装身具類実測図 (1/1)

tab.3 3号出土装身具類觀察表

fig.	No.	材質	種類	色調	(mm)			(g)	分析による所見	ガラスの種類	着色剤
					径	厚さ	孔径				
9	4	金剛	耳環	全	長34 幅30	6.5 ~ 7.0	—	—	—	—	—
〃	5	滑石	勾玉	灰	長27.5 幅10.0	0.8	1.5	4.856	1.776	—	—
〃	6	水晶	切子玉	透明	長18.5 幅17.5	14.5	2.0 ~ 4.0	5.431	2.040	—	—
〃	7	水晶	切子玉	透明	長14.5 幅12.5	11.0	1.5 ~ 3.0	2.525	0.946	—	—
〃	8	瑪瑙	算盤玉	赤	長18.0 幅17.0	11.5	2.0	4.057	1.545	—	—
〃	9	瑪瑙	算盤玉	赤	長16.0 幅15.0	11.5	2.0	3.396	1.296	—	—
〃	10	瑪瑙	丸玉	赤	13.0	12.0	1.5	2.604	0.986	—	—
〃	11	瑪瑙	丸玉	赤	12.0	11.0	2.0	0.397	0.156	—	—
〃	12	瑪瑙	丸玉	赤	7.0	6.0	1.0	1.936	0.736	—	—
〃	13	瑪瑙	小玉	赤	7.0	5.0	1.0	0.316	0.121	—	—
〃	14	瑪瑙	小玉	赤	6.0	5.0	1.0	0.325	0.128	—	—
〃	15	ガラス	管玉	緑	長21.0 幅5.0	4.5	1.5	0.971	0.258	鉛バリウム	—
〃	16	ガラス	小玉	淡青	4.5	3.0	1.5	0.050	0.021	カリ	銅
〃	17	ガラス	小玉	緑	6.0	4.0	2.0	0.142	0.063	〃	〃
〃	18	ガラス	小玉	緑	6.0 ~ 7.0	3.0 ~ 4.0	2.0	0.175	0.075	〃	〃
〃	19	ガラス	小玉	緑	4.5 ~ 5.5	4.0	1.0	0.153	0.068	〃	コバルト Mn+
〃	20	ガラス	小玉	緑	5.5 ~ 6.0	3.0	1.5 ~ 2.0	0.161	0.065	〃	〃
〃	21	ガラス	小玉	緑	6.0 ~ 6.5	3.0	2.0 ~ 2.5	0.120	0.048	〃	〃
〃	22	ガラス	小玉	緑	7.5	6.5	2.0 ~ 2.5	0.433	0.178	〃	〃
〃	23	ガラス	小玉	緑	4.5	3.0	1.0	0.077	0.027	低 Al ソーダ石灰 (植物灰)	コバルト Cu・Pb
〃	24	ガラス	小玉	緑	5.5	3.5	1.0	0.124	0.045	〃	〃
〃	25	ガラス	小玉	緑	5.5	3.0	1.0	0.100	0.038	〃	〃
〃	26	ガラス	小玉	緑	5.5	3.5	1.0	0.126	0.050	〃	〃
〃	27	ガラス	小玉	緑	5.5	4.5	1.0	0.164	0.063	〃	〃
〃	28	ガラス	小玉	緑	5.5	3.0	1.5	0.102	0.040	〃	〃
〃	29	ガラス	小玉	緑	5.5	3.5	1.0	0.139	0.050	〃	〃
〃	30	ガラス	小玉	緑	5.0	3.5	1.5	0.125	0.051	〃	〃
〃	31	ガラス	小玉	緑	6.0	4.5	1.5	0.248	0.097	〃	〃
〃	32	ガラス	小玉	緑	3.0	4.0	1.0	0.226	0.082	〃	〃
〃	33	ガラス	小玉	緑	6.0	3.0	1.5	0.158	0.056	〃	〃
〃	34	ガラス	小玉	緑	6.5	4.0	2.0	0.248	0.088	〃	〃
〃	35	ガラス	小玉	緑	3.5	5.0	1.5	0.322	0.127	〃	〃
〃	36	ガラス	小玉	緑	6.5	5.0	1.0	0.337	0.135	〃	〃
〃	37	ガラス	小玉	緑	7.5	5.0	2.0	0.362	0.144	〃	〃
〃	38	ガラス	小玉	緑	8.0	5.0	2.0	0.400	0.155	〃	〃
〃	39	ガラス	小玉	緑	8.0	6.5	1.5	0.538	0.214	〃	〃
〃	40	ガラス	小玉	緑	8.5	8.0	1.5	0.700	0.275	〃	〃
〃	41	ガラス	小玉	緑	8.0	6.5	2.0	0.557	0.220	〃	〃
〃	42	ガラス	小玉	緑	4.5 ~ 6.0	4.5	1.0	0.166	0.063	〃	銅
〃	43	ガラス	小玉	淡青	8.0	5.5	1.0	0.421	0.163	〃	
〃	44	ガラス	小玉	緑	7.0 ~ 8.0	7.0	1.5	0.546	0.214	〃	
〃	45	ガラス	小玉	緑	5.0	3.0 ~	1.0	0.080	0.028	低 Al ソーダ石灰 (ナトロン)	コバルト Mn+
〃	46	ガラス	小玉	緑	5.0	4.0	1.5	0.150	0.058	〃	〃
〃	47	ガラス	小玉	緑	5.0	3.0	1.5	0.110	0.042	〃	〃
〃	48	ガラス	小玉	緑	6.0	3.5	1.0	0.187	0.074	〃	〃
〃	49	ガラス	小玉	緑	4.0	2.5	1.5	0.040	0.018	高 Al ソーダ石灰	銅
〃	50	ガラス	小玉	淡青	4.5	3.0	1.5	0.079	0.035	〃	〃
〃	51	ガラス	小玉	緑	4.5	3.5	1.5	0.086	0.029	〃	〃
〃	52	ガラス	小玉	緑	5.5	2.5	1.0	0.095	0.038	〃	〃
〃	53	ガラス	小玉	緑	5.5	3.5	1.0	0.129	0.043	〃	〃
〃	54	ガラス	小玉	緑	6.0	3.0	1.0	0.107	0.041	〃	〃
〃	55	ガラス	小玉	緑	6.5	4.5	1.0	0.219	0.088	〃	〃
〃	56	ガラス	小玉	黄緑	5.0	4.5	1.0	0.121	0.045	〃	銅・鉛
〃	57	ガラス	小玉	緑	4.5	3.0	1.0	0.107	0.035	〃	コバルト Cu・Pb
〃	58	ガラス	小玉	緑	5.0	3.5	1.0	0.125	0.047	〃	〃
〃	59	ガラス	小玉	緑	4.5	3.5	1.0	0.135	0.063	〃	〃
〃	60	ガラス	小玉	緑	5.0	3.0	1.0	0.105	0.041	〃	〃
〃	61	ガラス	小玉	緑	5.0	3.0	1.5	0.118	0.045	〃	〃
〃	62	ガラス	小玉	緑	6.0	2.5	1.5	0.116	0.039	〃	〃
〃	63	ガラス	小玉	緑	5.5	2.5	2.0	0.078	0.031	〃	〃
〃	64	ガラス	小玉	緑	6.0	4.5	2.0	0.175	0.065	〃	〃

第3章 G群6号墳の調査

1.はじめに

「庚寅」銘大刀の公表直後より各方面からの問い合わせが殺到し、早急に事実報告を行う必要性があったことから調査成果の概要を新聞・雑誌に公開してきた。そのうち、『日本考古学』第34号に途中経過報告として古墳・出土遺物の概要を掲載することができた。その後、遺物の整理が進むにつれて新たに確認された遺物も多数現れ、これまで公表されていた内容と異なる事実が判明するものも出てきた。これまで公表された内容から大きく見直された点について以下に提示する。

1) 剔葬品について

『日本考古学』34号校了以降、鉄製品の検討が進むにつれて馬具や工具とみられる鉄製品が確認された。本書で報告している。

2) 象嵌について

大刀の銷落としの過程で、象嵌の一部が露出し、材質が金であることが確認された。詳細については後日報告される予定である。

3) 古墳の築造年代について

記者発表及び現地説明会時点では、古墳の築造年代を、玄室内出土須恵器の年代より7世紀半ばとしていたが、土器の洗浄・接合の結果、墓道付近を中心に7世紀初頭～前半の須恵器の小片が多数出土していることが確認されたことにより、この土器の年代を古墳築造の年代と考える。

2. 墳丘・周溝の調査

(1) 現況

古墳周辺をはじめとする元岡丘陵の大部分は戦後に果樹園として大規模に造成され、その際に斜面が階段状に整形されたことにより、旧地形はほとんど残っていない。その後多くの果樹園が廃業するなかで、これらの土地には竹がはびこり、現在では本来の植生すら遺存していない。

6号墳周辺も同様に一带に孟宗竹が生え、伐開後も周辺に竹株や地下茎が網目のように残されて調査時に大きな障害となった。古墳石材の一部も竹根によって本来の位置から動いている。

また、6号墳の北側には溜池が開削されている。この溜池は戦前に作られたもので、池の開削にあたって周囲の斜面を削ったことも考えられる。

古墳周辺は扇形に平坦面が形成されており、平坦面の西側は尾根に続く斜面に続く。平坦面の東側は谷に下りる斜面になっている。石室の天井石は、この平坦面の北東側端部にあり、あたかも造成段の土留め石のような状態で遺存していた。平坦面のレベルは標高26.5mで、天井石上面のレベルとほぼ同じであるため、現況では玄室天井の2石が地上に突出し、その他の天井石や壁石は地表面に露出していなかった。

調査着手時点では6号墳の存在自体が全く想定されておらず、当初設定されたトレンチも現況で露出していた玄室天井の2石を中心任意の方向で設定したものである。

(2) 墳丘

墳丘の遺存状態は極めて悪い。後世の削平が地山面付近まで及んでおり、墳丘盛土と確認できる土

層はごく一部しか遺存していない。したがって、墳丘の遺存状態を確認するために土層の確認を行い、地表面の整形痕を確認して墳丘の復元に努めたい。

調査着手時点で、地表に露出していた石材の性格を判断する目的を兼ねて南北方向と東西方向にトレンチを設定した。また、通常の古墳調査と異なり、墳丘の規模と範囲が全く見当がつかなかったため、石室南西部と南東部分にそれぞれ1本ずつトレンチを設定し、土層の堆積状況と墳丘盛土の確認に努めた。さらに北側の谷部の土層を確認するために石室北東側にもトレンチを設定した。

A トレンチ土層 (fig. 13)

墳丘主軸の西側に直交する方向に設定したトレンチで、天井石から平坦面の西側端部まで設定した。墳丘調査で最初に開削したトレンチで、トレンチ長は10.5mである。

土層の堆積状況を確認したところ、地表面から60cmの深さまでは表土である暗褐色土が堆積している。その下層で暗褐色粘土が水平に堆積しており、近世以前の堆積土と推定される。その下層で地表面を検出しており、古墳築造以前の旧表土はみられないことから、古墳築造後、古代～中世の時点で水平に造成されたとみられる。

トレンチ西側部分で周溝の一部を検出しており、周溝内は暗褐色粘土が水平に堆積し、その上部には西側斜面からの流入土砂が堆積している。周溝内の覆土や上部の堆積土とその上部の堆積層 (1・2・

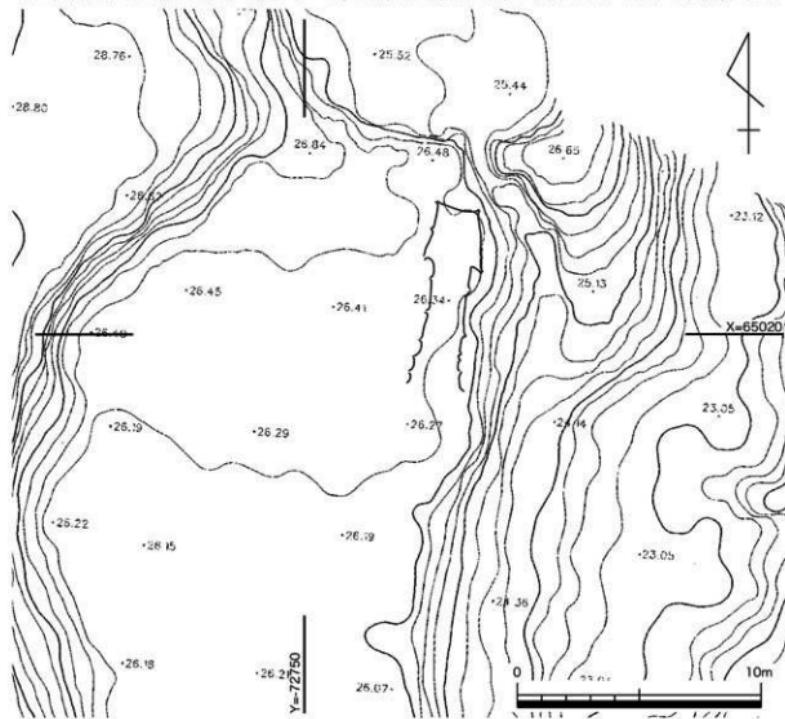


fig.10 6号墳周辺現況図 (1/200)



fig.11 6号墳墳丘測量図 (1/200)

6層)とは土質が全く異なり、両者の間に時間差や埋没環境の違いがあるものとみられる。

石室掘方部分では暗褐色土と褐色土を細かい単位で互層に突き固め、その上層では黒色土混じりの明褐色土を積み上げて墳丘を構築している(12・13層)。その上層は水成堆積層の様相を呈しており、墳丘削平後に自然堆積したものとみられる。

これらの堆積状況より、石室西側部分は墳丘構築後に削平を受けて墳丘盛土部分がほぼ完全に水平に削平され、石室上部が露出していたことが想定できる。

A-2 トレンチ土層 (fig. 14)

Aトレンチ北側の土層ベルト北面の土層で、Aトレンチ土層と2mの間隔をおいて並行する。土層壁面の西端が屈曲しているのは、竹株を避けたことによる。

地表から約75cmの深さまで暗褐色の造成盛土が堆積している状況はAトレンチ土層と同じである。その下層はAトレンチと異なり、粗砂・細砂を主体とする層が細かい互層で堆積している。これらの層は中世の溝状遺構SD-02の覆土とみられる。

西側周溝に該当する部分には最下層で黒色土が薄く確認でき、この部分が周溝の一部と考えられる。

この土層では墳丘盛土に関係する層は確認できない。

Bトレンチ土層 (fig. 15)

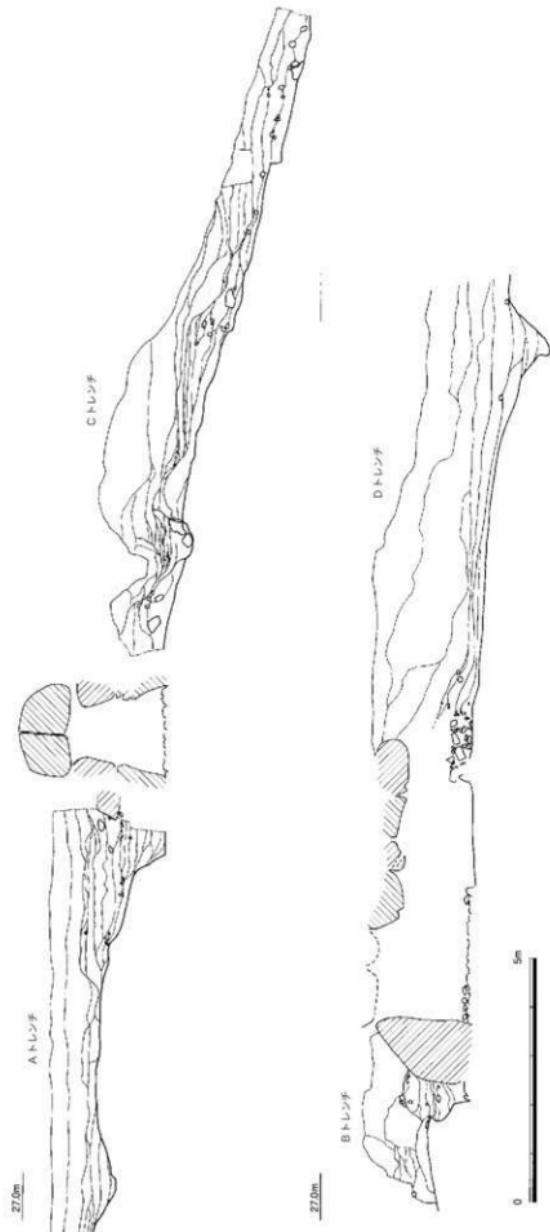


fig.12 A ~ D トレンチ土層概要図 (1/100)

石室北側に、墳丘主軸方向にそって設定したトレンチの東壁土層である。墳丘北側は溜池によって削られているため、トレンチ長は3.5mで短い。

堆積している土層は大きく4つのブロックに分けることができる。すなわち、上層の表土部分(1・2層)、ベルト北側の造成土部分(3～10層)、玄室奥壁背面部分(14～22層)、地山風化土部分(11～13層)である。

各層の堆積年代を考慮する上で最も重要なのが玄室奥壁部分で、粗砂・細砂・シルトを主体とし、流路状の様相を呈することと、下層から白磁碗破片が出土していることから、この層は中世の流路SD-02の一部と判断できる。他の土層は地山風化土層を除き、全てこの層よりも上層であるため、近世以後の堆積土とみなしてよいと思われる。

この状況から、Bトレンチで見られる土層には墳丘盛土をはじめ古墳に関する痕跡は全く残っていないと考えられ、中世の段階では玄室奥壁背面は下部まで完全に露出していたと見られる。

C トレンチ土層 (fig.16)

墳丘主軸の東側に直交する方向に設定したトレンチ

で、天井石から斜面裾部まで設定した。

堆積している各層はいくつかの群に大別可能である。第1層群として3層～9層の層群を挙げる。この層群は近世以降の流路SD-01の覆土で礫・粗砂を主体とする層である。第2層群の12層～22層の層群は中世の流路SD-02の覆土で、粗砂や礫を多く含む。

第3層群の31層～36層は砂質土を主体とし、斜面上部から流れ込んで堆積した状態を示す。第4層群の41層～52層は、自然堆積ではなく人为的に土盛りされた可能性が高い。粗砂や礫を多く含むなど墳丘盛土としては疑問が残るが、古墳築造に関連する層の可能性がある。ただし、層群の上面に旧表土を示す層ではなく、墳丘の原形はとどめていないと思われる。

第5層群として土層東側の各層がまとめられ、この層群は第4層群形成後、斜面上部から流れ込んだ土砂とみられる。最下層に堆積する黒色土は古墳築造以前の旧表土で、その下層の礫混じり明褐色土層は段丘礫層の一部である。礫は角礫で、葺石とは異なる。

第6層群として、石室東側の23層・24層を考えたい。この層群は土質・堆積位置からみて墳丘盛土であることが確実である。第4層群を墳丘盛土と考えた場合、この層群との土質の差異は大きい。

C-2 レンチ土層 (fig.17)

C レンチの北側に残した土層ベルト北面の土層で、C レンチ土層と 2m の間隔で並行する。

基本的層序は C レンチ土層と同じである。1層～7層は SD-01 覆土、11層～25層は SD-02 覆土に相当する。C レンチ第3層群に相当するのは 42層～47層、第4層群に相当するのは 48層～55層、第5層群に相当するのは 56層～60層である。第6層群に相当する部分については古墳保護のため掘削していない。また第5層群最下層の黒色土は上面のみ確認しており、下層まで掘削して

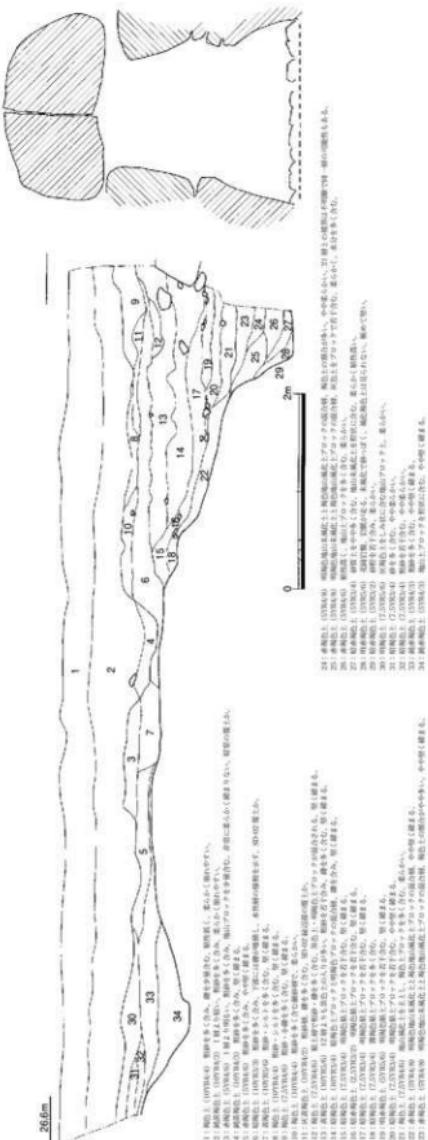


fig.13 A レンチ土層図 (1/50)

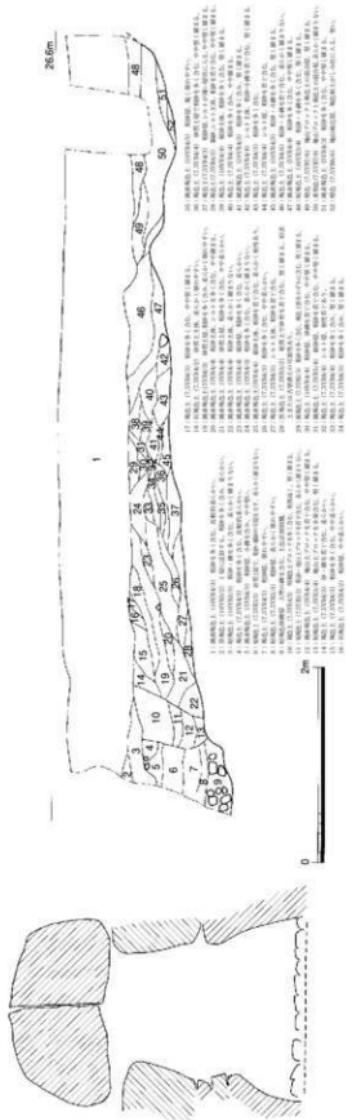


fig.14 A-2 トレンチ土層図 (1/50)

いない。

64層は、土質と堆積する位置や状況から墳丘盛土の一部の可能性が高いと考えられ、この部分まで墳丘造成が及んでいることが窺える。ただし墳丘の原形をとどめておらず、上面が水平に削平されたと考えられる。

E トレンチ (fig. 19)

石室南西側の包含層掘り下げの際に設定されたトレンチで、古墳墳丘部分から西側周溝、周溝外まで及び、トレンチ長は7.9mである。

表土から掘削された搅乱部分が多く、自然堆積を示す層は断片的にしか残存しない。地山上面層に堆積する暗褐色土・黒褐色土は古代から中世にかけての自然堆積層とみられる。トレンチ中央付近に西側周溝が位置し、黒褐色粘土の覆土を確認することができる。周溝覆土から周溝上層の包含層にかけて断絶がみられないことから、古墳築造以後に間断無く埋没したことを示している。また、この部分はAトレンチよりも地山面が低いためAトレンチで確認された中世以前の削平は下層まで及んでおらず、逆に近代以降の搅乱はAトレンチ付近よりも深く及んでいる。

F トレンチ (fig. 22)

石室南東側の掘り下げの際に設定したトレンチである。6号墳東側墳丘の遺存状態と地山形状を確認するために設定した。トレンチ長は13mである。

トレンチ西端はSD-01の東の土手状部分にある。トレンチ中央部に造成による平坦面が形成される。トレンチ西側では上層から薄褐色土（表土）、暗褐色土、灰褐色土の自然堆積層が重なり、最下層で古墳築造時の地表層とみられる黒色土が堆積している。黒色土の直上層の10層は古墳墳丘盛土の可能性が高い。ただし削平を大きく受けている、墳丘の形態はとどめていない。

トレンチ中央部の平坦面部分は、上層に表土層が堆積し、下層で粗砂・砂礫を多く含む暗褐色土が堆積する。この層は中世～近世の堆積層と考えられ、平坦面を造成する際に埋め込まれた土砂とみられる。トレンチ東端部分は表土下で灰色土が堆積し、上面が平坦であることから、この部分にも幅狭の造成段が形成されていたとみられ、中世～近世にかけて斜面を造成して

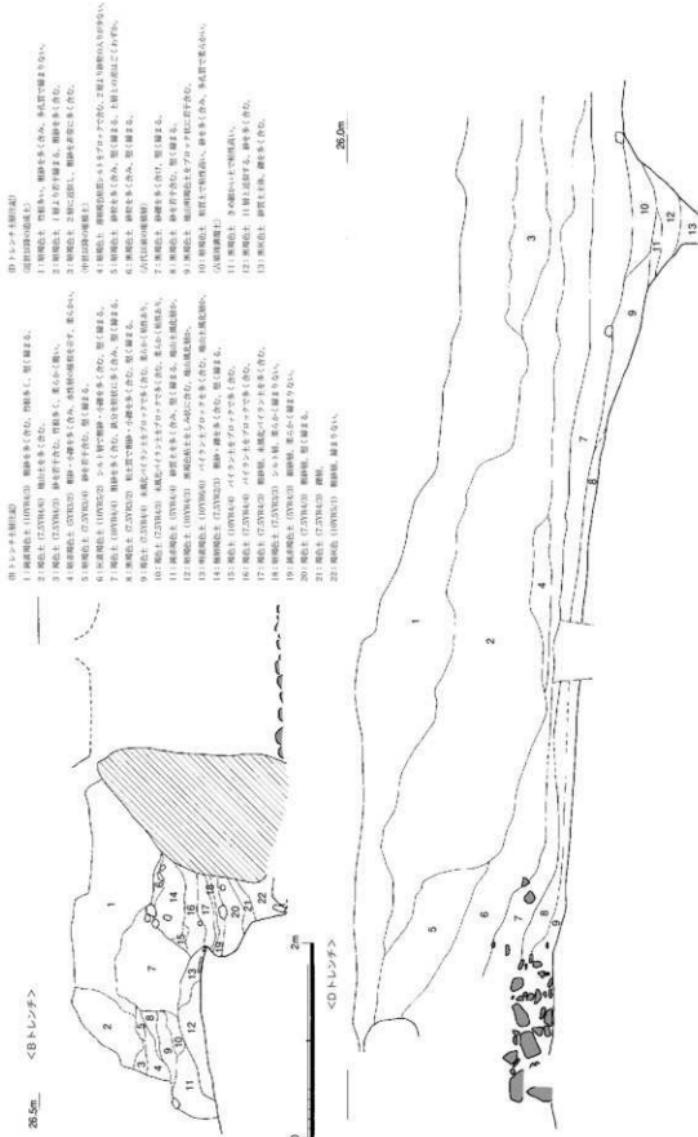


fig.15 B・D トレンチ土層図 (1/50)

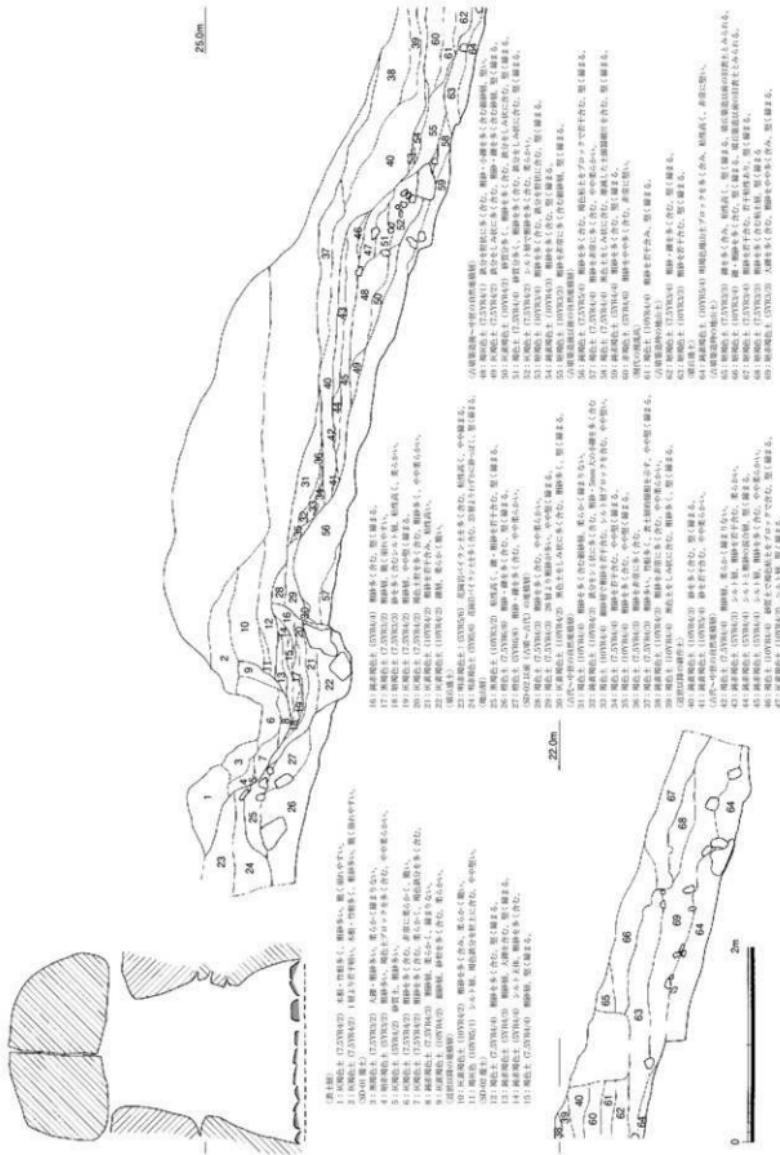


fig.16 C トレンチ土層図 (1/50)

いたことが考えられる。

G レンチ (fig. 20)

石室北東側を掘下げる際に、地山の位置と形状を確認するために設定したレンチである。レンチ東端は SD-01 の東に設けられた土手状の部分にある。

G レンチの土層は表土下層で暗褐色～灰褐色土の各層が堆積し、いずれも斜面上部から下部に流れられた状態で堆積している。12 層は黒色土層で、これまで見た各レンチと同様に古墳築造以前の地表層とみられ、このレンチで見られる土層では墳丘盛土の可能性がある層は 11 層の暗褐色粘質土だけである。この層も築造時の墳丘形状はとどめず、墳丘の大半が削平されたものと考えられる。

H レンチ (fig. 21)

G レンチ北東側の、谷部分に設定したレンチで、段丘端部の位置と谷部埋土の確認のために設定した。

1～3 層は溜池の

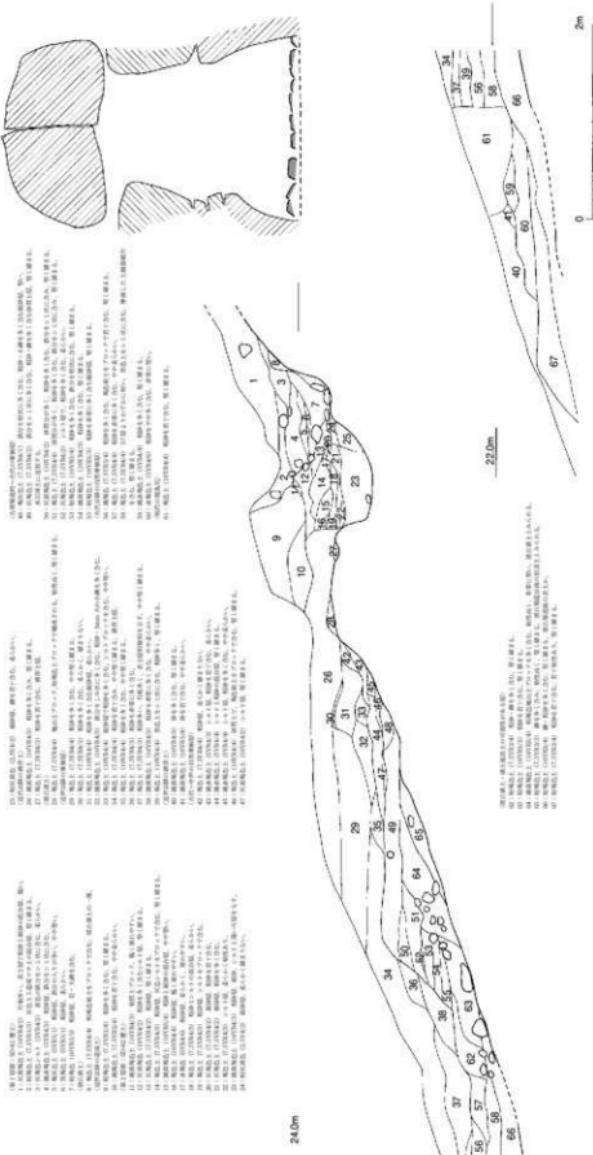


fig.17 C-2 レンチ土層図 (1/50)

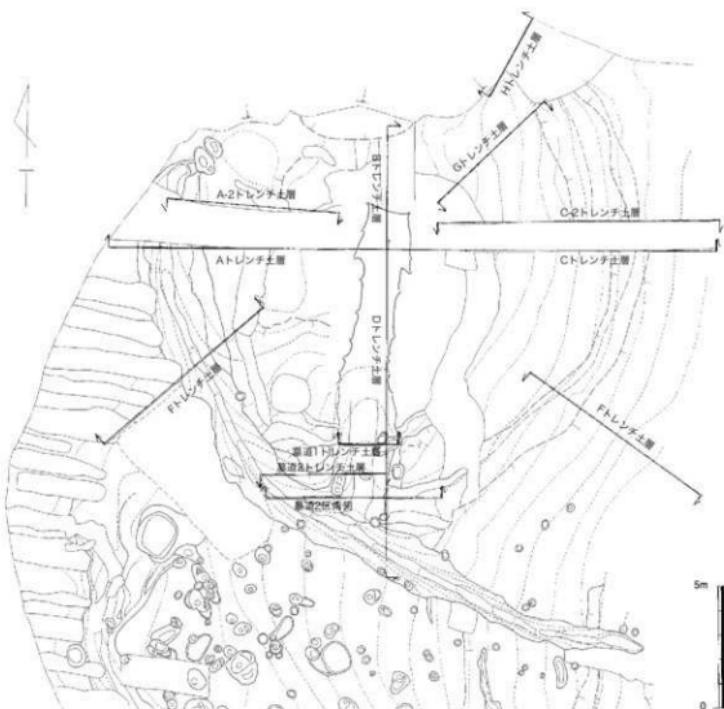


fig.18 墳丘トレンチ配置図 (1/200)

築堤部分にあたり、近代以降の造成盛土である。4～6層が丘陵上の堆積土とみられ、4層は古墳時代以後の堆積層、5層以下が古墳築造時の地山土とみられる。溜池に近いため、全ての層の土質が軟弱で、一部グライ化している。

以上の各トレンチの土層観察より、次の結果が得られている。

- 1 墳丘盛土はほとんど遺存していない。
- 2 墳丘西側は中世頃に大きく削平され、石室の天井石や壁石が露出していたとみられる。
- 3 中世には墳丘西側から玄室背面を回るように流路が延びており、この部分の墳丘は完全に失われていたと考えられる。
- 4 各トレンチで墳丘盛土とみられる明褐色土が検出されている。面的な広がりは調査時の判断ミスにより把握できていない。

次に、土層以外の、地山面に残された墳丘の痕跡について確認する。墳丘南側の墓道端部付近では浅い溝状の造構と段がつくられている。この整形痕跡が墳丘端部を示すものと考えられ、段落ちと溝

26.4m



fig.19 E Trench Soil Profile Map (1/50)

25.3m

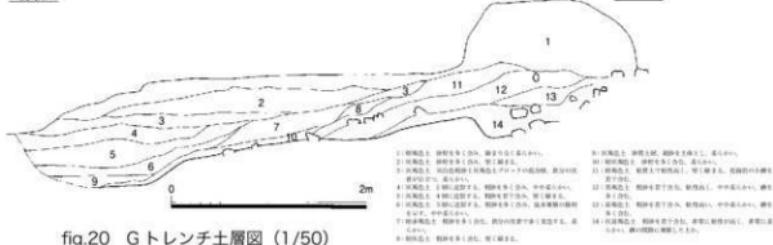


fig.20 G Trench Soil Profile Map (1/50)

24.4m

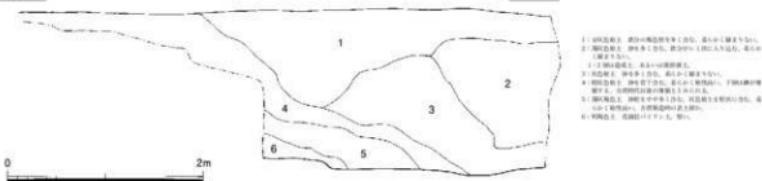


fig.21 H Trench Soil Profile Map (1/50)

状遺構の下端は5mの長さで東西方向に直線的に連続する。この部分から埴丘東側部分にはごく僅かな高低差がついた段造成の痕跡がみられる。この段造成は石室を中心として円弧を描くように北側へ回り、またCトレンチ部分では埴丘盛土の可能性をもつ第4層群の端部を経由する。これらのことから、この段造成が古墳築造に関連する可能性は高いと考えられる。

(3) 周溝

周溝は埴丘西側と南側で遺存している。埴丘西側の周溝はAトレンチ北側土層壁面付近で端部を確認することができ、そこから直線的に南東方向に延びる。さらに周溝は埴丘南端付近で東に屈曲し、狭道入口から延びる墓道と接合して、南東方向に延びる溝状の通路につながる。周溝の西側端部床面と南側墓道前面との比高差は2.6mで、斜度が強い。

周溝の断面は南側部分でV字形に近い箱形を呈し、西側端部付近で浅いV字形になり、周溝下部ほど壁面の傾斜が急になり、遺構面からの深さも深くなる状況が看取できる。これも流水による浸食

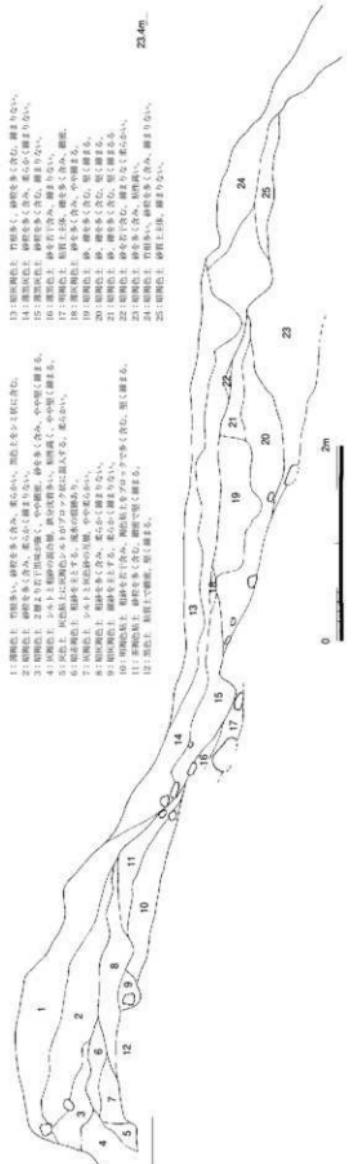


fig.22 F レンチ土層図 (1/50)

の影響と考えられる。

墳丘西側の周溝は極めて直線的で、古墳前面に見られる浅い溝状の段も直線的である。この部分だけをとれば、墳形は多角形墳ととれなくもない。しかし墳丘東側にわずかに残る地山整形の痕跡を見ると、この部分は円形に近い形状をとる。古墳時代後期から終末期にかけての小型墳は丘尾切断部分・地山整形部分が直線的になるものも少なからず見られることから、この6号墳についても丘陵尾根部の整形において直線的な造作をとったものと考えるのが適当であろう。

(4) 墓道

ここでは、漢道入り口から南側に直線的に延びる部分を墓道として説明する。墓道端部から谷下部へ下りる溝状の以降は「溝状通路」として、墓道とは別にする。

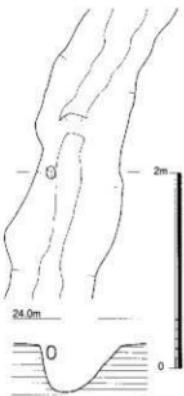
墓道は長さ 5.2m、幅 2.4m、深さ 30 ~ 40cm で、漢道入口から直線的に南に延び、西側周溝と溝状通路に接続する。断面形は浅い U 字形で、東西両側の斜面の傾斜は緩い。

墓道の土層断面を見ると、最下層に粘性の高い黒褐色粘土が堆積し、その上層に暗褐色土、さらにその上層に近世以降の盛土層が堆積する。黒褐色土層は周溝埋没後の堆積で、古墳築造後ある程度の期間が経過した後に堆積したものとみられる。黒褐色土層からは追葬の次数を示す痕跡は確認できないが、この層より古墳に供献されたとみられる須恵器・土師器の破片が多数出土している。

(5) 溝状通路

漢道から南に延びる墓道とは形状が全く異なり、区別すべきと考えたため、墓道と別に述べる。

断面形状は V 字に近い箱形で、床面は平坦面を呈し、両側の壁は急な傾斜で立ち上る。墓道前



面部分と東側端部の床面の比高差は1.8mで、東に向けて急傾斜で下っている。

この遺構の機能を考えると、谷から古墳へ登る墓道的なものと想定できるが、墓道入口南側の墓道とは段差を有し、西側周溝と一緒になっている形状であることから、この古墳1基の墓道という用途にとどまらない機能を持つ可能性も考えられる。

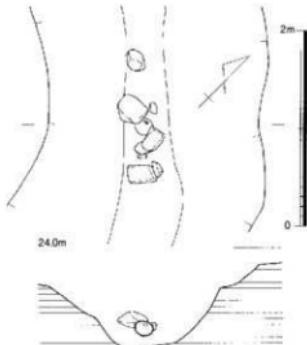


fig.24 周溝内土器出土状況2 (1/50)

3. 主体部の調査

主体部となる石室は、大型の石材を使用して構築されており、最も巨大な奥壁の石材は高さ1.8m、幅1.8m、奥行1.4m以上の大きさである。石材の材質はほとんどが花崗岩で、周辺から持ち寄ったものとみられる。使用されている石材は転石をそのまま使用したものが多く、加工痕は見られない。ただし壁面に平坦な面をもつ石材が多いことから、石材を加工した後に全体を丸く整形したものもあるとみられる。

(1) 玄室

石室は両袖单室である。玄室は初葬時の床面を基準として、北壁幅1.68m、南壁幅2.39m、東壁幅2.50m、西壁幅2.41mである。奥壁から棺石までの距離は2.65mを測る。平面プランは台形を呈し、南東隅と南西隅は鋭角に入り込む。玄室高は1.8m、天井幅は70~80cmで、断面形は上部が狭い台

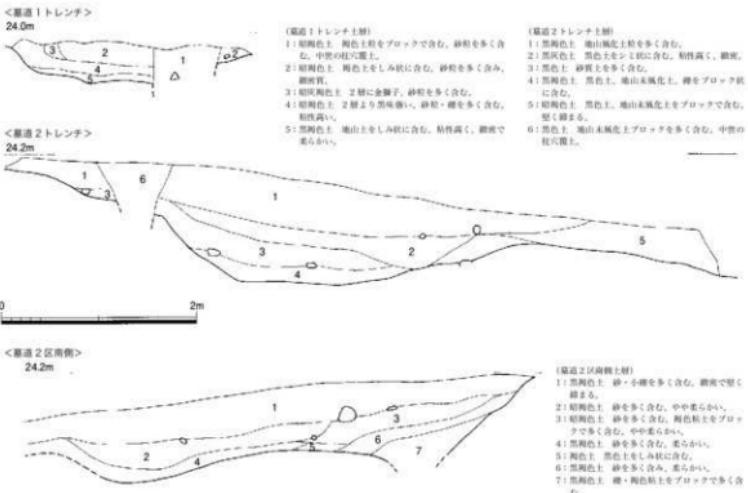


fig.25 墓道トレンチ土層図 (1/50)

形を呈する。奥壁幅は羨道幅とおよそ一致しており、石室全体が羨道から玄室奥壁まで一定の幅をもつ長方形を指向し、これに袖部の張り出しがつくものと考えることもできる。

石室内部の堆積状況は、床面から築造直後に堆積した暗褐色土が約20cmの厚さで堆積し、その上層に中世に堆積した黒色粘土が5~10cm堆積する。中世の黒色土は炭化物を多く含み、玄室ほど厚く堆積し、玄室内で盛んに火を焚いていたと考えられる。黒色土の上層は暗褐色土や薄褐色土で砂質分が強く、壁石の間隙から流入した土砂である。上層中には壁石や天井石から剥落した石材破片が多数混入している。

床面は計3面の敷石が確認できる。上面より第1面として中世の石敷き面が確認できる。第1面の敷石は玄室全体に配置されているが全体に疎らで、使用石材も大きさが揃わないなど、「敷きつめた」印象は受けない。また、石材自体に強く被熱した痕跡は認められない。

第1面の下部30cmで第2面の敷石面、その直下に第3面の敷石面を確認し、第3面の敷石下で地山面を確認したことから、第3面は最下面で初葬時の敷石面と考えられる。第2面の敷石面は奥壁側と西壁側に集中しており、敷石上面のレベルは一定しているが敷き方は粗く、隙間が目立つ。第2面が埋葬面として単独で成立したものではない可能性もある。また、第2面上に副葬遺物が全く存在しない点も、この面が果たして独立した埋葬面として成立していたかどうか疑問が残る。このことから第2面の敷石は遺体の安置部分などに補助的に敷かれていたということも考えられる。

第3面の敷石は、玄室床面全体に敷かれており、この面が古墳時代の埋葬面である。敷石の石材は

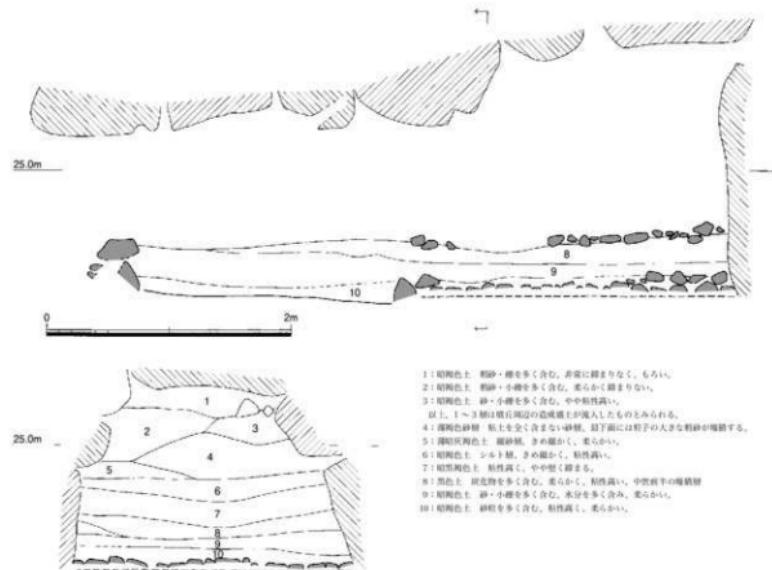


fig.26 石室内部土層図 (1/40)

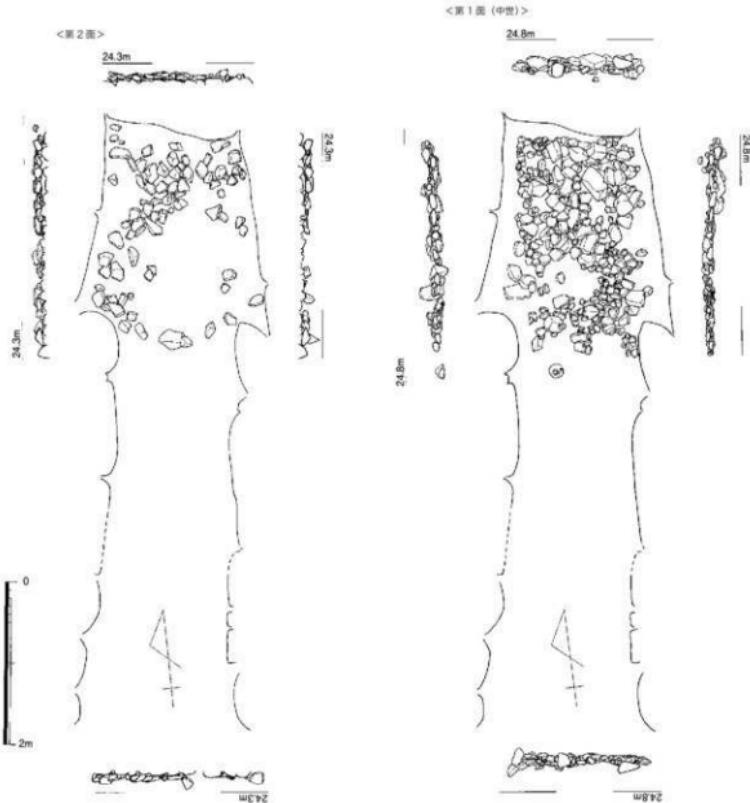


fig.27 玄室第1面（中世）・第2面敷石実測図（1/60）

円礫と角礫の両方が使用されており、加工痕のある石材は見られない。石材の材質は花崗岩が多いが、玄武岩や変成岩も少量使用されている。玄室奥壁側に比較的大型の石材が使用され、渓道側の敷石は小型の石材が多いが、両者の間に明瞭な境界は見られない。玄室南東部は他の場所に比べ隙間が目立つが、この部分については敷き直しということも考慮する必要があろう。

奥壁は鏡石1石を据えており、内側の壁面は直立する。壁面は前述した中世の焚火により表面が剥落し、一部黒変する。左右壁面は腰石に大型の石材を使用し、その上に小型の石材を使用してレベルを整え、その上段に大きめの石材を置き、天井石を据えている。3段積みに見えるが中段は上段のレベルを調整するための積石で、実質2段積みといえる。天井石は2石で、側壁と天井石の位置がほぼ対応し、縦方向の石積みを指向していることが窺える。側壁にも奥壁と同様、黒変する部分があり、天井石は内面全面が黒変していることが認められた。

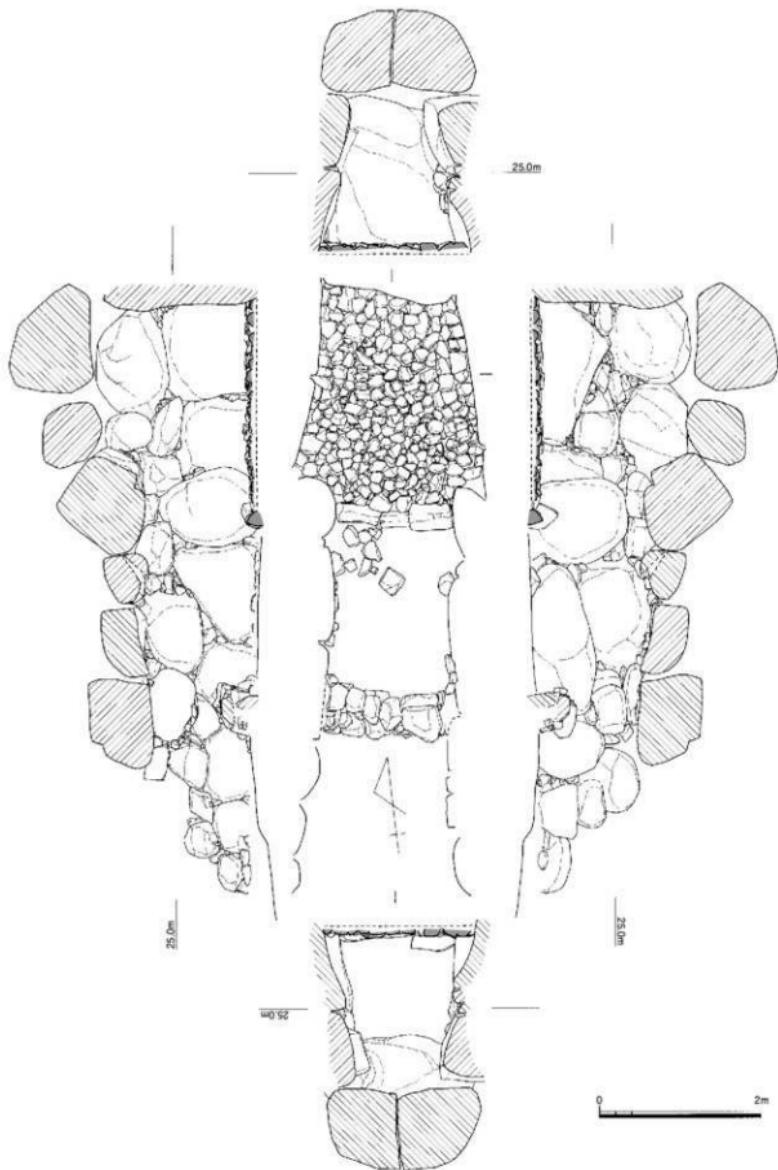
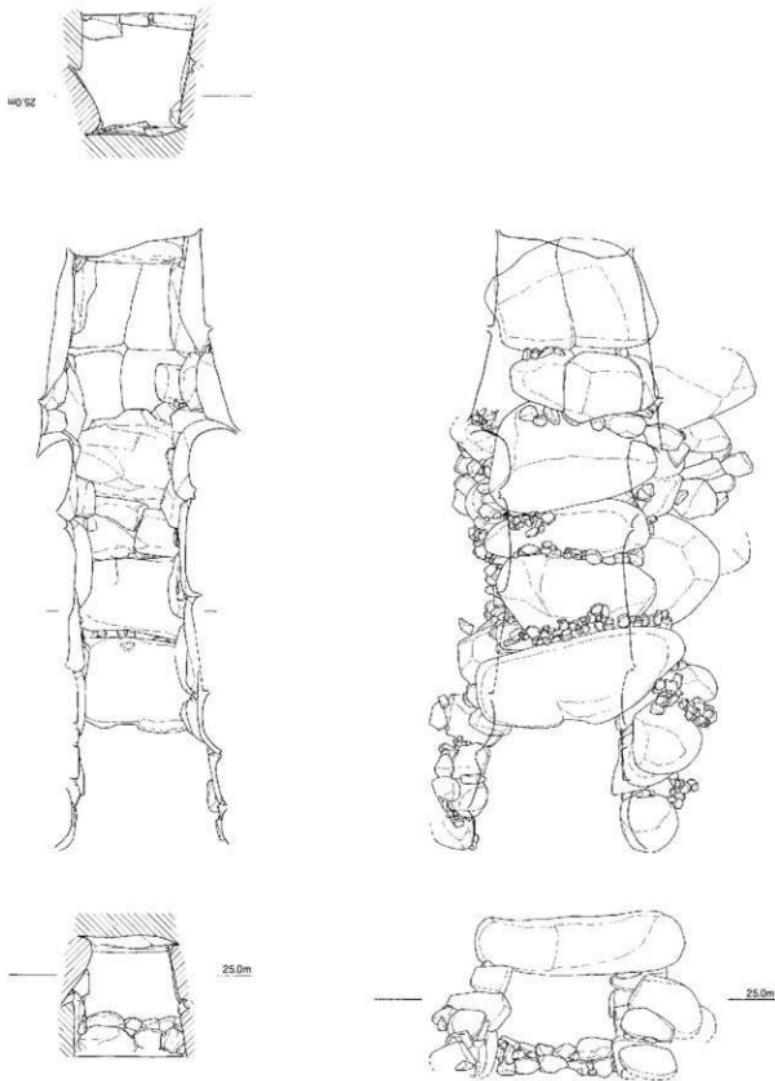


fig.28 石室



実測図 (1/60)

(2) 渓道

渓道は玄室側幅 1.45m、渓道入口部幅 1.50m、渓道端部幅 1.85m を測り、玄門から渓道入口まではほぼ一定幅で延び、外側で広がる平面プランを呈する。また、天井高は玄門部で 1.5m、渓道入口部で 1.4m である。天井部幅は 1.1m で床面幅よりも若干狭く、渓道は断面四角形の筒状を呈する。

床面には敷石ではなく、地山を削りだして床面としている。約 40cm 大の方形の石材が主軸上の地山面直上に置かれており、その左右両壁際にも約 40cm 大の石材が設置されている。この 3 石についてとはその配置から、意図的に置かれた可能性も考えられ、渓道での祭礼に際して標識や区画などの目印として使用されたことも想定できる。玄室と渓道との境界には欄石が 3 石配置され、石材は棒状で、右端の石材頂部で床面から 35cm の高さを測る。調査時点では渓道の欄石側には玄室から掻き出されたとみられる石材が欄石上端の高さまで積み上げられており、渓道全体に玄室内から出されたとみられる石材が散乱していた。これら玄室から出された石材の下部には暗褐色土が地表面まで堆積しており、築造後一定期間が経過して土砂が堆積した後に玄室床面から石材が剥ぎ出されて放置されたものとみられる。

渓道の左右両壁は、大型の腰石を基底部に据え、その上部に 2 段目の石材を積み上げる。石材は玄室に使用されている石材と遜色ない大きさで、玄室から渓道まで袖石を挟んで同じ様相を呈しており、玄室と渓道の構造上の一体感を示している。

渓道天井部は計 4 石を使用しており、横に長い石材を並列して構成している。天井石も転石を使用しており、石材の高さが高く、重厚である。渓道入口から 3 石目の石材は土圧で断裂している。

(3) 閉塞施設

渓道入口部に幅 1.5m、奥行 1.7m、高さ 60 ~ 95cm の規模で、石室の閉塞施設として石積みが遺存しているのが確認できた。この上層で拳大の石材が床面から 1m の高さまで堆積していたが、上層の石材は土砂と混在しており、この部分は墓道周囲からの落ち込みによる堆積と判断し、覆土中の陶磁器から堆積時期を中世前半以後と推定した。渓道入口高から判断すると中世の段階で 90cm ほど開口し、この部分から石室内部への出入りを行っていたとみられ、その後疊混じりの土砂が近世までに堆積し、その上部は近世以降の造成の際に埋没したものとみられる。閉塞施設の調査は上層の近世以降の土砂を取り除き、中世以前より遺存していた部分について検討を行った。

石積みは中央部が低く壁際が高い状態で遺存しており、中世前半の段階にこの部分まで石積みを崩して通路にしていたと推定された。墓道側の積石は拳大の石材と 30cm 大のやや大きめの石材が混在しているが、大きめの石材は本来渓道側に整然と積み上げられていた石材と考えられ、中世に開口した時点で手前に引き倒された状態になったものであろう。壁際の石材は比較的高い位置まで石材が遺存しており、渓道側の部分では大きめの石材が積み上げられており、当初は全体がこの状況で渓道入口部を閉塞していたと考えられる。

手前側の拳大の石材を除去すると、石積みの基底部として 2 段の石積みを確認した。高さ約 50cm、奥行約 60cm で、1 ~ 2 列の石材を 2 段積みで低い石壙状に構築している。上面のレベルが揃っていることから、この部分だけで完結した構造体と推定される。この基底部を基準に閉塞石を積み上げたことは疑いなく、この基底部のラインが古墳内部と外部の境界に想定されていたと考えられる。



fig.29 閉塞施設実測図 (1/40)

4. 出土遺物

(1) 玄室

1) 上層出土遺物 (fig. 30)

玄室内の中世に堆積した黒色土層中より遺物が出土している。これらの遺物は中世前半の時点で石室内に侵入し、石室内部で焚火を伴う行為を行った際に持ち込まれたものと考えられる。以下、この層で出土した遺物と、閉塞施設上部から出土した古代～中世の遺物を紹介する。なお、小片の資料でも極力図示することに努め、図示可能な資料は殆ど掲載している。

1～3は青磁碗。1は黒色土層中に倒置されて出土し、ほぼ完形であるが、口縁部の一部は玄室埋土を全て水洗した後でも見つからず、故意に割られて持ちだされたものとみられる。体部は直線的に立ち上がり、底部見込みに段がつく。高台は厚く作られる。内面に花文が片彫りで描かれ、外面は無文。釉は緑色透明で厚く、疊付や高台内側まで釉がかかる。2は玄室と墓道から破片が出土し、破碎後に破片を石室内外に分散させたとみられる。外面に鷄蓮弁文を片彫りで描き、体部は緩く開く。釉は半透明の薄青緑色で厚く施され、高台直上まで釉が確認できる。3は同安窯系青磁碗で、墓道入口上層と墓道から出土した他、石室外北側のSD-02内からも出土しており、破碎された後に破片を広範囲に散布させた可能性が高い。体部が丸みをもって開き、外面に縱方向の櫛描文、内面に櫛描文と片彫りの線文を施す。釉は緑色で透明。やや薄めに施釉され、外面は体部下部まで釉がかかる。

4～8は白磁碗。4は全体が復元できた。体部が直線的に開き、口縁端部がごく短く外反する。高台は高く削り出す。釉は乳白色でごく薄く、外面は体部下部まで施釉される。内面に沈線が2条回る。5は体部のみの破片で、体部はやや丸みをもって開き、口縁端部はごく短く外反する。釉は白色でガラス質で半透明。器壁に薄く施釉され、外面は体部半ばまで施される。6は口縁部に玉縁をもつもので、玉縁は太く作られ、体部は直線的に開く。釉は薄緑白色で薄く施され、外面は体部中位まで、内面は体部下位まで施釉される。7は底部破片で、高台は低く太く、高台内面は厚く削り出される。体部はやや丸みを帯びる。釉は白色半透明で、外面は胴部中位まで施釉される。8も底部破片で、墓道入口上層から出土した。高台は高く厚く削り出す。釉は薄黄橙色で外面は体部中位まで施釉される。内面見込みは1段低く削られる。

9・10は土師器塊。9は玄室上層出土破片と墓道出土破片が接合したもので、完形に復元できた。体部は低く開き、口縁部はやや厚みをもつ。高台は低く貼り付けられる。外面は回転横ナデ調整、内面は摩耗のため調整不明。胎土は灰色～橙色を呈し、軟質で風化が進む。10は底部破片で墓道から出土した。高台は断面三角形突帯状で非常に低く、高台内面は接地する。体部は丸みを持つ。胎土は薄灰褐色で、内外面とも風化が著しく、外面調整は不明。

11・12は土師器坏。11は古墳時代の可能性もあるが、玄室黒色土層中から出土したためここに掲載する。体部は直線的に開き、底部はレンズ状を呈する。外面底部は回転ヘラケズリ、体部は回転横ナデで調整する。12は底部破片でやや大型。破片は玄室と墓道に分散する。底部は回転糸切りで、体部は回転横ナデ整形。内面は回転ナデ。

13～15は土師器皿。13は小型で、玄室出土。体部が直立に近く、器壁が厚い。底部は回転糸切りで、体部は回転横ナデ。14は墓道出土で口縁部がわずかに外反する。底部は回転糸切りで体部は横ナデ。15は大型品で、玄室・墓道からの出土。風化が進み調整は不明だが、底部は回転糸切りとみられる。

16～18は捏鉢で、いずれも墓道からの出土。16は口縁部が内湾し、外面口縁直下に段を持つ。胎土は暗赤褐色で細かく、焼成は良好。17は口縁端部断面が撥状に太くなる。体部は直線的に開くと

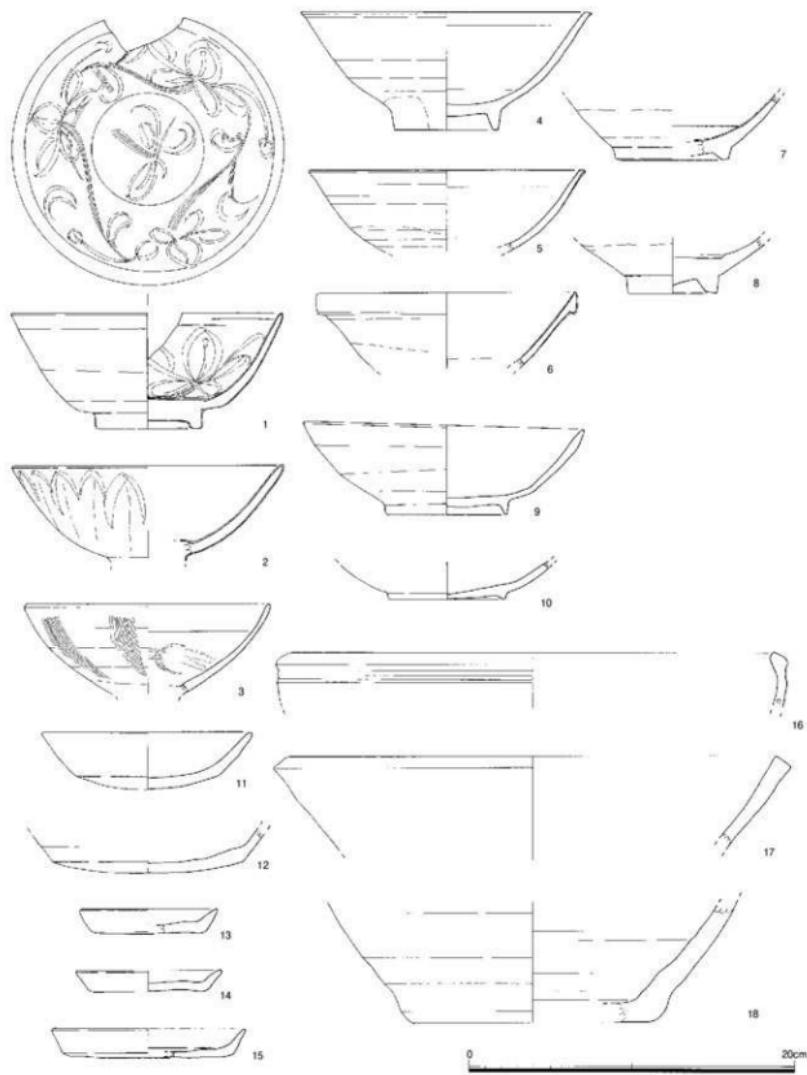


fig.30 玄室・羨道内出土中世遺物実測図 (1/3)

みられる。胎土は薄明褐色で風化が著しい。18は底部破片で、外面に緑色釉の垂れがみられる。胎土は暗赤褐色で硬質。内外面とも回転横ナデ調整。

2) 玄室床面付近出土遺物

黒色土層下面以下の暗褐色土中、および敷石隙間より出土した須恵器・土師器・玉類を掲載する。玄室出土鉄器については後項で述べる。fig.32は土器、fig.33～35は玉・装身具である。

19は土師器壺で、右袖石と敷石の隙間に挟まった状態で検出された。検出状態からみて、敷石の敷設時に後述する鉄鎌2点と同時に配置されたものと推定される。底部はレンズ形で体部は直線的に開く。胎土は明赤褐色で表面の剥落が著しく、脆い。

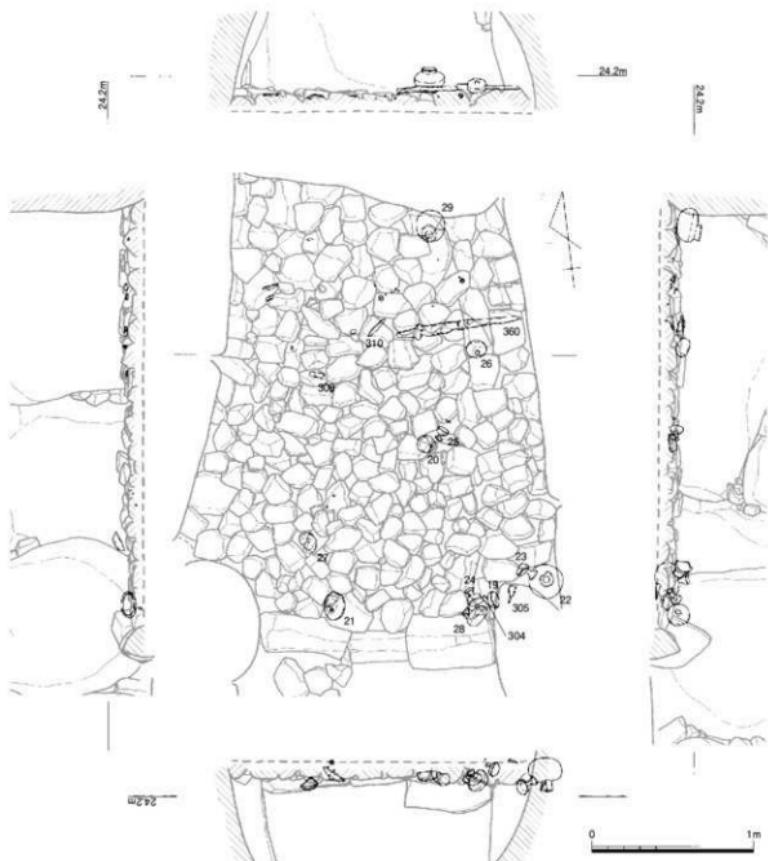


fig.31 玄室内遺物出土状況図 (1/30)

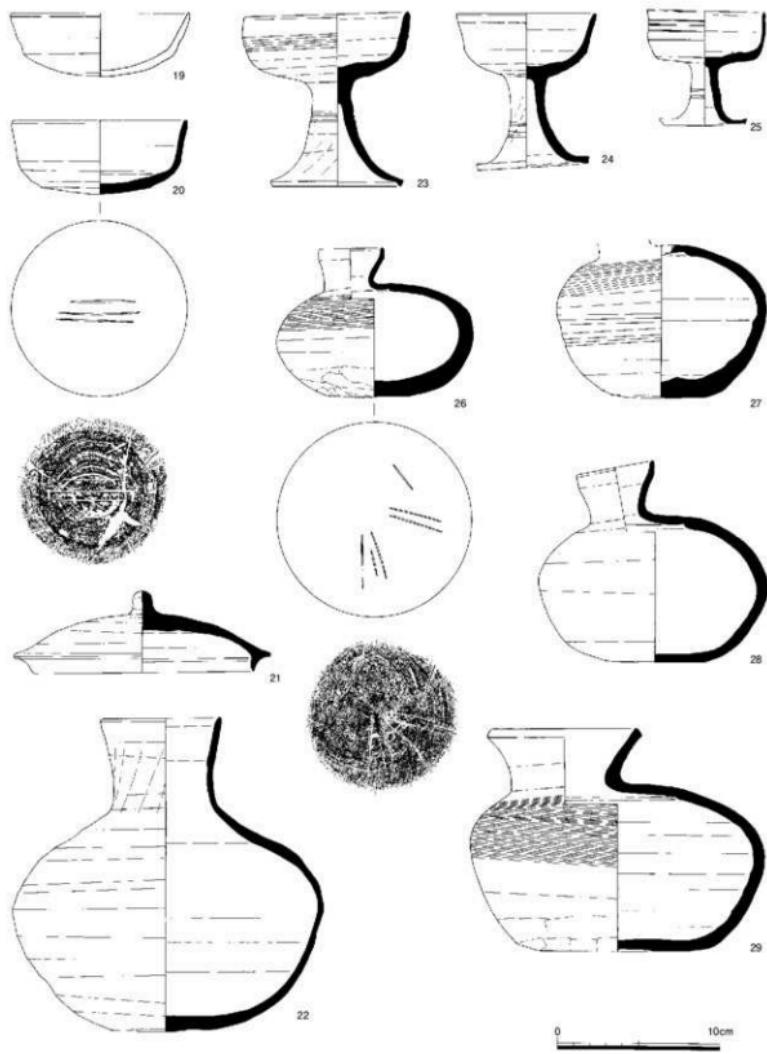


fig.32 玄室内出土遺物実測図 (1/3)

20は須恵器壺で、大刀南側に倒置されていた。体部は直立し、底部はレンズ状を呈する。底部外面は回転ヘラケズリ、体部外面は回転横ナデ。底部に平行線のヘラ記号がつく。21は漢道出土壺160 (fig. 37) の蓋とみられる。摘みは円頭形で、体部は低く、受け部の立ち上がりは高く直立する。体部外面は回転ヘラ削り、口縁部付近と内面は回転横ナデ。22は須恵器壺。器壁は薄く、頸部は細く絞って成形される。体部はやや肩が張り、底部は丸みを帯びる。底部付近は回転ヘラケズリ、胴部中位以上は回転横ナデ。外面に灰被りによる自然釉が点々と付着する。

23～25は須恵器高杯。23は玄室内出土の個体に漢道出土の小片が接合した。壺部の器壁がやや厚く、外面に2条の沈線、脚部にも2条の沈線があり、成形時の絞り痕が見られる。壺底部付近は回転ヘラケズリ、他の部位は回転横ナデ。24は体部が直立し、脚部に2条の沈線がある。壺底部付近は回転ヘラケズリ、他は回転横ナデ。25は壺部外面に4条の粗い沈線があり、脚部にも2条の沈線がある。脚部は小さく、下部で外側に強く開き、脚端部は幅広に面取りする。

26～29は須恵器平瓶。26は小型で、体部は丸く、最大径は胴部中位にある。頸部は直立し、口縁部は内湾する。胴部上位にカキメ、胴部中位は回転横ナデ、胴部下位から底部は静止ケズリで調整し、底部には2種類の工具によるヘラ記号が刻まれる。27は玄室と漢道から出土した破片が接合した。頸部破片は覆土洗浄でも見出せず、石室外に持ち出されたとみられる。体部上部には横方向の粗いカキメが施され、胴部中位には幅広の段が作られる。胴部下位は回転ヘラケズリで、底部は回転ヘラケズリ後粗いナデを施す。やや肩が張り、胴部最大径は胴部上位にある。28は口縁が内湾し、端部は丸める。胴部は丸みをもち、最大径は胴部中位にある。胎土は灰白色を呈し軟質で、外面の剥落が著しく外側調整は不明である。底部はヘラ切りとみられる。29は玄室奥壁際で正位置で出土した大型品で、原位置を保つ。口縁は外に大きく開き、端部は面取りされる。胴部は肩が張り、胴部上位に横方向のカキメを施す。胴部中位は回転横ナデ、下位は静止ケズリで粗く仕上げる。底部は不定方向のケズリで調整される。胎土は暗青灰色で他の須恵器よりも黒度が強い。

以上の玄室床面から出土した土器は19を除き全て須恵器で、完形が多いことが特徴である。

耳環・玉類は玄室からのみ出土し、漢道からの出土はない。出土個体数は、耳環10、鉛ガラス丸玉66、土玉6、ガラス粟玉35、ガラス勾玉1、水晶製勾玉1、水晶製切子玉8である。さらに上層覆土より中世のガラス丸玉1点が出土している。

耳環は大型品7点、小型品3点に分けられる。いずれも銅芯金張りで、大型品は端部まで丁寧に金を張り、剥離はほとんどみられない。色調は金色と白金色のものがみられる。小型品は遺存状態が悪く、38・39は数個の破片を合わせて想定復元している。各耳環の出土位置は後章で触れる。

40～99は鉛ガラス製丸玉のうち、風化して原形を留めないものを掲載している。ここに掲載している資料の他に、風化が進んで完全に粘土化し、個体として確認できなかったものもあるので、本来の点数はさらに多かったものと推定される。図示できた個体も、大部分が表面の風化、剥落が進み、本来の法量や形状を留めていない。風化以前の本来の法量・形状は140～142に近似するものと考えられる。風化のため、素材ガラスの材質・色調はほとんど遺存していないが、一部の資料に明緑色のガラス光沢が残る部分がある。

100～104は土製小玉。黒褐色を呈し、不整形円盤の中央に孔を開ける。胎土はやや軟質である。図示した土製小玉の他に土製管玉1点を確認したが、小破片で図示不能である。

105～139はガラス粟玉。直径2.4～3.2mmで、色調は紺・淡青・黄の3種類を確認する。紺色のガラス材質はカリガラスで、淡青・黄はソーダ石灰ガラスである。

140～145は未風化のガラス丸玉。色調は黄・緑・紺の各色を呈し、材質はいずれも鉛ガラスである。

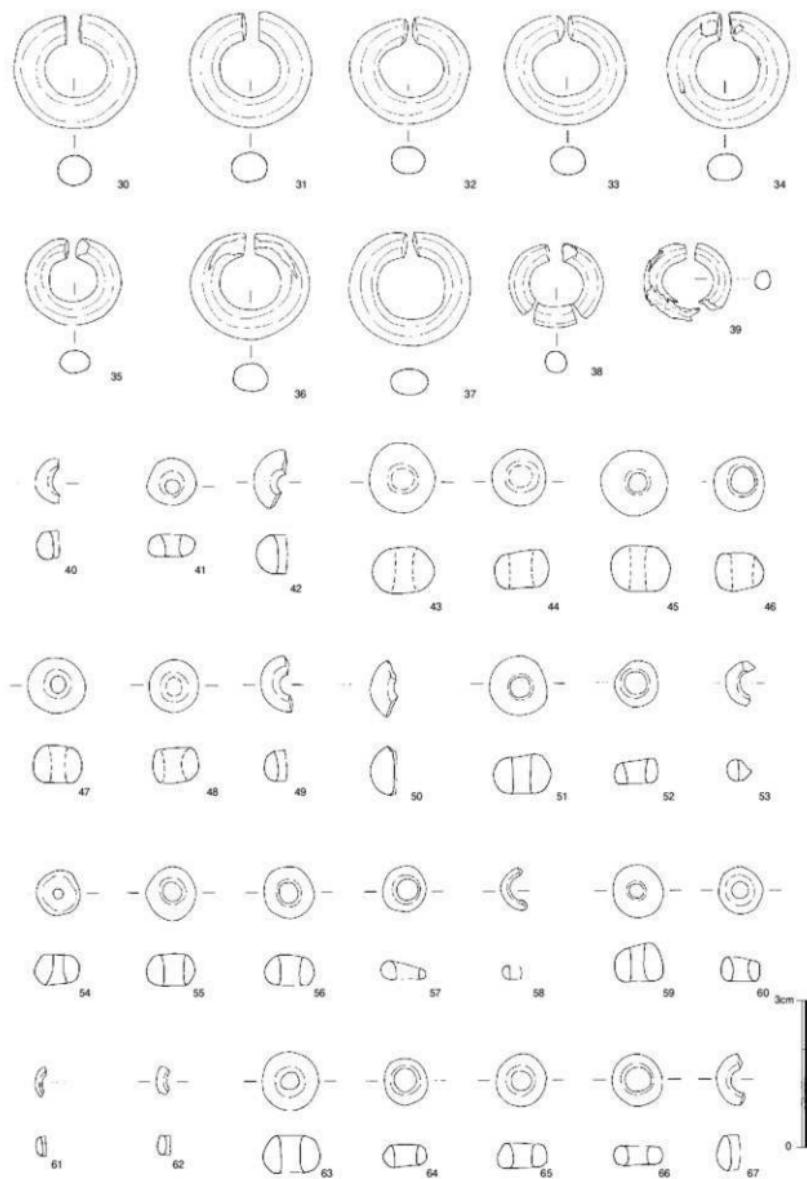


fig.33 玄室内出土装身具・玉類実測図 1 (1/1)

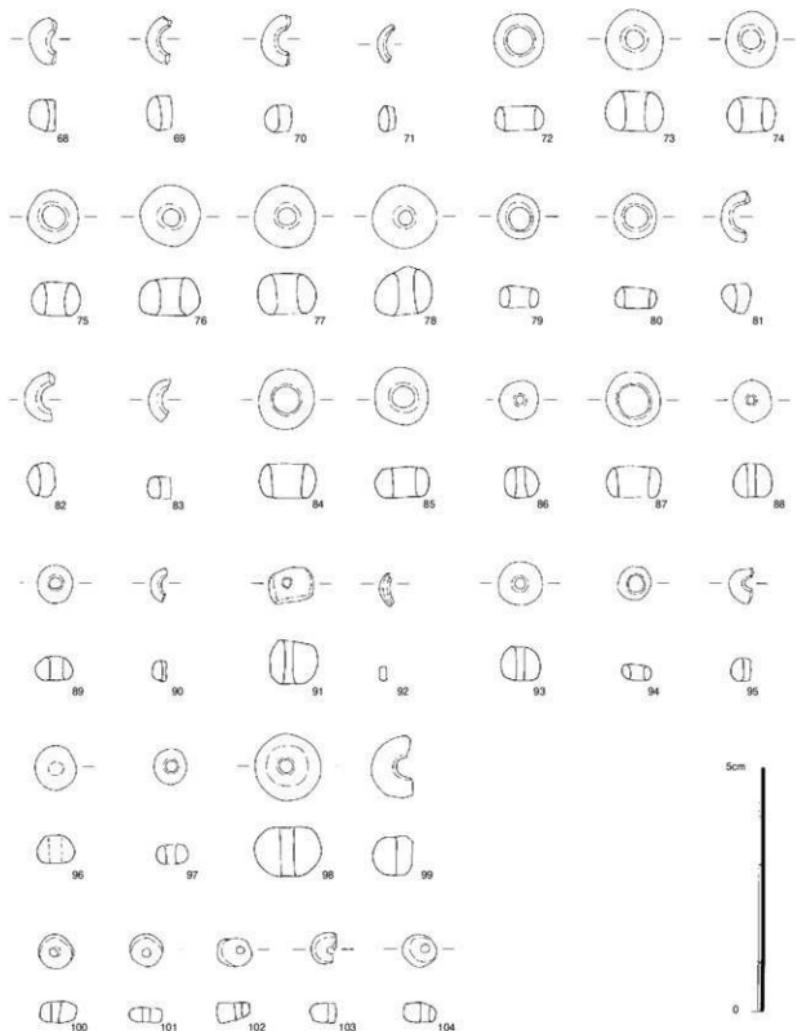


fig.34 玄室内出土装身具・玉類実測図 2 (1/1)

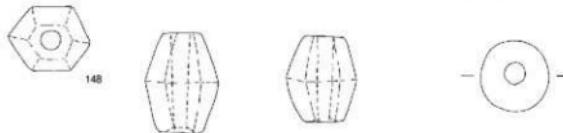
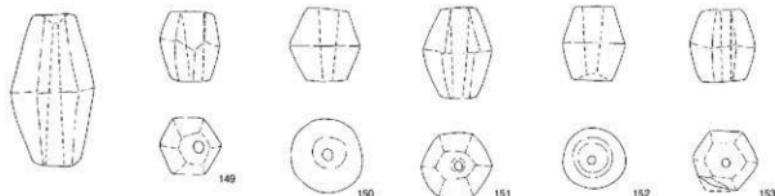
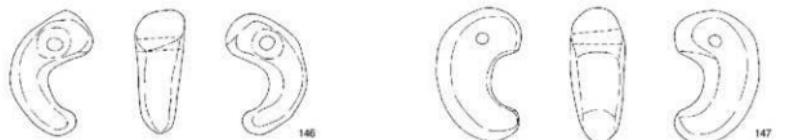
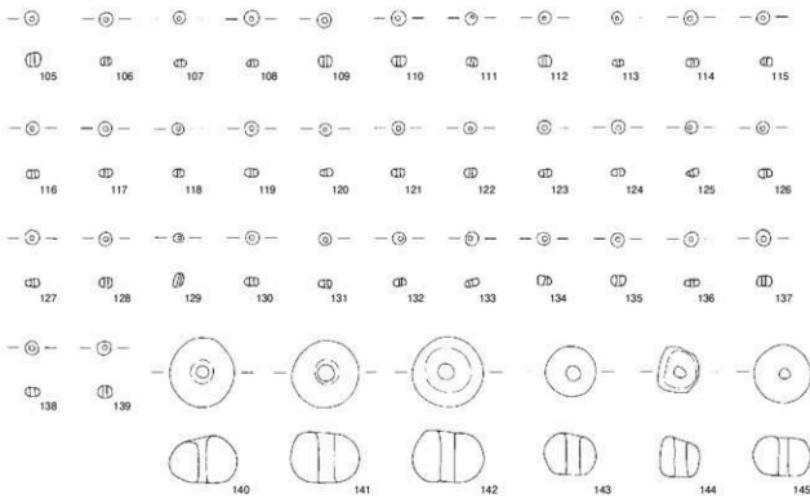


fig.35 玄室内出土装身具・玉類実測図 3 (1/1)

tab.4 6号壇出土玉類觀察表

146はガラス勾玉。青緑色を呈し、材質はソーダ石灰ガラスである。

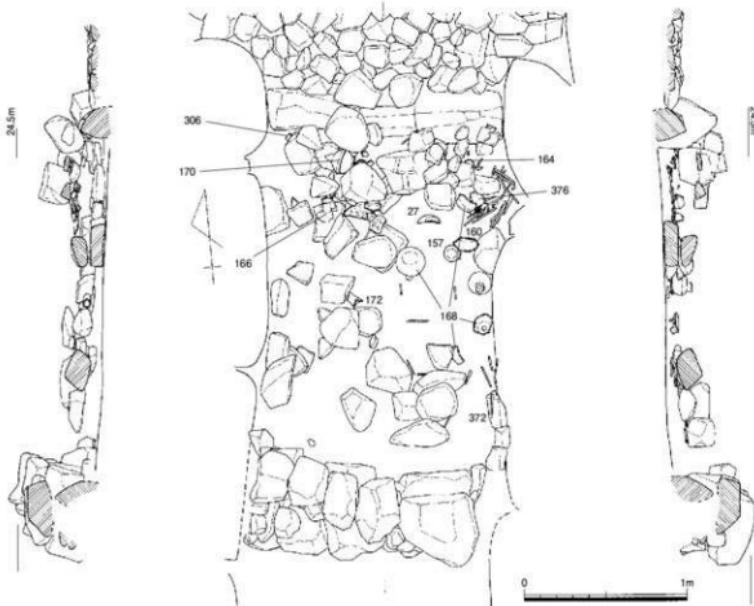
147は水晶製勾玉。仕上げは丁寧で、孔は片側から開削する。148～155は水晶製切子玉。148は大型で、他はほぼ同型同大。150・152は断面が円形で、その他は断面が6角形を呈する。156は上層黒色土より出土したガラス丸玉。中世のものとみられる。鉛ガラス製である。

(2) 羨道・閉塞部

羨道部では玄室と異なり地山直上の遺物に加えて、地山上数cm～十数cmのレベルで堆積土層内から出土した副葬遺物が多数確認された。これは最終埋葬時点での玄室床面上に堆積層がなかったのに対して、羨道では最終埋葬までに厚さ約20cmの暗褐色土層が継続的に堆積したことによる。羨道出土器物については後項で述べる。

fig.37・38は羨道部出土土器で、165以外は須恵器。157は壺身。器壁が薄く、体部は直立し、底部は平底に仕上げる。胎土は緑灰色～灰オリーブ色で、やや軟質。底部は回転ヘラケズリで体部は回転横ナデ。底部にヘラ記号がある。158は壺蓋の端部破片。受け部立ち上がりは短く、突帶状を呈する。159は壺身で、羨道と墓道出土の破片が接合したもの。小型で、体部はやや丸く、底部は平底に作る。体部外面は回転横ナデ、底部は粗い回転ヘラケズリ。160は塊で、丸底で脚は付かないとみられ、玄室出土壺蓋21(fig.32)とセットになるもの。器壁は厚く、体部はほぼ直立し、外部に太い2条の条線が入る。底部は回転ヘラケズリ、体部は条線部分も含め回転横ナデ。

161～165は高杯。161は脚部下部を欠く。壺部は体部が直線的に開き、体部と底部の境に段をも



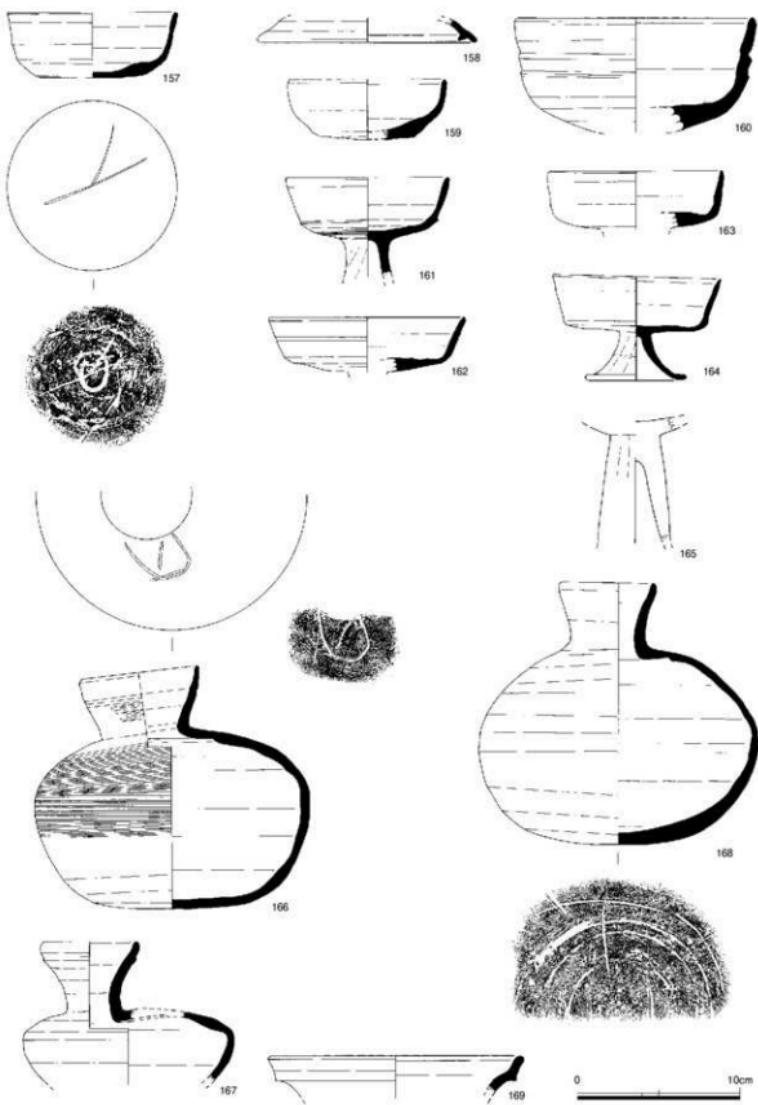


fig.37 羨道内出土遺物実測図 1 (1/3)

つ。坏底部はカキ目を施す。162は坏部のみの破片で、羨道と墓道出土の破片が接合した。やや浅めにつくられ、体部は直線的に開く。底部外面は回転ヘラケズリ、体部は回転横ナデで沈線が1条入る。163も坏部のみの破片で、体部は直立する。底部は回転ヘラケズリ後回転横ナデ、体部は回転横ナデ。164は羨道で破碎されていた破片を接合して完形に復元できた。器壁は薄く、坏部は体部が直立し、底部は平底を呈する。脚部は坏部に対して小さく作られ、外側に大きく開き、端部上面にごく小さな突帯を付ける。坏体部は回転横ナデ、坏底部は回転ヘラケズリ、脚部外面は絞り成形後回転横ナデ、脚部内面は未調整。165は土師器高杯脚部。脚部は高くなる。

166～168は平瓶。166は羨道で破碎されていた破片より完形に復元できたもので、口縁部はやや内湾し、頸部に沈線を1条回す。体部は丸みをもち、肩部に明瞭な稜は付かない。底部はやや丸底を呈する。体部外面は上位から中位にかけてカキ目を施し、体部下部はカキ目後ナデ、底部付近はヘラケズリ後粗いナデ、底面はヘラ切り後粗いナデで仕上げる。167は小型で、複数の破片を図上で復元している。頸部は直立し、端部は内湾し、口縁直下に沈線を1条回す。体部は肩が張る。外面は頸部から胴部中位にかけて回転横ナデ、胴部下位は回転ヘラケズリ。胎土は薄青灰色を呈し、やや軟質で、内外面とも風化が進む。168は壺形に近く、胴頂部に頸部が接合する。頸部は直立し、口縁端部は内湾する。体部は丸く、最大径は胴部中位やや下で、下膨れ形を呈する。外面は頸部～胴部中位は回転横ナデ、胴部下位～底部は回転ヘラケズリ。胎土は明緑灰色で、やや軟質。底部にヘラ記号あり。

169は壺の口縁部破片で、堆積層上層の天井石直下から出土した。口縁部は直立し、外側に短く開く。内外面とも回転横ナデ。

170は長頸壺で、ほぼ完品に接合できた。破片の大部分は羨道北側から出土し、頸部の一部が玄室覆土から出土している。頸部は長く立ち上がり、口縁部は緩く外反し、端部は丸める。胴部は肩が張る算盤玉形で、最大径部分に沈線があり、胴部下位にも沈線が2条回る。胴部と脚部の境界に穿孔が3ヶ所見られる。脚部は短く、外側に大きく広がり、端部は面取りして鋤先状につくる。頸部外面は回転横ナデで、焼成時に自然釉が掛かり、一部は釉が厚く垂下する。肩部上面は釉が厚く掛かり、調整観察は困難である。胴部下部は基本的に露胎だが、上部からの自然釉が垂下する部分があり、胴部中位は回転横ナデで、底部付近は回転ヘラケズリ、脚部は回転横ナデで整形する。胎土は他の須恵器とは異質で、オリーブ灰色～青灰色を呈し、緑色の自然釉が掛かり、砂粒を多く含む。猿投窯の產品と考えられ、搬入品とされるが、本来の猿投窯の產品とは胎土が異なるとの指摘も受けている。6号墳から出土した須恵器の中でも優品の一つに数えられるだろう。

171は長頸壺口縁部破片で、3個以上の長頸壺が羨道部で確認されている。171は口縁部が緩く外反し、外面に自然釉が厚く掛かり、内面は自然釉が点状に付着している。

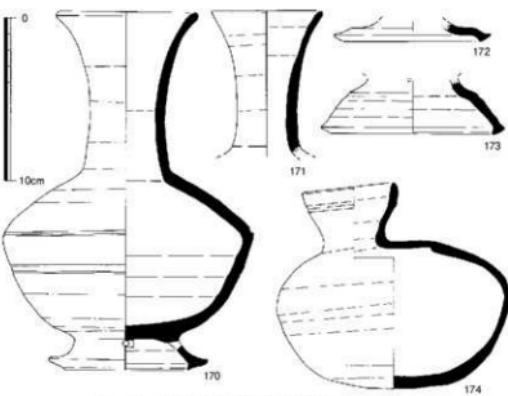


fig.38 羨道内出土遺物実測図 2 (1/3)

172は長頸壺脚部。端部は屈曲しながら広がり、端部は幅広に面取りする。173も台付壺または台付鉢の脚部で、体部との接合部に直径2mmの小孔がある。内外面とも回転横ナデで調整され、端部は横ナデで面取りされ、端面両端は外側に張り出す。胎土は灰白色で軟質。174は平瓶。胴部から底部にかけて丸みをもつ。底部から胴下部は回転ヘラケズリ、胴上部はヘラケズリ後ナデ。

(3) 墓道・周溝・墳丘

1) 墓道出土土器

この項では墓道出土の土器を取り上げる。Fig.40はトレンチ内から出土した土器で、出土範囲が明示できる図示可能な破片を掲載する。175・176は高坏または台付坏の脚部。175は脚部が外側に強く

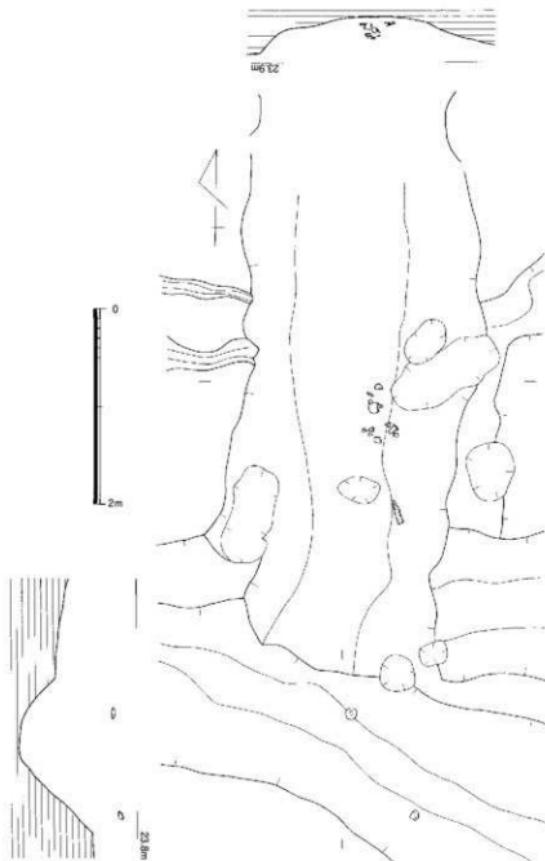


fig.39 墓道部遺物出土状況図 (1/50)

開き、端部は横ナデで面取りする。内外面とも回転横ナデ。176も脚部は外側に強く開き、端部は面取りされて上端部が跳ね上がる。内外面とも回転横ナデで、上面は灰被りにより器壁が荒れる。177は平瓶頭部で、反転復元のため図上では本来の形態とは異なる。口縁部はわずかに内湾する。内外面とも回転横ナデで、体部内面はナデ。178は大甕口縁部で、口縁端部は肥厚し、頸部は直線的に開く。頸部は内外面とも回転横ナデで、肩部にはカキ目を施す。

fig.41は墓道上層の中世以降の堆積層より出土した土器で、182以外は須恵器。179は壺蓋で、体部は丸く、端部は丸く仕上げられる。内外面とも回転横ナデ。180は壺蓋とみられる破片。体部は直立し、口縁端部は丸める。天井部は平坦に整える。外面調整は、天井部が回転ヘラケズリまたは静止ヘラケズリ、体部は回転横ナデ。内面

調整は回転横ナデ。181は高環坏部。受け部の立ち上がりは高く直立する。体部はやや浅めにつくられる。外面下部にカキ目を施し、体部上位は回転横ナデ。182は土師器脚部。器壁が厚く、内湾して端部は面取りされる。外面には沈線状の凹みが回る。胎土は灰白色を呈し、軟質で風化が著しい。183は脚部。外側に強く開き、端部は横ナデで面取り整形される。棒状工具による刺突穿孔が全周で8ヶ所開けられる。外面にカキ目が施され、端部と内面は回転横ナデ。

fig.42は黒色土上層出土遺物。184・185は坏蓋。184は小片のため、径や傾きは不確定。内外面とも回転横ナデで仕上げる。185は受け部の返りがつくもので、低平で摘みがない。外面天井部はヘラ切り後回転ナデでその他の面は回転横ナデ。186は坏身で、受け部は高く直立し、細く尖る。内外面は回転横ナデで、外面下端部は回転ヘラケズリ後ナデ。

fig.43・44は黒色土下層出土遺物。187は土師器高環の坏部。小型で浅く、口縁は外反する。188～195は須恵器坏蓋。188は体部が丸みを帯びる。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリで他部分は回転横ナデ。天井部外面にヘラ記号がつく。189は器壁がやや厚めで、口縁は直立する。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリで他部分は回転横ナデ。190は小型で、体部は丸く、口縁部は直立する。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリでヘラ切り時の粘土返りが残り、焼成時の灰被りが付着する。191は天井部が平らで体部は直線的に開き、口縁部は直立する。天井部はヘラ切り後静止ヘラケズリで他部位は回転横ナデ。192は小片で、体部は低く作られる。口縁部はやや開き、体部は直線的に開く。内外面とも回転横ナデ。193は受け部の返りがつくもので、摘みはない。返りはごく短い。天井部外面はヘラ切り後指オサエで他は回転横ナデ。194は口縁部片で、器形全体は不詳。返りはごく短い。195も小片で、受け部は突堤状でごく短い。

196～213は須恵器坏身。196は受け部の立ち上がりがやや内傾する。底部はヘラ切り後静止ヘラケズリ。底部にヘラ記号がつく。197は受け部が細く、内傾して高く立ち上がる。底部は回転ヘラケズリでヘラ記号が一部残る。胎土は浅黄橙色で軟質。198は立ち上がりが細く高い。199は体部が深く、立ち上がりは短く外反し、端部は細く尖る。底部外面はヘラ切り後未調整。他部位は回転横ナデ。200は受け部立ち上がりが細く短いもので端部

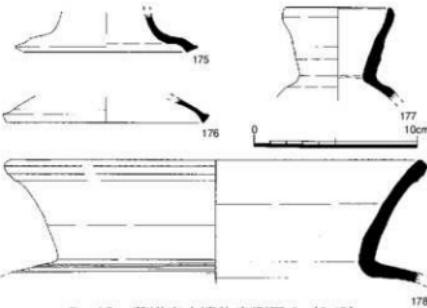


fig.40 墓道出土遺物実測図 1 (1/3)

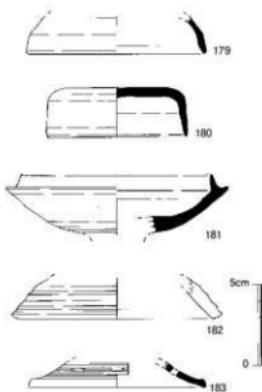


fig.41 墓道出土遺物実測図 2
(墓道上層出土物) (1/3)

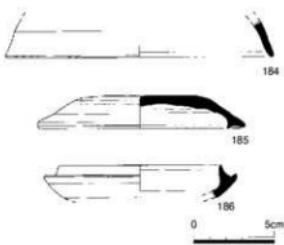


fig.42 墓道出土遺物実測図 3
(黒色土上層出土物) (1/3)

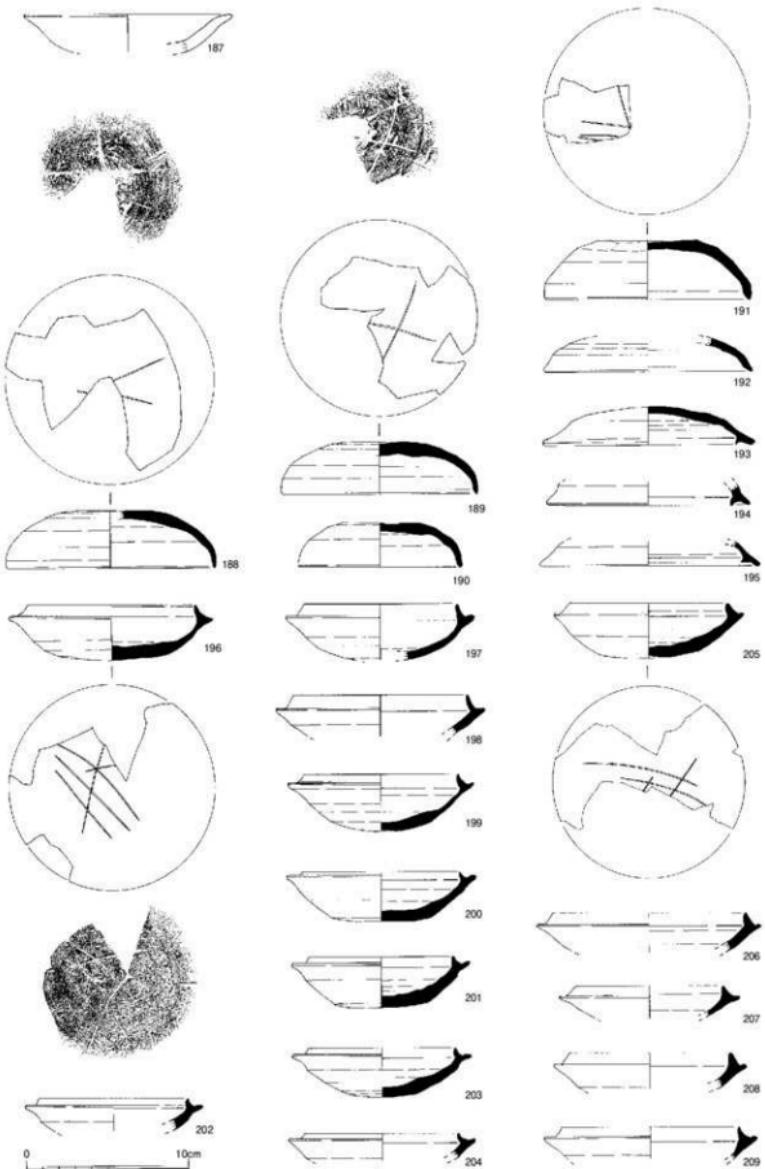


fig.43 墓道出土遺物実測図 4 (黒色土出土遺物 1) (1/3)

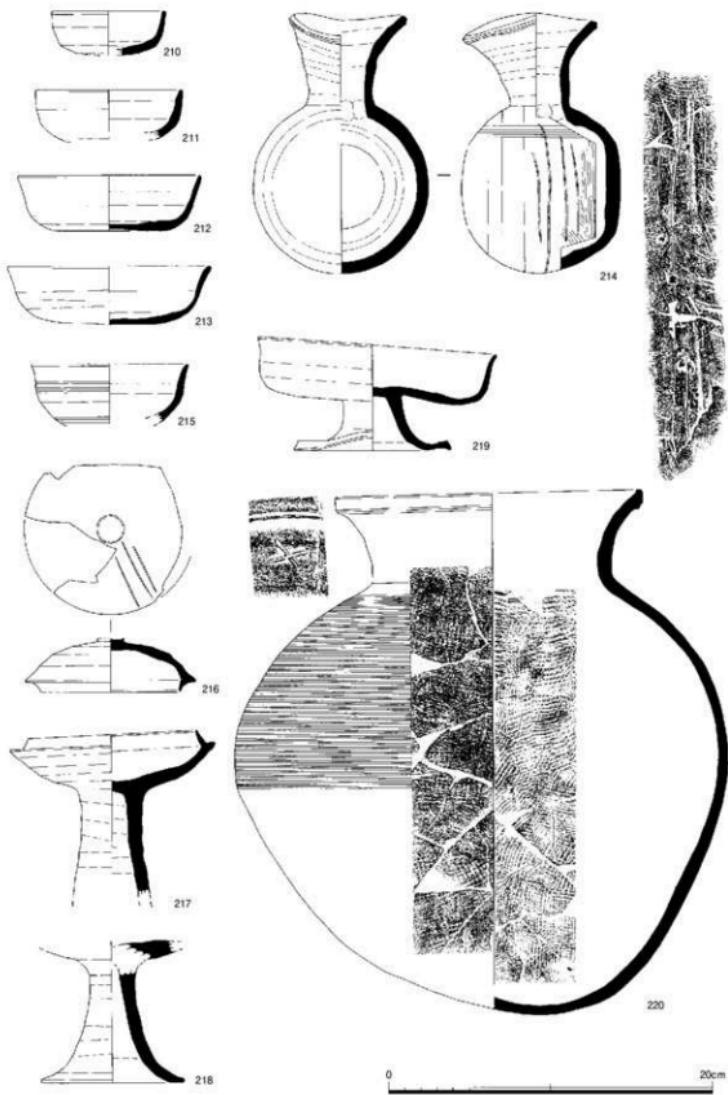


fig.44 墓道出土遺物実測図 5 (黒色土出土遺物 2) (1/3)

は尖る。底部外面はヘラ切り後未調整。他部位は回転横ナデで内面見込みは回転横ナデ後ナデ。胎土は青灰色でやや軟質。201は器壁が厚く、受け部立ち上がりは短く太めで、端部は尖る。底部外面はヘラ切り後未調整で、粗い。体部外面は回転ヘラケズリ、他部位は回転ヨコナデ。202は小型で、受け部が短く外反しながら立ち上がる。203は底部が丸く、器壁も厚い。立ち上がりは短く外反し、端部は尖る。底部外面はヘラ切り後ナデ。体部外面は回転ヘラケズリ、内面見込みは回転横ナデ後ナデで他部位は回転横ナデ。204は口縁部のみの破片。立ち上がりは短く外反し、端部は尖る。205は立ち上がりが短く太い。器壁は厚く、底部は回転ヘラケズリとみられ、内面見込みは回転横ナデ後ナデ、他部位は回転横ナデ。胎土は青灰色で砂粒を多く含み、粗い。底部に鋭い工具によるヘラ記号がつく。206は立ち上がりが太い。207・208は小型で、立ち上がりが太いもの。209は立ち上がりが太く直立する。

210～213は坏身のうち受け部がないもの。210は小型で、体部は直立する。底部外面は回転ヘラケズリ。胎土はやや軟質で全体に風化が進む。211は体部がやや開く。底部付近は回転ヘラケズリ後ナデ。212は体部が外に開き、底部は平底。底部外面はヘラ切り後指オサエ、内面見込みは回転横ナデ後ナデで、他部位は回転横ナデ。213は墓道と埴丘から出土した破片が接合した。全体に薄手で体部は緩く外反する。底部外面はヘラ切り後指オサエで指圧痕が多数残る。

214は提瓶。口縁部は歪み、頸部に焼け膨れがみられる。胸部に比して頸部へ口縁部が大きい。口縁部は大きく開き、端部は横ナデで面取りして整える。頸部の締りは弱い。胸部は丸く、側面に手描きの沈線が粗く巡る。外面は回転横ナデでカキ目、ハケ目が一部に入る。

215～219は高坏。215は体部外面に3条の条線に入る。下部には細いカキ目があり、高坏部とみられる。216は有蓋高坏の蓋で、低い摘みが付く。身受けの返りが高く、先端は尖る。上面は回転ヘラケズリ。217は脚部中位まで遺存し、外面は全体に灰被りにより荒れる。坏部は受け部立ち上がりが高く延び、外面底部は回転ヘラケズリ。脚部は回転ろくろ成形で、透かしはみられない。218は脚部破片に埴丘出土の坏部破片が対応する。脚部は下端部で短く開き、端部は風化で丸まる。色調は灰白色～黄橙色で軟質。219は坏部・脚部ともに扁平で、全体に歪む。坏部は盆状で口縁部は外反する。脚部は外側に大きく開く。

220は甕で、大部分の破片は墓道から出土したが、一部の破片は玄室内覆土に含まれる。頸部は外側に大きく開き、端部は横ナデで面取りする。胸部上位にカキ目を施し、下位には格子目タタキ、内面には平行當て具痕が残る。

fig.45は墓道トレンチ及び墓道周辺から出土した土器。221～226は坏蓋。221は天井部が平坦で、体部は直線的に開く。天井部外面はヘラ切り後未調整。天井部付近の体部外面は回転ヘラケズリ。天井部に曲線と短線のヘラ記号がつく。222は体部が丸みをもち、天井部外面はヘラ切り後未調整で粘土返りが残る。天井部付近の体部外面は回転ヘラケズリ。胎土は緑灰色で軟質。223は小片で、径や蓋身の区別は確証がない。224は小型で、体部は丸みを帯びる。226は身受け部を持つ。体部は薄く、天井部は平坦で摘みは付かず、天井部外面はヘラ切り後粗いナデ。

227～232は坏身。227は体部が丸みを帯び、受け部は高く立ち上がる。底部は回転ヘラケズリでヘラ記号がつく。外面に高温焼成による被熱箇所がある。228は立ち上がりが体部端部から屈曲する。底部は回転ヘラケズリ。229は受け部の立ち上がりがやや短く、先端は尖る。231は受け部のないもので、体部はやや開き、口縁部は外反する。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。他部位は回転横ナデ。232は高台が付くもので、226と同時期とみられる。高台は短く、外側へ開く。

233・234は高坏。233は坏部下部と脚部上部が遺存する。脚部外面には沈線が2条回る。坏部外面

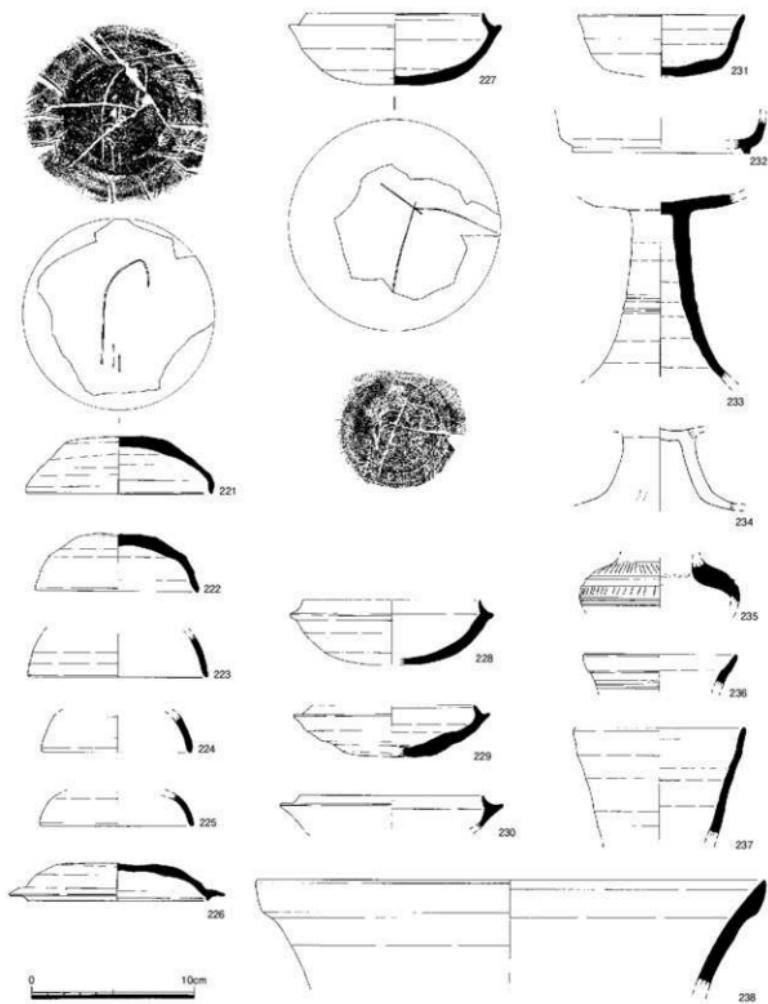


fig.45 墓道出土遺物実測図 6 (1/3)

は回転ヘラケズリ、脚部は回転横ナデ。234 は土師器高坏。脚端部は大きく開き、脚部外面に縦ハケ目痕が残る。

235 は甌。胴部外面には斜線文と横方向カキ目が施される。236 は甌口縁部とみられ、口縁は屈曲

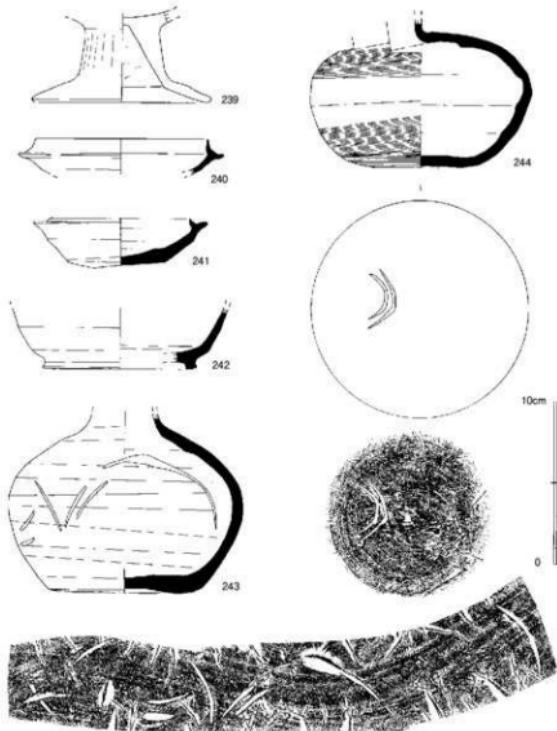


fig.46 周溝内出土遺物実測図 (1/3)

して外側に開き、外面にカキ目を施す。237は長頸壺口縁部。頸部は直線的に開く。238は甌または広口壺の口縁部。端部は玉縁状に作る。

2) 周溝出土土器 (fig. 46)

周溝からの出土遺物は他の地点に比べて少ない。以下、墳丘西側と南側に遺存する周溝と、南東側に延びる溝状通路から出土した土器を掲載する。239は土師器高環で溝状通路下層から出土。脚部外面は強いナデ、内面はケズリ。胎土は明赤褐色で軟質。240～242は壺身で墳丘西側周溝より出土。240は受け部の立ち上がりが高く、細く尖る。241は小型で、立ち上がりは短く外反する。242は低い高台が貼り付き、時期が下る資料である。

243は平底の瓶で、外面に弧線を中心とする刻線が付けられる。底部はヘラ切り

後粗いナデ、体部は回転横ナデで、肩部に薄い灰被りが付着する。出土状況をfig. 24に示す。244は平瓶。胴部に破損部分はない。外面上位と下位にカキ目を施し、胴部中位と底部は回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号が付く。溝状通路上層より出土し、出土状況はfig. 23に図示している。

3) 墳丘出土土器 (fig. 47～49)

245は土師器壺。底部は平底で体部は直線的に開く。内外面とも風化による摩耗が進む。246～249は須恵器壺蓋。246は受け部の返りが短く外反する。天井部外面は回転ヘラケズリで摘みの有無は不明。247は宝珠形の摘みがつく。受け部の立ち上がりは低い。外面上面は回転ヘラケズリで灰被りが見られる。248・249は受け部の返りがないもので、249は大型である。

250～253は須恵器壺身。250は立ち上がりが低く太めで、体部は丸みを帯びる。251は立ち上がりが細く延びるもの。252は小型で蓋の可能性もある。立ち上がりは低く外反する。底部は回転ヘラケズリ。253は受け部を持たず、平底で体部が直立する。底部は回転ヘラケズリ。外面に自然釉が掛かり、黒色光沢をもつ。

254は土師器高環。壺部は大型で、体部は直線的に開く。胎土は暗赤褐色で、内外面とも風化によ

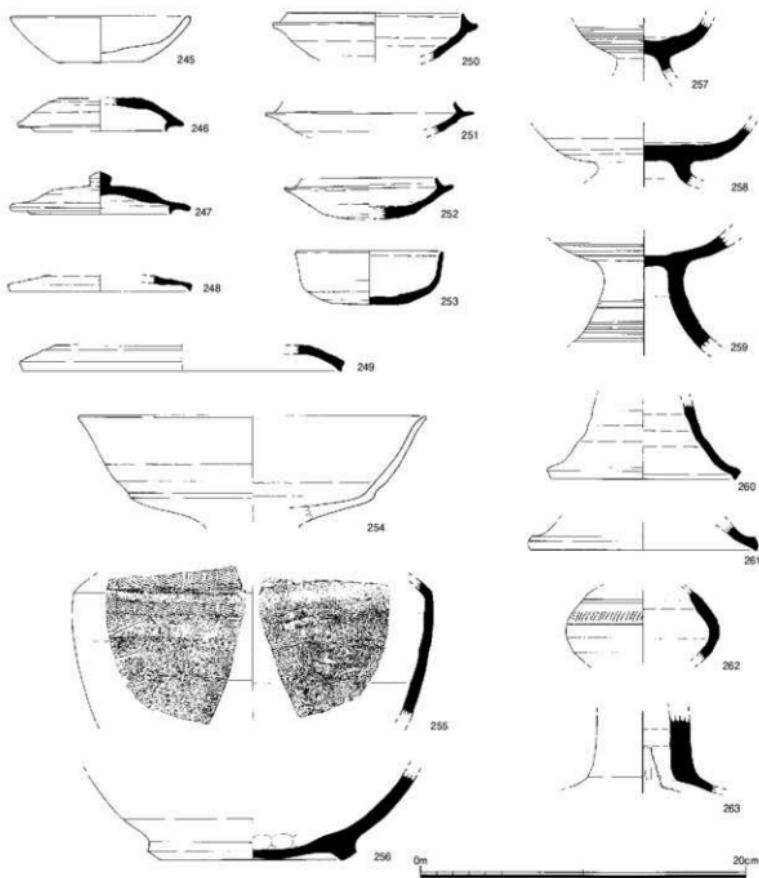


fig.47 墳丘部出土遺物実測図 1 (1/3)

り調整不明。255・256は長頸壺片で、同一個体とみられる。肩部に稜が入り、波状文が施される。底部には低い高台が貼り付けられる。

257～261は須恵器高环・台付壺・台付鉢の脚部。257は体部下面にカキ目を施す。258は内外面とも回転横ナデ。259は体部下面と脚部外面にカキ目を施し、脚部に2条の沈線を施す。260は脚部は弱く開き、端部は面取りされ下端が垂下する。261は脚端部で端部は面取りされ玉縁状になる。

262は須恵器甌。胴部中位に斜線文を施す。263は長頸壺または瓶の頸下部。器壁が厚く、細く直立する。

264～270・272は須恵器甌。264は墳丘南東部で出土し、頭部が外反し、端部上端がわずかに跳ね

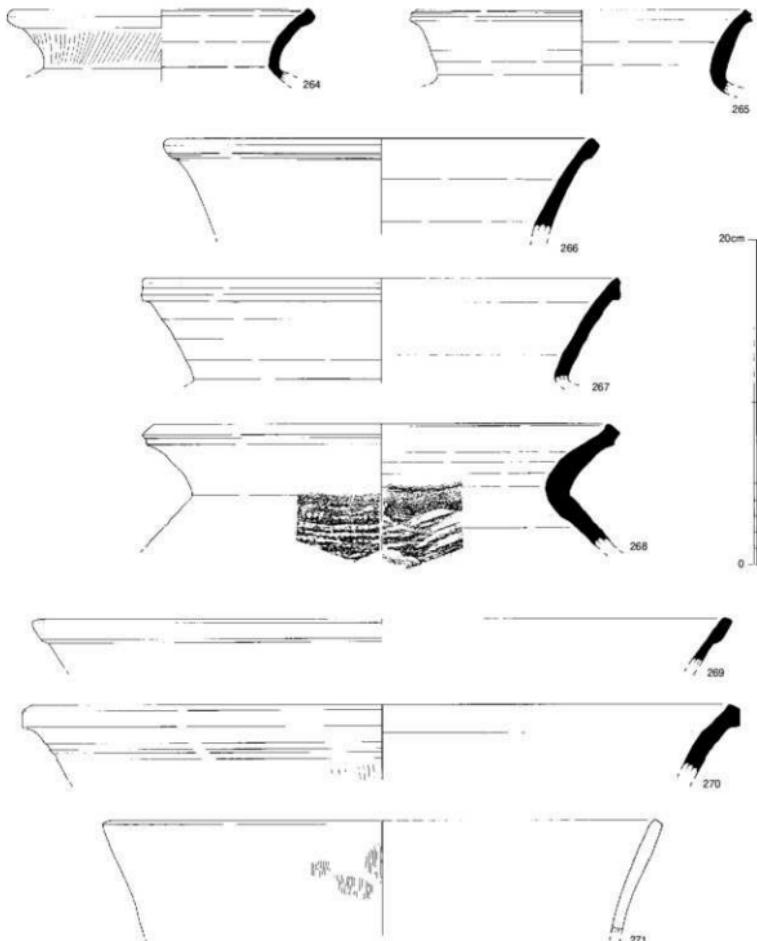


fig.48 墳丘部出土遺物実測図 2 (1/3)

上がる。頸部外面に縦方向のハケ目を施す。265は墳丘南東部で出土し、口縁端部に横ナデで帯状の段をつくる。胎土は小礫を含み、粗い。266は墳丘東側から出土し、口縁端部が肥厚するもので、胎土は赤灰色を呈する。267は墳丘東側表土から出土したもので、頸部が直線的に開き、端部は下端を垂下させ、強い横ナデで凹みを付ける。268は墳丘南東部で出土し、頸部が短く外反し、端部は横ナデで段を付け、上端は跳ね上げて作る。胴部外面は格子目タタキで、内面は同心円叩き當て具痕がつく。内外面とも摩耗が著しい。269は墳丘東部表土から出土したものである。口縁端部を肥厚させ、

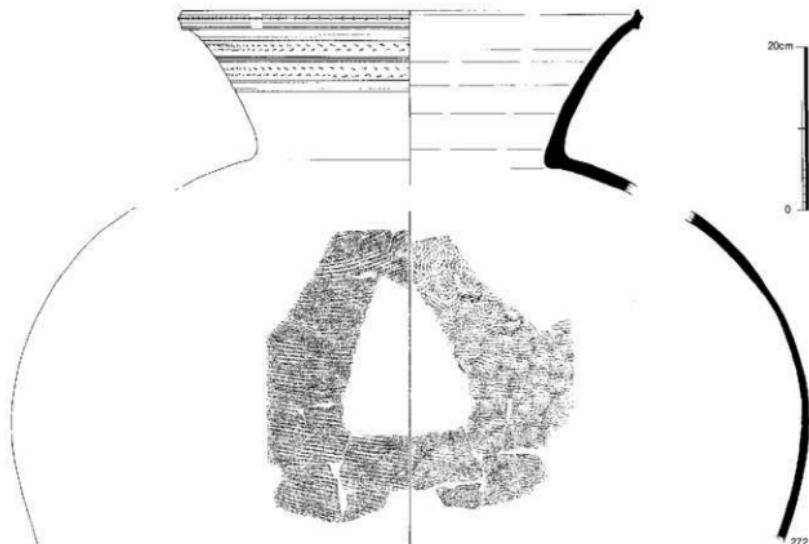


fig.49 墳丘部出土遺物実測図 3 (1/6)

小片で内外面とも摩耗が著しい。270は墳丘東側から出土したもので、小片である。端部は横ナデで面を作り、口縁直下に沈線が2条回る。頸部外面に粗いハケ目状の板状工具痕が残る。272は墓道南部と墳丘南東部の広い範囲で破片が出土したものを図上復元した。墓道南東端の破片が最も多く、この部分に配置されていたとみられる。頸部は緩く外反し、口縁端部は刻目突帯2条を横ナデで作り出す。頸部外面には2条1組の沈線を3組配置し、列点文帯を2条区画している。体部外面は横方向平行タキ、内面は破片上位と下位は同心円文當て具痕、中位は平行文當て具痕がつく。

271は土師器瓶と考えられる。墓道上層から出土し、古代以降に下る時期の可能性もある。

4) 弥生時代・古代以降の遺物 (fig.50)

墓道・墳丘の覆土には古代～中世の遺物が多数含まれている。古墳南側の平坦面で中世の建物群が確認されており、中世の時点で古墳周辺が活動の場になっていたことによるものである。また弥生時代の遺構も確認されている。

273～277は土師器皿。273・274は底部が回転ヘラ切り。277は高台が付く。278～289は土師器塊・高台付壺。278は高台が低く、体部は丸みを持つ。290・291は瓦器塊で、小片で摩耗が進む。

292は白磁碗でFトレーニチ出土。器壁は厚めで口縁は外反する。293・294は青磁碗底部。295は青磁碗で外面に蓮弁文がつく。296は青白磁合子。全面施釉で唇付のみ露胎。297は四耳壺で緑褐色釉を施す。

298は陶器搗鉢で、胎土は暗赤褐色。299・300は陶器搗鉢。

301・302は弥生中期前半の甕口縁部。303は壺形土器で弥生時代のものとみられる。

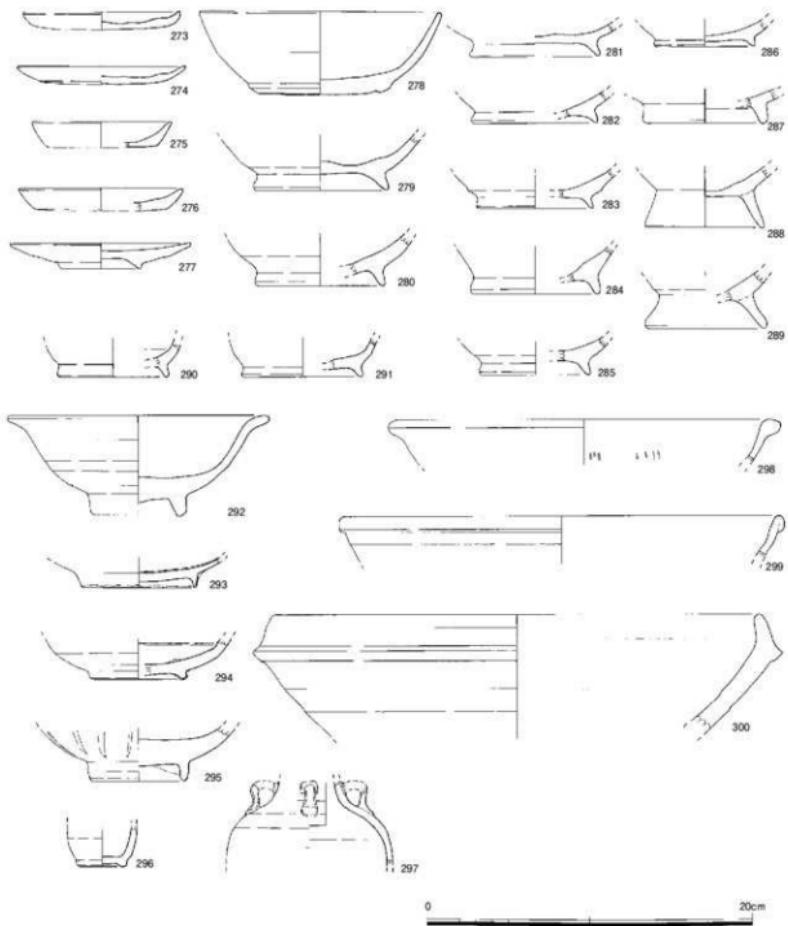


fig.50 塗丘部出土弥生時代・中世遺物実測図 (1/3)

(4) 鉄器・鉄製品

6号墳から出土した鉄器・鉄製品については2012年12月時点での「庚寅」銘大刀を含め、銷落とし・保存処理が完了していない。したがって今回の報告ではX線撮影の結果をもとにして鉄器・鉄製品の形状を推定し、図化した。このため今後の銷落とし・保存処理の結果によっては、今回掲載した図と形状が異なる資料が出てくることが予想される。また、X線写真からは平面形状しか把握できないため鐵鎌の鍔の有無などは明らかにならない、資料の断面形は破断面部分でしか確認できないなど、資料の細部の形状については正確に把握できない箇所が多数存在する。さらに資料同士の接合関係も明らかではない。以上のことから今回は資料の概要を報告するにとどめ、形態の詳細な分析と考察については改めて別報告で行いたい。以下の報告に際してはこの点を御了了解頂きたい。

1) 玄室・羨道出土鉄製品

fig.51は玄室・羨道出土の鉄器・鉄製品。玄室出土の鉄製工具については別ページで触れる。304・305は大型の鉄鎌。玄室南東側の袖石際の敷石下部から出土したもので、敷石を設置する前の段階で埋置されたものである。304は圭頭形で、闊は2段の撫閑である。305は圭頭形で先端部をくく。

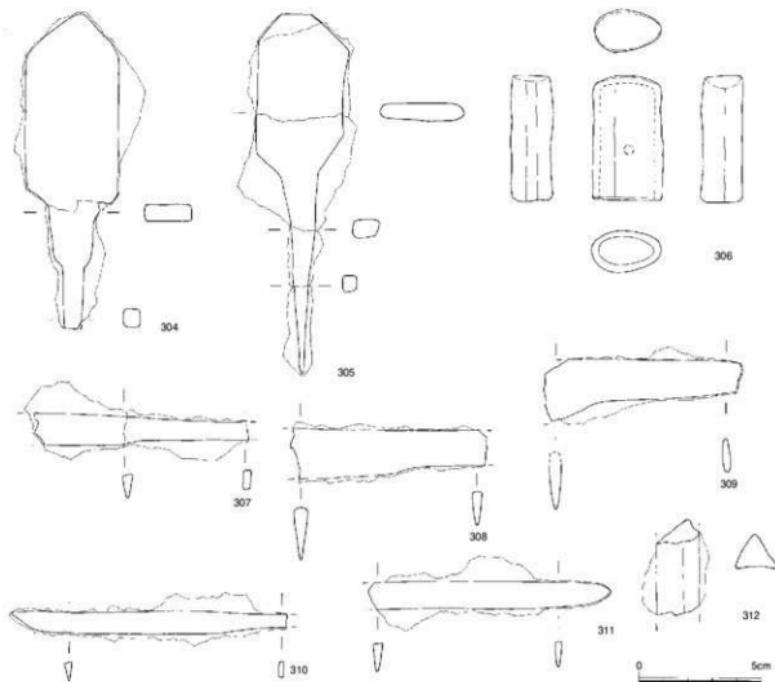


fig.51 玄室・羨道出土鉄器・鉄製品実測図 (1/2)

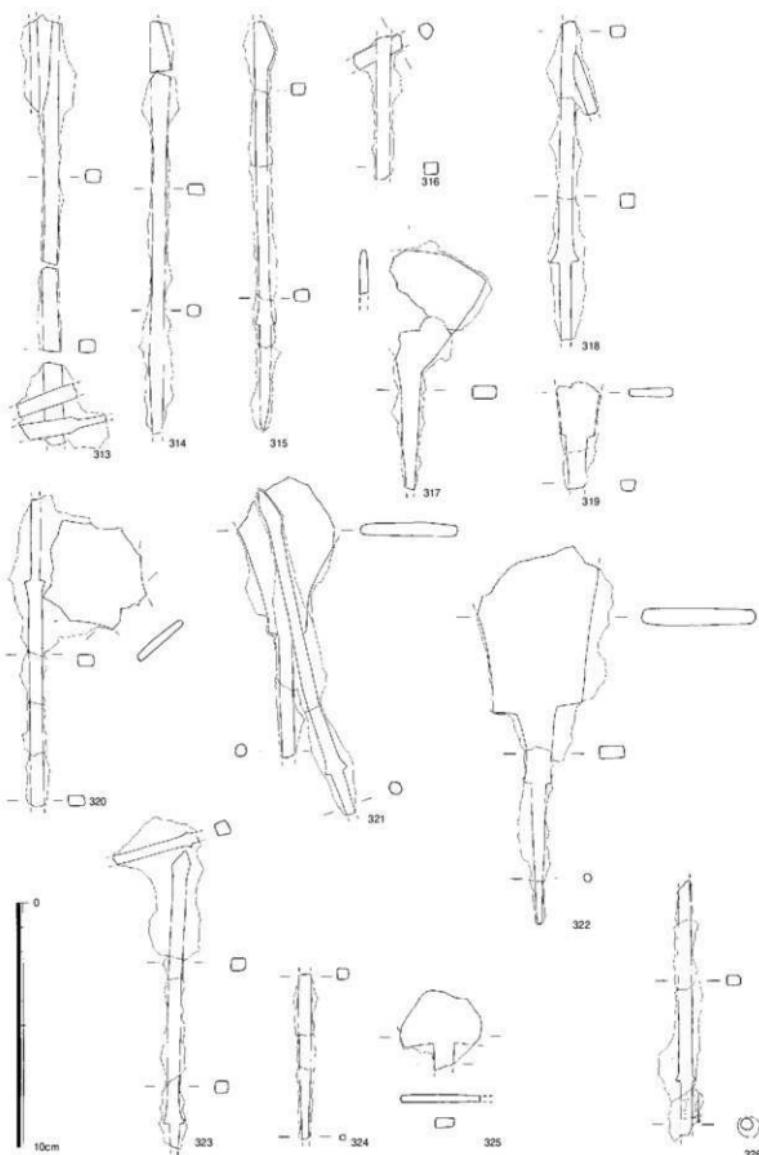


fig.52 美道内出土鉄製品実測図1 (1/2)

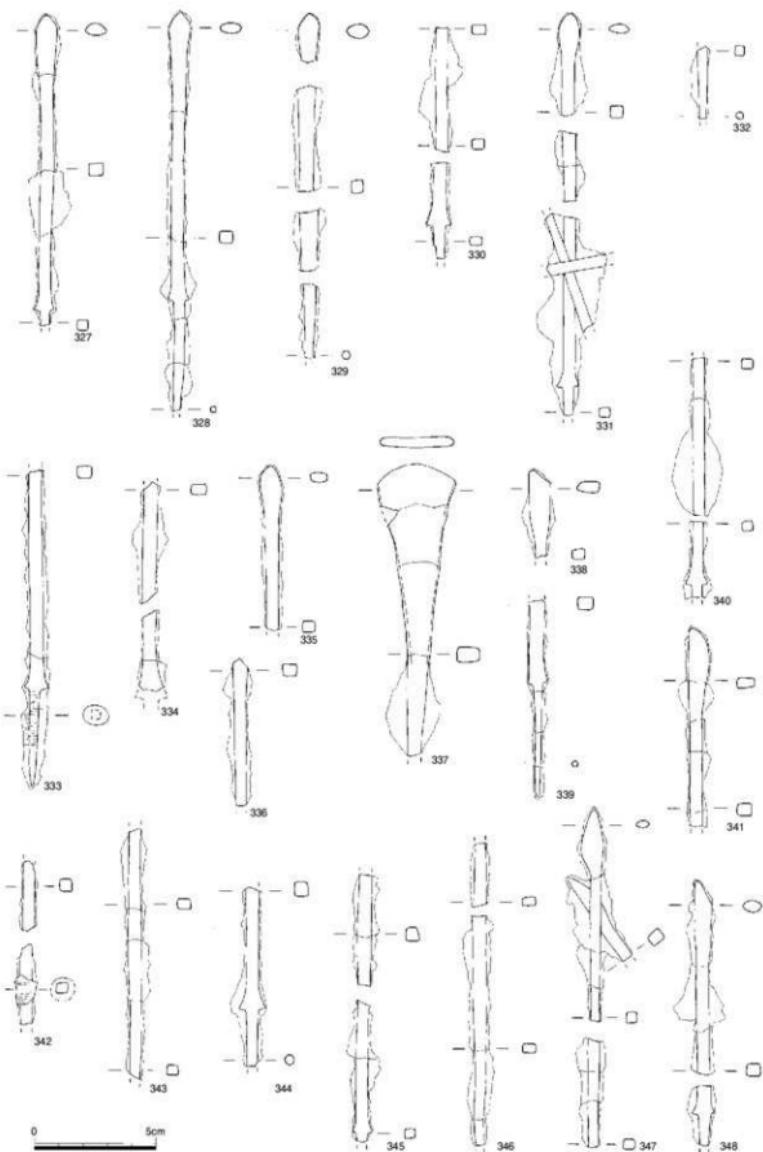


fig.53 美道内出土鉄製品実測図 2 (1/2)

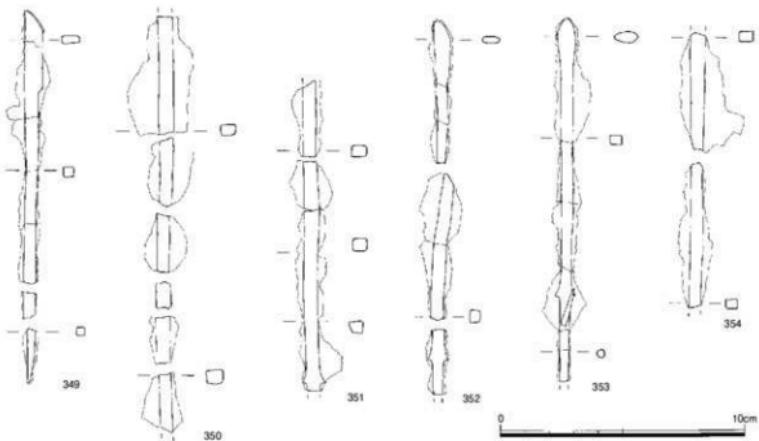


fig.54 美道内出土鉄製品実測図3 (1/2)

鉄身は両側が平行で、全体は6角形を呈し、関は斜関で、茎は断面が方形である。

306は鞘尻金具と見られる。漢道左側壁際で出土したもので、長さ5.1cm、幅2.9cm、厚さ1.7cmである。内部は土が詰まっているが、空洞とみられる。側面に目釘穴が1ヶ所あることがX線写真で確認できる。「庚寅」銘大刀の鞘尻金具とも考えたが、大刀の周囲に木質が遺存していることが判明し、大刀は鞘を着装した状態だったため、石室外に出された別個体の鞘とみられる。

307～311は刀子・鉄刀。307は刀身先端部と柄頭を欠く。刀身は直身で幅細いが、厚さは他の刀子と大差なく、刃部断面は三角形を呈する。関は片関で斜めにつく。308も刀身先端と柄頭部分を欠く。刃部は直身とみられ、関は片関である。309は柄と関部分のみの破片で、刃部幅が2.7cmと幅広く、鉄刀の一部とみられる。関は片関で、関の柄寄りの部分に刀装具のようなものがあることがX線写真で確認できる。310は刀身は細身で、切先はフクラ切先とみられる。関は緩く、形状は不鮮明。311は刀身のみの破片で、切先は柳葉状を呈し、切先はフクラ切先とみられる。

312は鉄矛の一部とみられる。断面形は三角形で、柱状を呈する。

fig.52～54は漢道出土の鉄鎌。313～332は漢道右側壁際でまとめて出土し、束になった矢が副葬されていたことを示している。333～354は漢道南側を中心で散乱した状態で検出された。各資料は銷落としが終了していないため、今回は出土状況のまま図化、報告する。314・315は片刃箭式とみられ、関は明瞭でない。317は圭頭式か方頭式で鎌身が短い。319は図化後、320の圭頭鎌の鎌身と接合することが判明した。321は片刃箭式鎌と圭頭式または方頭式鎌が銹着している。322は大型品で、方頭式または圭頭式鎌と見られる。326は茎部分に木質が遺存している。

327～329・331は柳葉式または片刃箭式とみられる。頭の関は台形関とみられる。332は茎部分で断面形は方形で木質が付着する。333は頸部～茎部破片で、茎部に木質が遺存する。337は方頭式鎌で、無

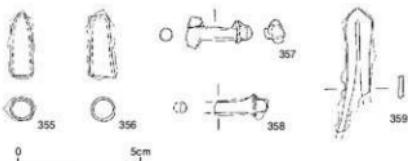


fig.55 美道内出土鉄製品実測図4 (1/2)

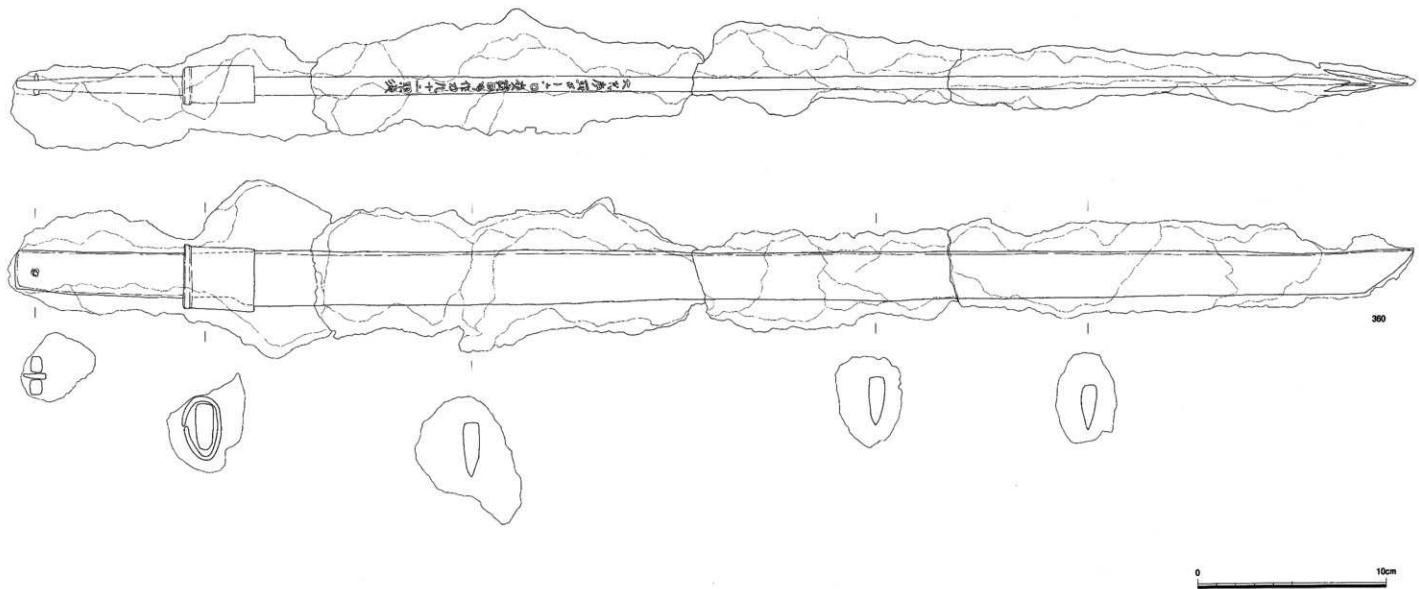


fig.56 「庚寅」銘大刀実測図 (1/2)

関で平造とみられる。338・341・348は片刃箭式鐵で、いずれも鐵身関は無い。342は木質が付着する。347は柳葉式とみられるが片刃箭式の可能性もある。

349は片刃箭式で頸部関部分を欠く。352は片刃箭式とみられる。353は柳葉式とみられるが詳細な形態は不明。

fig.55は漢道出土の鐵製品。355・356は弓彌で、キャップ状を呈する。内部には土が詰まる。357・358は弓の裝飾として用いられる両頭金具。357は円頭状の端部に花弁状の細工が施される。358は銷が厚く、詳細な形態は不明。

359はピンセット状の鐵製品で、先端が欠けており全体形は不明。

2) 有銘大刀（「庚寅」銘大刀）(fig.55)

出土状況 大刀は玄室の奥壁から70cmほど間隔をおいて、切先を東壁側に向け、刃を奥壁側に向けて石室主軸と直交する方向にはほぼ水平に置かれていた。刀は玄室最下部の保水性の高い粘土中に埋没

しており、水分の多い場所に長期間あったことが想定される。出土から取り上げまでの間、降雨時に玄室内は2回冠水し、その都度大刀を含め遺物は水没したが、古墳に隣接して溜池が存在するよう周辺の地下水位はかなり高く、調査以前より玄室床面付近は潤滑な地質であったことが想定できる。

大刀の出土位置は床面敷石の直上で、敷石との間に堆積層は確認できなかった。南側に隣接して須恵器平瓶 (fig.32 26) が置かれており、大刀と一緒に配置されたものと考えられる。大刀の周囲から耳環や玉類が出土しているが、これらについては大刀副葬以前に敷石の隙間に落下したものである可能性もあり、大刀と同時期である確証はない。

出土当初、大刀は中央部で大きく2つに割れていたが、2つの部位は破断面で

ずれることはなく、軸線を描えた状況で検出されたことから、副葬された当時の位置から大きく動いていないものと考えられる。

出土直後は銷が厚く付着しており、表面は黄褐色で砂・粘土を厚く巻き込んでおり、大刀の原形や刀装具の状態を窺うことが難しい状況であった。鍔にあたる部分に厚い銷の塊が付着しており、検出当初は鍔があると考えていたが、実際には鍔はない。この「鍔があるかも」という誤認のためにX線撮影を急かし、結果として銘文の早期発見につながったことを記しておく。

大刀の形状 現在銷落としが完了しておらず、刀の形状を直接には

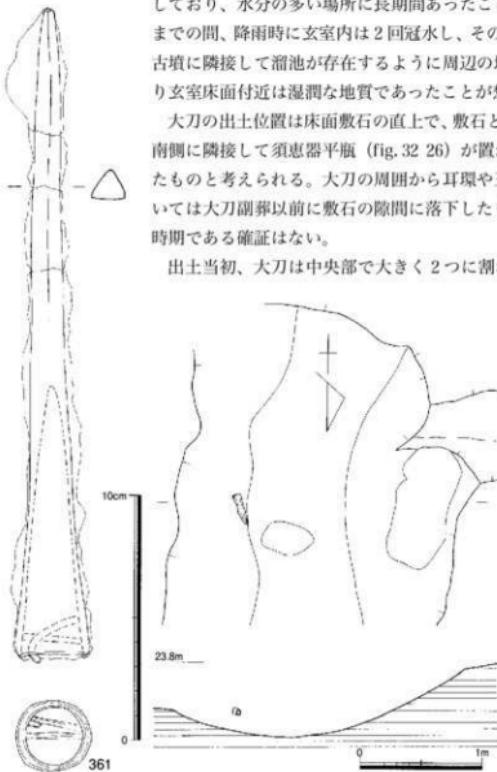


fig.57 鉄矛実測図・出土状況図 (1/2・1/40)

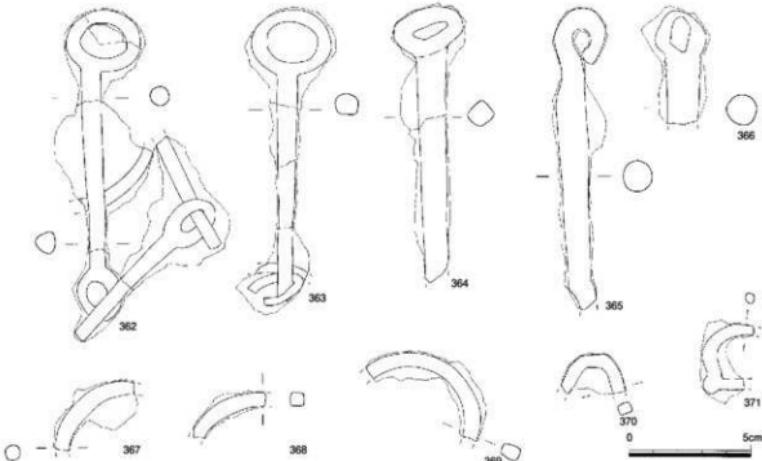


fig.58 鉄製馬具実測図 (1/2)

目視できないため、形状観察はX線CT画像等で得られたデータに多くのを頼る。また、刀の法量は銷落とし前の計測であり、銷落とし後に得られる値と異なることがあることを了解頂きたい。

刀は長さ74.0cm、刃部幅は切先部で2.1cm、関付近で2.9cm、峰の厚さは切先付近で5mm、銘文付近で7mm、関付近で10mmを測る。柄部は長さ11.5cm、幅は関付近で2.5cm、柄頭付近で2.1cm、厚さは関付近で10mm、柄頭付近で5mmを測る。

全体の形状は直刀で、切先は直線的な形状を呈するが、切先部分は劣化してさざくれ、薄板状に剥離している状況が確認でき、正確な形状は現段階で確定できない。峰の象嵌銘文の他には、刀身部分に装飾はなく、金属製の刀装具も確認できない。刀身部の断面形状は砲弾形に近く、側面は緩く弧を描き、峰部分も弧状に膨らむ。

関部分は鍔金具の下に位置し、X線撮影の結果、形状は片関であることが判明している。関は8mmの段をつける。茎部分はごくわずかに反り、断面形は隅丸長方形を呈する。茎の柄頭側端部に目釘穴が開けられ、目釘が遺存しているのが確認できる。

関の部分に鍔金具が装着されており、銷落としの結果金銅製であることが確認されている。鍔金具は長さ3.7cm、縦3.3cm、厚さ2.1cmで、厚さ約2mmの板を巻いて構造が確認できる。断面形は梢円形を呈し、側面に接合部がある。柄頭側端部は玉縁状に整形している。この金具以外の刀装具等はX線写真では確認できない。

銷落としの作業の過程で、刀身部分に木質が遺存していることが判明し、鞘を着装した状態で副葬されたと考えられている。

象嵌・銘文 銘文は象嵌で刀の峰の部分に刻まれており、「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果□(練カ)」の19文字がX線で確認できた。銘文付近の刀身には破損がなく、象嵌の剥落も少ないため、各文字の読みに大きな支障はない。2012年12月、銷落としの過程で象嵌の一部が露出し、分析の結果、象嵌の材質が金であることが判明した。詳細は次章で述べられている。

銘文の内容は前後半に大きく2分され、前半は大刀の作成年月日を干支で記し、後半は大刀を作成

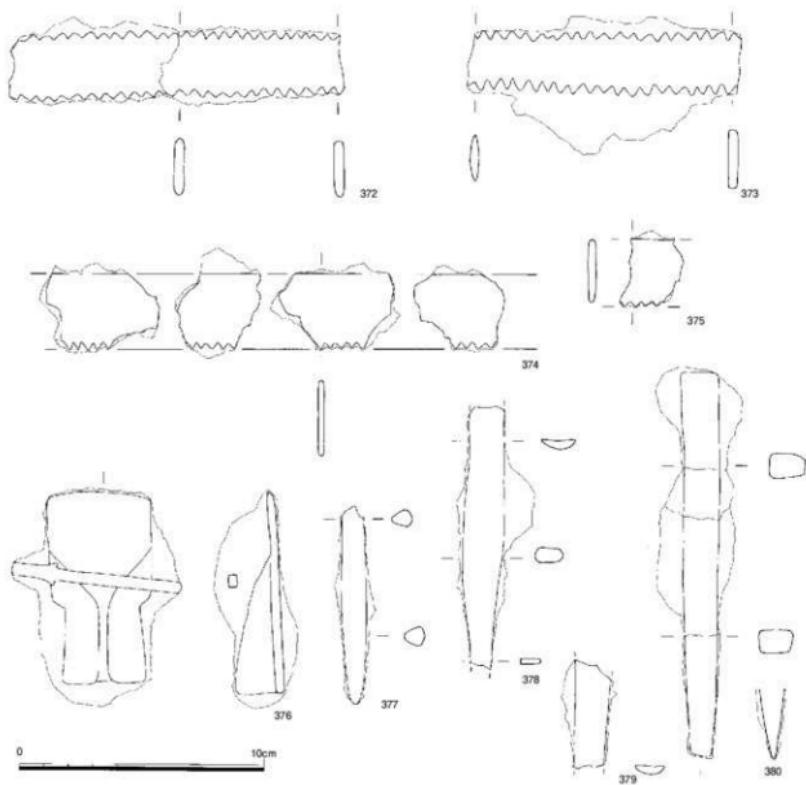


fig.59 鉄製工具実測図 (1/2)

した状況が記されている。「大歳庚寅」は製作された年を表し、「正月六日庚寅」は製作日とその干支とみられる。「庚寅」年として西暦 510 年、570 年、630 年、690 年などがあげられるが、このうち「正月六日」が「庚寅」の干支になるのは 570 年だけで、大刀の製作年が 570 年であると推定できる。後半の「作刀凡十二果口（練ヶ）」は刀を作成した状況を記載しているが、「十二果口（練ヶ）」については解釈が分かれ、「刀を 12 本作成した」という解釈と「刀を 12 回鍛錬した」とする解釈が提示され、今後の課題となっている。

なお、X 線撮影等の結果、刀の地金の腐食が相当進んでいることが判明している。

3) 鉄矛 (fig. 57)

墓道西側部分で出土したものである。地山面から 10cm 程度浮いた状態で出土し、出土時には切先

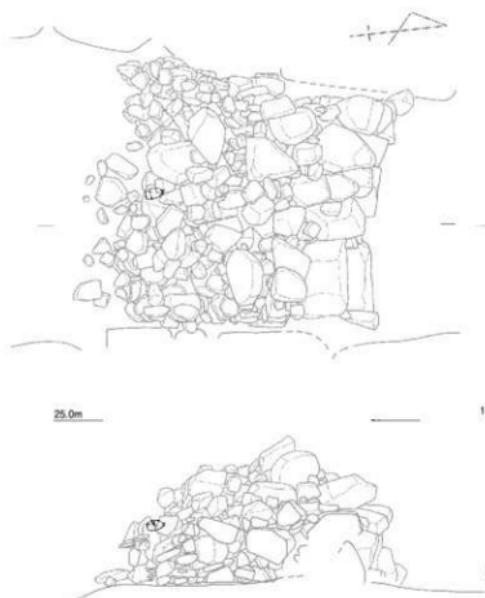


fig.60 大型青銅鈴出土状況図 (1/30)

4) 馬具 (fig. 58)

漢道左側壁際を中心として馬具が出土した。出土当初は鉗がひどく付着しており、不明鉄製品としていたが、その後X線写真による観察で馬具であることが判明した。以下、X線写真による図化に基づいて掲載するが、資料の詳細な形状については保存処理終了後に改めて報告する予定である。

362は轡部分で、衡と引手を確認することができる。引手は長さ約13cmで、両端に環をつくる。断面形状は円形へ隅丸三角形を呈する。衡は引手と連結し、1本の長さ約9cmで、2本以上の連結を確認する。鉗塊の中に環状の破片が確認でき、素環鏡板の一部と考えられる。363は馬衡。長さ約12cmで、両端に環を作り、環の向きは直交する。一方の環の端部に小環の破片が確認でき、衡の端部が連結していると見られる。その他に小環破片が1点確認でき、鏡板の一部と推定される。

364・365は引手とみられる。棒状部分に環部分が屈曲して接合する。環部分は正円に近い形状で、詳細な形状はX線写真からは読み取れない。棒状部分は端部を欠き、断面形は隅丸方形を呈する。365は両端の環の一方を欠き、遺存する方の環は棒を捻って藤手状に作られる。棒状の部分は断面形が円形を呈する。

366は引手または衡の破片と考えられ、環部分はX線写真では不整形を呈するように見える。環部分の下に突帶状の形状が見られるが、詳細については鉗落とし後に観察したい。棒状部分の断面形は円形を呈する。

367～369は素環破片で、鏡板の破片と見られる。復元径約6cmになるものと推定される。断面形状は円形と方形の部分があり、別個体の可能性もある。370・371は鉗具とみられ、この2点は墓

を石室側に、基部を周溝側に向け、墓道方向に平行方向で埋没していた。遺物の性格や出土状態から考えると、玄室・談道に崩落されたものが持ちだされてこの場所周辺に廃棄され、埋没したものと見られる。遺物周囲に搅乱された痕跡はなく、自然堆積の過程で埋没したものと考えられ、墓道東側に廃棄されたものが墓道側に転落して埋没したこととも考えられる。

鉄矛は長さ26.7cm、幅は切先部分で1.1cm、袋部端部で3.0cmである。刺突部の断面形は三角形で、先端は三角錐状を呈する。基部は断面形が円形で袋状を呈する。X線写真による観察によると、袋部長は11.1cmで円錐形を呈する。袋部端部に目釘が2本打たれ、1本は貫通しており、1本は貫通できずに途中で曲がっている。

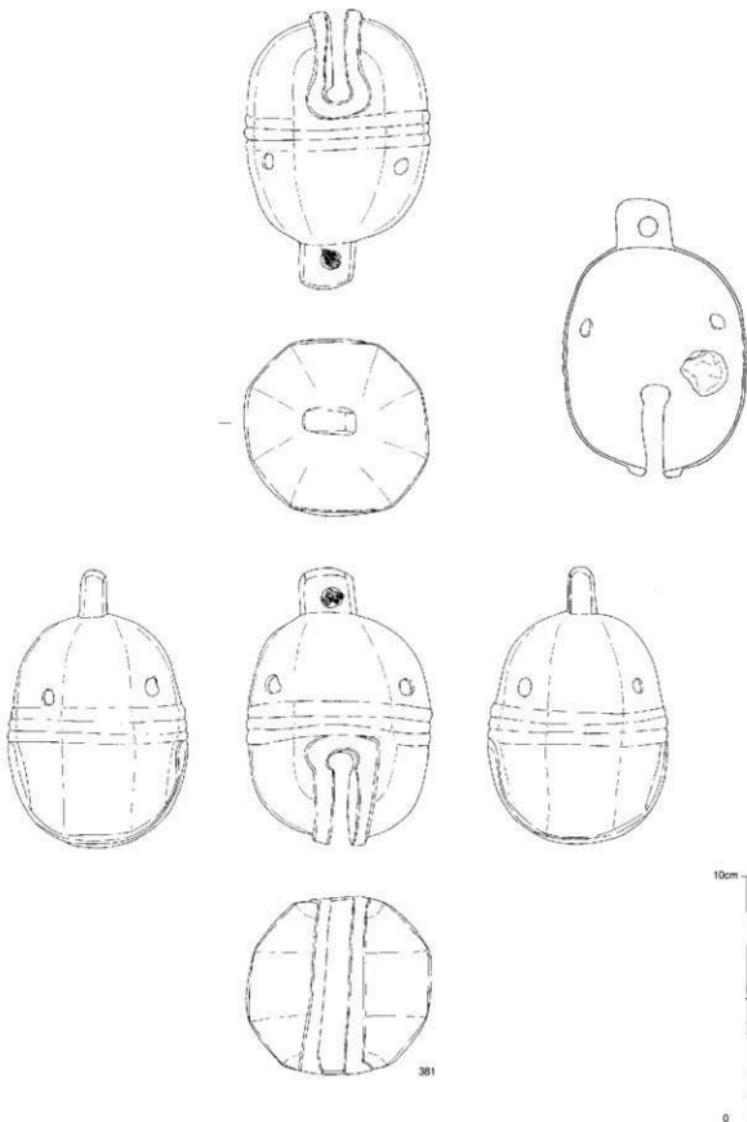


fig.61 大型青銅鈴実測図 (1/2)

道からの出土である。370は輪金部分の破片で、断面形は方形を呈する。371は輪金と基部横軸部分で、X線写真で見る限り、横軸は輪金と一体で作られているようである。

5) 工具 (fig.59)

玄室・羨道・墓道から工具と見られる鉄製品が出土している。372～374は鋸で、両刃、片刃の両方の資料を確認している。いずれも羨道から出土した。372・373は両刃鋸。372は幅2.7cm、373は幅2.4cmで、幅に差があるため別個体とみられる。厚さは4mm程度で、断面観察では刃は両側から研ぎ出されているとみられる。374・375は片刃鋸。374は幅3.0cm、375は幅2.7cmで、別個体とみられる。刃の形状など詳細は現時点では確認できない。鉄製鋸は、近隣では桑原石ヶ元古墳群の12号墳での出土例がある。

376は袋状鉄斧で鉄鍔破片を鋸塊中に含み、羨道右側壁際の鉄鍔が集中して出土した箇所から出土した。鍔造品とみられ、鉄板を折り曲げて袋部を作り、接合部分には隙間がみられる。袋部と刃部の境に肩が作られる。刃部は側面が並行し、刃先はわずかに弧状になる。袋部の断面形状など詳細は現時点では確認できない。

377は先端が尖り、全体に棒状を呈することから鑿または鑿状の工具と考えられる。断面形は倒卵形に近い三角形を呈する。

378・379は玄室から出土し、断面形状等より鉗と判断した。378は先端部と基部を欠損する。刃部は幅1.1cm、厚さ4mmで、断面形は三日月形を呈する。刃部と基部の境界付近が最も厚く、断面形は梢円形に近い。基部は厚さ2mm程度と薄く作られる。刃部幅はほぼ一定である。

380は盤で羨道から出土し、完形で遺存する。全長15.7cm、基部は幅1.5cm、厚さ1.0cmで方柱状を呈する。先端部は刃状に尖り、幅は0.9cmである。鋸か厚く、基部端面の叩打痕の有無は不明。

(5) 青銅製品 (fig.60～62)

381は大型鈴。閉塞石積み内から出土した。閉塞石積みは中世以降に堆積した上層部と古墳本来の石積みが遺存する下部に分けられ、大型鈴は下層の石積みの上面で検出された。出土位置の層位からみて、古代以前に石室内から持ちだされて閉塞石積み中に放置されたとみられ、古墳追葬時にすでにこの場所に置かれていた可能性もある。

鈴は全長11.4cm、幅7.5cm×7.2cm、鈕高1.8cm、鈕幅2.3cm、鈕厚1.1cmで、鈴体の形状は梢円球に近い形状を呈する。鈕は方柱形で、鈴口の直交方向に配置され、上端は曲面を作る。鈕には直径8mmの鈕孔が開けられ、孔内部には組状の繊維が遺存しており、懸垂用の紐が付けられていたと考えられる。鈕は鈴体部の主軸に斜めに付けられており、馬の胸部に着装した場合の傾斜を考慮し、馬具として実用するために作られたものとみられる。大型鈴に頻見する花弁状の鈕座は無い。

鈴体部は断面が8角形を呈し、腹部に腹帶を3条回す。鈴体部の縦方向の稜線は明瞭ではなく、柔らかく丸みをもつ。腹帶は蒲鉾形の断面を呈し、一部は鈴口部の口唇部と一体化する。鈴口は薄板状の唇状突起を有し、鈴口端部に円孔がつく。

鈴体部上半部に型持孔が4ヶ所開けられている。内部には土製の丸が内壁に錆着しており、実際に鈴の音が鳴っていたものと推測される。

382は玄室内の大刀下面に張り付いた状態で出土した青銅の板状製品。飾り金具とみられ、5つの円孔と4本の針状突起が確認できるが、全体の形状は不明である。

第4章 考察

1. 6号墳の築造年代と大刀の副葬時期について

(1) 7世紀前半代の須恵器の年代観について

7世紀の須恵器編年については古くから研究が進められてきたが、現状では未だ研究者間での共通認識が整えられていない。まず、これまでの研究・編年案について概観し、6号墳の分析で使用する須恵器の編年観について明示する。その上で古墳出土の須恵器について分析を加えて行きたい。

畿内の7世紀代の須恵器編年については、1960年代以降の陶邑の調査による編年（田辺1966・中村1978）に加え、飛鳥・藤原地域の調査による暦年代の明らかな一括遺物の増加によって、1980年代にいわゆる飛鳥編年が成立した（西1982）。一方1990年代には難波宮跡の調査が進み、この成果を基とした難波宮編年も提示されている。（佐藤2000）。

一方、北部九州の7世紀の須恵器編年は1960年代の小田富士雄氏の研究（小田1964）に基づき、牛頭窯跡群や筑後の各窯跡の調査による編年が積み上げられてきた。この編年の枠組みについてはその後数十年にわたり研究者間の共通認識として支持されてきた。しかし近年資料の増加、特に大宰府周辺の新たな資料によって絶対年代を含む編年の枠組みを再考する動きも出ており、その過程で飛鳥編年や難波宮編年と九州編年を対比する試みも行われている。ただし、現段階では各型式の実年代について共通認識を得る段階までは至っていない。

今回、6号墳の年代を考察するにあたり、根拠とする須恵器の編年として出土資料の多くを産しているとみられる牛頭窯跡群の編年（舟山2008）を型式の基準として使用し、実年代観については難波宮編年と飛鳥編年の最近の年代観（川越2000）を参考にしたい。

(2) 6号墳出土須恵器の検討と古墳の築造年代・大刀の副葬年代

6号墳では100個体以上の須恵器を確認しているが、大半が墓道・墳丘からの出土で、玄室・漢道からは30個体未満しか出土していない。ただし玄室・漢道から出土した須恵器は完形または略完全形のものが大半であり、搅乱を受けず原位置のまま埋没したものと見られるが、石室外から出土した

資料は全て破碎し小片になったものであり、後世の造成により搅乱されたものが多い。これらの資料は出土位置・出土状況に差があるが、周辺に同時期の古墳や遺構が確認されていないことから全て6号墳に関連するものとみなし、俎上に載せたい。

fig.63は出土須恵器の型式を出土位置ごとに表示したものである。玄室から出土した須恵器をみると、环が1点しか無い一方で、高环・平瓶の割合が多いことが注目される。27の平瓶は玄室と漢道に破片が分散しており、他の平瓶とは分けて考える必要があるが、その他の平瓶3点は型式的に異なるものである。一方3点の高环も型式的に異なり、あたかも平瓶と高环が2個1組で副葬されたとも考えられる状況を呈する。各資料の出土位置をfig.31で確認すると、平瓶28・高环24は玄室端の棚石際、高环23は玄室右袖奥で検出され、

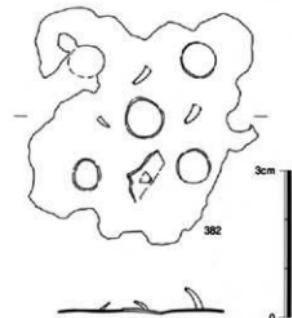


fig.62 玄室出土青銅製品実測図(1/1)

	玄室	羨道	墓道・墳丘	
IVA				難波Ⅱ新
IVB				飛鳥一 難波Ⅲ古
V				飛鳥II 難波Ⅲ中
VI				

fig.63 6号墳出土須恵器分類表(1/10)

片付けられて脇に寄せられたことも考えられる状況である。一方平瓶 26・高环 25・环 20 の3点は床面中央付近で検出されており、副葬時の状況のまま検出された可能性が高い。そして平瓶 26 のすぐ脇に大刀が置かれ、平瓶と大刀は位置的に強く関連しているとみられる。これらの状況からみて、最終埋葬以前の段階で平瓶 28・高环 23・24 が副葬され、最終埋葬で平瓶 26・高环 25・环 20、そして大刀が副葬されたと考えられる。

これを編年上で確認すると、高环 23・平瓶 29 が IV B 期、高环 24・25・平瓶 26・28・环 20 が V 期にあたる。大刀の副葬年代はこの V 期、すなわち小田氏が 7 世紀前半とし、舟山氏が 7 世紀前半～中期と考え、併行する難波Ⅲ中段階、および飛鳥 I 新相（山田寺下層出土土器）～飛鳥 II 古相の年代觀から導き出せる 7 世紀第 2 四半期と考えられる。玄室内部の土器の出土状況はその前段階の土器まで含み、7 世紀第 1 四半期後半～第 2 四半期前半に別の埋葬行為があったことを暗示している。

一方、石室外の墓道・墳丘出土須恵器を検討すると、まず器種別には环身・环蓋の個体数が多いことがわかる。確認された点数の凡そ半数近くが环身・环蓋で占められる。玄室・羨道で多く見られた平瓶は溝状通路で出土した 244 の 1 個体だけである。高环は高脚で古相のもの（217・233）と短脚で坪部が浅い新相のもの（219）と時期が極端に分かれ、新相のものは玄室内遺物よりも時期が下る。

出土数が最も多い环身を中心型式を確認すると、环身の受け部立ち上がりが細く高い IV A 期の様相を残すものが出土資料の中で最古のものとみることができ、この時期に 6 号墳が築造されたものと考えられる。ただし数量がごく少ないとことから IV A 期内といいうよりむしろ IV B 期の最初期とみられ、難波 II 新段階併行、則ち 7 世紀初頭とみることができる。

また、墓道からは 219 の高环のように玄室内出土土器よりも時期が下る型式のものもあり、他に 193 ～ 195 など VI 期とみられる环身の破片が確認されている。これらは最終埋葬後の墓前祭祀に使用されたものと考えられ、難波 IV 新段階併行の 7 世紀後半に祭祀が実施されたことが想定される。

2. 玉・装飾品からみた被葬者数

玄室内から耳環 10 点のほか、玉類が 100 点以上確認されている。報告文中でも述べたが、既に風化して粘土化し、取り上げ・図示が不可能なガラス玉が確認されていること、また敷石より下は未掘

であることから、実際の副葬点数はさらに多かったことが確実である。

耳環は出土位置をポイントで確認できるものが4点で、6点は出土範囲を50cmグリッドで把握できるものである。fig.64は耳環・玉類の出土状況を図示したものであるが、耳環が出土したグリッドはA-3、B-3(2点)、B-4、C-3(2点)で、いずれも漢道側である。出土位置をポイントで確認できる耳環のうち1点が漢道側で出土しており、計7点が玄室の漢道側で出土している。確実に耳環が2個セットで奥壁側に確認できるのは30・31の1組だけである。

さらに、玉類の出土状況を確認した結果、ガラス丸玉・ガラス粟玉のいずれもB-3、B-4からの出土数が圧倒的に多く、C-1・C-2を中心とする部分が次いで多いことが判る。またペンダントトップとしての要素が強い勾玉はB-1(146)・B-3(147)で確認され、その他の水晶製切子玉も3点がB-4で、隣接するB-3・B-5でも1点ずつが確認されており、B-3を中心とした範囲に玉類を使用した装飾品が存在したことが明らかである。

ここで、次に出土数が多いC-1～D-2までの範囲について玉類の出土数を見てみると、粘土化して取り上げ不能だった資料も含めガラス丸玉26点、水晶製切子玉1点が確認されている。この範囲では耳環が2点1セット確認されており、この範囲に1組の装身具がまとまっていた可能性が高い。これを基準として漢道側のA-3～C-5の範囲から出土した玉類の数を検討すると、取り上げ不能だった資料も含めガラス丸玉44、ガラス粟玉34、土玉5、水晶製勾玉1、水晶製切子玉5、ガラス小玉1の計90点と数、種類ともはるかに多く、この範囲に複数セットの装飾品が重複していたことが想定できる。仮に耳環のセット数4で頭割りすると、水晶玉1～2点を含む20点前後の玉類を使用した装飾品セットが仮定でき、玄室奥壁側のセットと同等のものが考えられる。

このように、耳環の出土位置と玉類の出土状況は齟齬をきたさないことから、装飾品からみた被葬者の数は5人が想定でき、うち3人は頭位が玄室左側の漢道寄りに重複し、1人は玄室左側中央付近に頭位を据えていたとみられる。

大刀が副葬された被葬者は玄室左側に頭位をもつ4人のいずれかということで考えると、玄室内部は左側に被葬者が横たわり、玄室右側に副葬品を置く構成だったと考えられる。大刀や副葬土器が玄室右側に集中していることや、2面目と見なした敷石が玄室左側に偏っていることも、この部分に被葬者が安置されていた可能性を示すものであろう。

3. 墳丘の構造について

6号墳周辺のトレンチ調査の結果、墳丘は中世の段階で相当削平され、ひな壇状に造成されていたことが判明した。石室奥壁後背部も中世前半に露出していたことが明らかになっている。

このように早い段階から墳丘が失われていたために、現段階で墳丘の正確な形状を追跡検討することは非常に難しい。しかしわざかに残された痕

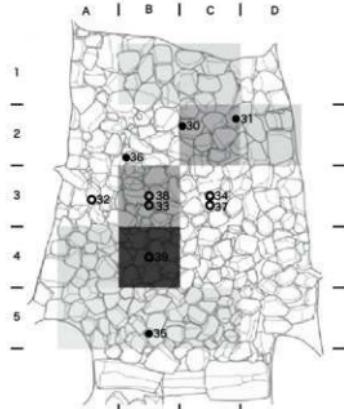


fig.64 玄室内玉類・装身具出土状況 (1/40)

アミの濃度は玉類の出土量を表す。●は出土位置がポイントで確認できる耳環。○は出土範囲をグリッド単位で確認できた耳環。

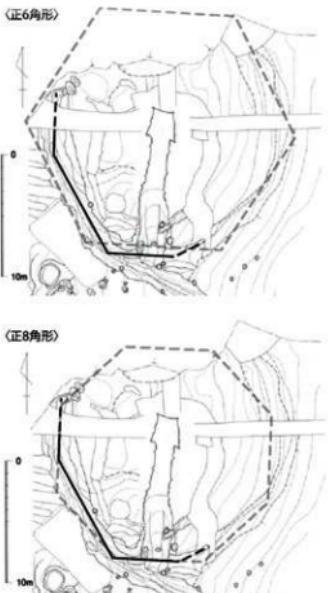


fig.65 6号墳墳丘復元モデル図(1/400)
fig.65 6号墳墳丘復元モデル図(1/400)

跡を拾いながら墳丘の形状と立地状況について検討したい。

墳丘西側に遺存する周溝は墳丘南西部で直線的な形状をとり、墳丘前面にも東西方向の直線的な段が形成されるため、この部分については多角形的な様相を示す。しかし周溝の直線部分を多角形の1辺として石室を中心とした墳丘を復元しようとすると、fig.65のように正六角形、正八角形といった正多角形を想定することは困難である。

墳丘東側には墳丘築造の際に地山の黒色土を削りこんで整形した微かな段が残されている。トレーナー断面土層の観察によれば上層からの掘り込みではなく、古墳築造時のものと判断できる。この整形痕を墳丘外縁の痕跡とみれば、直線的な部分やコーナーとみなせる部分も存在するが、むしろ半円形に近い形状で墳丘西側とは非対称形となる。のことからも、墳形を正多角形とするには無理があると考えられる。

6号墳の墳形を積極的に正多角形と認定する材料に乏しいことから、ここでは不整形な円墳とみるのが妥当ではないだろうか。

古墳の墳形と並んで石室の配置にも着目すべき点がみられる。玄室・羨道を結んだ主軸の方向はほぼ南北方向に正確に向いている。また谷から上がる溝状通路との取り付け角度も不自然である。さらに6号墳の開口部は東側の谷下流側からは見ることができず、同時に玄室内から羨道を通じた外側の眺望も斜面に遮られて塞がれている。7世紀代の小規模古墳は通常斜面下方むけて開口されるものが多く、眺望も開けている。

このような同時期の古墳に見られない不自然さを伴いながら石室主軸を南北方向にとったことについて、古墳築造の背景として「方位」の思想がもたらされ、それをいち早く導入したことが想定できる。6号墳の築造に際して後の八角形墳と同じ築造原理が用いられたことが考えられ、これによれば地形の制約を無視した古墳築造についても説明が可能である。

元岡古墳群G群全体の意義や古墳群内での3・6号墳の位置付けについては1号墳の報告を待って後日改めて検討したい。

〈参考文献〉

- 西弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念 古文化論考』
- 佐藤隆 2000 「古代難波の土器様相とその史的背景」大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第11
- 田迎昭三 1966 「陶邑古窯址群I」
- 中村浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」大阪府教育委員会編『陶邑III』大阪府文化財調査報告第30報
- 小田富士雄 1964 「九州の須恵器序説」『九州考古学』22
- 舟山良一 2008 「須恵器の編年」『牛頭窯跡群 総括報告書』大野城市文化財調査報告書第77集
- 川越俊一 2000 「藤原京条坊年代考」『研究論集X』奈良国立文化財研究所学報第60集
- 網干善教 1979 「八角方墳とその意義」『樋原考古学研究所論集』第5
- 直宮憲一 1988 「八角墳再考」『網干善教先生草稿記念 考古学論集』

4. 庚寅銘大刀の保存処理

福岡市埋蔵文化財センター 上角智希

庚寅銘大刀は、現在、福岡市埋蔵文化財センターで保存処理作業を行っている最中である。現在までの保存処理作業の概要について報告する。

(1) 平成 23 年度

平成 23 (2011) 年 9 月 7 日に、埋蔵文化財センターの上角智希と西澤千絵里が現地で鉄刀の取上げを行った。現地での印象は、土さびに覆われた茶色の棒状の塊であり刀装具も見当たらず、貴重なものという認識はなかった。調査担当者からその日のうちにエックス線撮影をしてほしい旨の依頼があり、同日の夕方、埋文センターに持ち帰ってすぐにエックス線撮影をおこなった。その結果、柄のすぐ上の背の部分に 19 文字の銘文が刻まれているのを発見した。刀身の腐蝕が進んでいたことが幸いして、象嵌の文字ははっきりと見えた。

取上げたその日に銘文大刀であることが判明した意義は非常に大きい。このことにより、古墳の再精査が可能となり、古墳 자체の価値もいち早く認識された。迅速な事前調査により遺跡の価値や意義を早急に把握することができたということは、保存科学の目的から言えば非常に大きな成果である。

同年 10 月 14 日には、近隣の九州国立博物館、九州歴史資料館に協力してもらい、三次元エックス線 CT の撮影を行った。装置のターンテーブル上に遺物を置き、それが 1 回転する間に数百枚のエックス線画像を撮影、それをコンピュータで画像処理して、遺物の表面形態や内部のエックス線画像を 3 次元で表すものである。3 次元 CT により、従来のエックス線撮影装置では撮影困難な刃の部分の断面画像を、切っ先から茎まで少しづつ場所を移動させながら観察できたり、銘文の文字をいろいろな角度から観察できた。今後のクリーニングにあたって非常に有効な情報を数多く得ることができた。また、その 3 次元データをもとにさびを落とした状態の大刀模型を製作した。

従来の事前調査は 2 次元のエックス線写真撮影で終わっていたが、同じ福岡県内に 3 次元エックス線 CT があるという幸運にも恵まれ、新しい 3 次元での事前調査とその成果の保存処理作業への導入の試みを行っている。また、地域の保存科学担当者が連繋して、よりよい保存処理の方法を模索する体制をつくっている。いずれも非常に意義深い取り組みと認識している。

(2) 平成 24 年度

前年度の事前調査の成果をもとに、具体的な保存処理の方針、方法、スケジュールを検討し、実際に作業を始めた。平成 24 (2012) 年 7 月 3 日に第 1 回調査指導委員会を開催し、福岡市が主体となって地元で保存処理作業を進めることと、その大まかな内容が了承された。まずは刀身を覆っている錆こぶを削っていく作業を行っている。

あわせて、象嵌文字を 1 文字表出してその状態の把握を行った。刀身の内部が脆弱と考えられるため、事前に樹脂含浸を行って刀身の強化を図った。その上で CT データをもとに、表面から文字までの深さや象嵌の下地の劣化状態を 1 文字ずつ検討して、最初に表にする文字を決定し、実際にヘッドルーペをしてのグラインダーでの作業および顕微鏡下での手作業で文字の一部を表出した。蛍光 X 線分析を行い、象嵌文字の材質は金であることが判明した。

平成 25 (2013) 年 1 月 31 日に第 2 回調査指導委員会を開催し、今年度の作業内容を報告した。平成 25 年度には本格的に文字の表出を行う予定である。

6. 元岡古墳群G-3・6号墳出土のガラス製玉類について

福岡市埋蔵文化財センター 田上勇一郎・西澤千絵里

1. はじめに

ガラスはその材質や製作技法の違いを調査することによって、流通経路や歴史的変遷などを明らかにすることができます。今回、元岡古墳群G-3号墳とG-6号墳から出土したガラス製玉類について実体顕微鏡観察による製作技法の調査と蛍光X線分析による材質分析をおこなったので報告する。

2. 製作技法

ガラス製小玉・丸玉・粟玉の製作技法には引き伸ばし法（管切り法）、連珠法、巻き付け法、鋳型法、分割研磨法、加熱貫入法、融着法があり、気泡の形状や方向性、色むら、孔内面、端面の観察によつて分類することができる（大賀 2002）。そこで実体顕微鏡により詳細な観察をおこなった。その結果二つの製作技法が認められた。一つは引き伸ばし法（管切り法）で、孔に対して平行方向の気泡列を観察することができる。この方法は、熱で柔らかくなったガラス塊からガラス管を引き伸ばして製作し、そのガラス管を切断して小玉にし、その後加熱により整形をおこなうというものである。もう一つは巻き付け法で、孔に対して直交方向の気泡列や色むらを観察することができる。これは軟化させたガラス棒を孔と直交する方向に回転させて小玉を製作する方法である。

3. 材質分析

日本で出土する古代ガラスは化学組成から鉛ケイ酸塩ガラスとアルカリケイ酸塩ガラスに大きく二分される。さらに鉛ケイ酸塩ガラスは鉛ガラスと鉛バリウムガラスに分類され、アルカリケイ酸塩ガラスはカリガラス、ソーダ石灰ガラスに分類される。また、ソーダ石灰ガラスはナトロンガラス、植物灰ガラス、高アルミナソーダ石灰ガラスに細分される（肥塚・田村・大賀 2010）。

ガラスの化学組成を調べるために蛍光X線分析をおこなった。装置は福岡市埋蔵文化財センター設置のエダックス社製 Eagle μ plobe で、対陰極：モリブデン（Mo）、検出器：半導体検出器、印加電圧 20kV、測定雰囲気：真空、測定範囲 0.3mm ϕ 、測定時間 120 秒である。資料は洗浄をおこなつただけの非破壊分析である。

分析の結果、鉛ガラス、鉛バリウムガラス、カリガラス、ナトロンガラス、植物灰ガラス、高アルミナソーダ石灰ガラスのすべての種類が認められた。また、着色剤もコバルト、銅、鉛などが用いられていることがわかった。また、コバルトにも不純物としてマンガンを伴うものと銅・鉛を伴うものの 2 種類が認められた。

4. G-3号墳のガラス製玉類 (fig.9・tab.3)

1 点の管玉と 49 点の小玉がある。15 の管玉は鉛バリウムガラスで着色に銅が用いられている。鉛バリウムガラスは古墳時代には日本への流入が途絶えていたと考えられており（肥塚・田村 2012）、伝世された可能性がある。小玉はカリガラス 7 点、植物灰ガラス 22 点、ナトロンガラス 4 点、高アルミナソーダ石灰ガラス 16 点である。カリガラスは 16 ~ 18 の緑色～淡青色の 3 点が銅着色で、19 ~ 22 の紺色の 4 点がマンガンを伴うコバルト着色のものであった。植物灰ガラスは紺色を呈する 23 ~ 41 の 19 点が銅・鉛を伴うコバルトによる着色で、42 の緑色を呈するものが銅による着色である。淡青色の 43 と緑色の 44 は着色剤となる特徴的な元素が認められないが、44 は鉛の含有がややあり、着色の原因になっているかもしれない。植物灰ガラスは古墳時代中期後半から流通が始まり、その後は大量に出土するとされている（肥塚・田村・大賀 2010）。45 ~ 48 の 4 点はナトロンガラスで紺色を呈する。ナトロンガラスは弥生時代後期と古墳時代中期前半の試料に見られるが植物灰ガラスより

は多くないとされている。着色はマンガンを伴うコバルトであり、また、引き伸ばし法により作られており典型的なナトロンガラスではなく、ナトロン主体ガラスに分類されるものであろう。(肥塚・田村 2012)。高アルミナソーダ石灰ガラスは 49 ~ 55 の緑色~淡青色の 7 点が銅着色で、黄緑色の 56 が銅・鉛の着色、57 ~ 64 の紺色の 8 点が銅・鉛を伴うコバルトによる着色であった。高アルミナソーダ石灰ガラスは色調が多様で色調によって消長に相違が認められ、紺色透明のマンガンを含まないコバルトによる着色のものは 6 世紀代に見られるが流通量は他の色調のものより少なかったとされている(肥塚・田村・大賀 2010)。しかし G-3 号墳では 8 点と高アルミナソーダ石灰ガラスの内半数を占めた。

5. G-6 号墳のガラス製玉類 (fig.33 ~ 35 · tab.4)

丸玉・小玉 67 点、栗玉 35 点、勾玉 1 点がある。丸玉・小玉は鉛ガラス 65 点とカリガラス・高アルミナソーダ石灰ガラス各 1 点であった。鉛ガラスのうち、40 ~ 99 の 60 点は風化で表面が粉状になっており白色を呈する。そのうち、割れた 85 については未風化部分が観察・分析でき、緑色透明を呈し、銅による着色であることがわかった。140・141・156 の 3 点は黄色を呈し、鉛による着色である。巻き付け法で成形されている。142・143 は緑色を呈し、銅・鉛による着色である。巻き付け法で成形されている。鉛ガラスは弥生時代に若干流通するが古墳時代前期から後期後葉には見られなくなり、流通が途絶えていたとされる。その後、7 世紀初頭から流通が本格化し、7 世紀後半以降、国内生産された。鉛同位体比の測定により弥生時代は中国産、7 世紀初頭～中葉のものは朝鮮半島産で、7 世紀後半以降は国産品が流通することが確かめられている(肥塚・田村・大賀 2010)。G-6 号墳の鉛ガラスは分析していないものの、その時期から朝鮮半島産であると考えて良いだろう。また、「弥生時代から古墳時代の鉛ガラスの色調は銅によって着色された緑色系に限定されていた」(肥塚・田村・大賀 2010) とされ、風化して白色化したものも銅によって着色された緑色系であったと思われる。しかし「緑色系に限定されていた」とされる中に黄色の丸玉 2 点が含まれていることが注目される。144 はカリガラスで紺色を呈し、マンガンを伴うコバルトによる着色、145 は高アルミナソーダ石灰ガラスで紺色を呈し、銅・鉛を伴うコバルトによる着色である。栗玉はいくつか判断がつかないものもあるが、引き伸ばし法により成形されている。カリガラス 1 点、高アルミナソーダ石灰ガラス 34 点であった。105 はカリガラスで紺色を呈する。銅を含んでおり、これが着色剤であると思うが、紺色なのでマンガンを伴うコバルトによる着色の可能性もある。高アルミナソーダ石灰ガラスは 106 ~ 134 の 29 点が淡青色を呈し、銅による着色である。135 ~ 139 の 5 点は黄色を呈し、鉛の着色である。146 は勾玉で高アルミナソーダ石灰ガラスである。青緑色を呈し、銅による着色である。

6.まとめ

両古墳のガラスの種類の組成は異なっており、時期差を示していると見られる。また、その組成はこれまでの研究成果とよく合致している。今回の成果が古代ガラスの流通経路や歴史的変遷についての研究の基礎データになれば幸いである。

〈参考文献〉

大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史的変遷」『古代ガラスと考古学』月刊文化財 566 号

肥塚隆保・田村朋美 2012 「古墳時代のガラス」『古墳時代の考古学』8 同成社

ため、太陽と月との離角は、決して一定の割合では増加しない。定朔法を用いると、原則的に日食は明に、月食は暗にしか起らなくなることになり（黄道と白道は交差しているので、明に必ず日、月食が起るわけではない）。日食・月食の予報には、こちらが適している。

(12) 小川清彦「日本書紀の曆日について」（香華園治編『小川清彦著作集 古天文・曆日』の研究所蔵、昭和社、一九九七年。初発表一九四六年）二三頁。

(13) ただし飯田瑞穂（天寿國編帳をめぐって）『飯田瑞穂著作集1 瑞穂太子伝の研究』所収、吉川弘文館、二〇〇〇年。初発表一九六五年。大谷光男（「日本書紀」の曆日）一一五頁。前掲書所収は、天寿國編帳の「辛巳年十二月廿一日癸酉」から、唐初の庚寅曆の伝来を推測している。辛巳年（六二）は武德四年。これに対し、金沢英之『天寿國編帳の成立年代について』（儀鳳曆による計算結果から）『国語と国文学』七八一（一一二〇〇一年）は、儀鳳曆を平朔法で計算すれば、銘文の辛巳十二月二日は甲戌となるが、本来の定朔法で計算すれば、その日は癸酉となり癸酉となることを指摘し、銘文の当該部分は持統・文武朝以降の述作であるとした。計算としては理解できるが、儀鳳曆を定朔法で用ひさせて日付の干支を推算するほどの能力を持つ者が、唐で儀鳳曆（麟德曆）が用いられたのは武徳四年よりはるかに後のことでありますことを知らなかつたとは考え難いであります。天寿國編帳の伝来を推測した曆法については、なお後考に俟ちたい。

- (14) 鐘田元一「曆と時間」『律令国家史の研究』所収、堀書房、二〇〇八年。初発表二〇〇六年三三六頁。
- (15) 広瀬秀雄「日本史小百科 曆」前掲、七〇頁は、「日本書紀」の雄略朝から元嘉曆法が用いられていることから、欽明朝を數百年遡るところから曆博士の雇用あつたと見て差し支えないとしている。
- (16) 本報告書参照。
- (17) 東野治之「朝鮮半島出土の單龍文環頭大刀銘」『日本古代金石文の研究』所収、岩波書店、一〇〇四年。初発表一九九二年。参照。特に四角で囲まれる字画が下すばまに用いられていることから、欽明朝を数百年遡るところから曆博士の雇用あつたと見て差し支えないとしている。
- (18) 韓理洲等『全北齊北周文補遺』（三秦出版社一〇〇八年）全後周文補遺一四頁。
- (19) 内田正男『日本曆日原典』（前掲）五四頁。
- (20) 東野治之「福岡・元岡古墳群出土の大刀」（前掲）。
- (21) 西山要一「東アジアの古代象嵌文大刀」（奈良大文学部文化財学科『文化財学報』一七、一九九四年）七六八頁。

（18）韓理洲等『全北齊北周文補遺』（三秦出版社一〇〇八年）全後周文補遺一四頁。
（19）内田正男『日本曆日原典』（前掲）五四頁。
（20）東野治之「福岡・元岡古墳群出土の大刀」（前掲）。

（21）西山要一「東アジアの古代象嵌文大刀」（奈良大文学部文化財学科『文化財学報』一七、一九九四年）七六八頁。

一九日朝刊）。

もう一点付け加えれば、「庚寅」の「庚」の方も、「かのえ」すなわち

「金の兄」を意味し、金属器の製作には相応しいと言える。従つて、そもそもこの銘文刀の製作を発意したのが、あるいは製作したのが「庚寅」の年であつたかどうか、もはや疑う余地はある。しかし、実際の發意や製作が何時であったかにかかわらず、「六日」という日付を決定した際に、

五七〇年のカレンダーが参照されたことは、疑う必要があるまい。

なお、この「庚寅」の年の「正月六日」を、當時西欧で行用されていたユリウス暦で表示しようとするならば、内田正男作成の表に従い、五七〇年一月二七日となることは言うまでもない。

おわりに

本報告で述べたことを、簡潔にまとめておく。本鉄刀銘文が象嵌されたのが五世紀半ば以降六世紀半ば以前の倭国、百濟、および中国の王朝であるならば、「庚寅」年が五七〇年であることは動かしがたい。一方、新羅、伽耶諸国で象嵌されたのであれば、これらの諸国の曆法が判然としないので確実なことは言えないが、仮に百濟や朝鮮関係にあつた中国の諸王朝の現行曆法を採用していたとすれば、やはり五七〇年と考えることになる。

〔附記〕今回の報告に際しては、国立歴史民俗博物館の平川南館長、奈良大学の東野治之教授、活水女子大学の細井浩志教授、愛知県立大学の丸山裕美子教授より貴重な助言を得たことを明記し、感謝の意を表します。

『日本書紀』は最後まで元嘉曆を用いていたことは、同書に文武天皇の即位日である同天皇元年八月朔（一月）を乙丑としていること（後醍醐天皇に基づく『続日本書紀』は甲子、すなわち乙丑の前日をもって八月朔としている）から推定できる。

(2) 唐代の改曆の状況と各曆の特徴については、戸内清『唐代の曆法』（増訂 南唐曆法史の研究）所収、臨川書店、一九八九年。原版一九四四年を参照。

(3) 日本書紀大系『日本書紀下』（岩波書店、一九六五年）五〇六頁。

(4) 今井透『奈良朝前後の曆日』（科学史研究、四〇号、一九五六六年）三六頁。

(5) 摂氏『大宝律令制定後における日中間の情報伝播』池田温・劉俊文編『日中文化交流史叢書』所収、獨逸文庫、一九九七年。五七〇頁。

(6) 久保常春『日本私年号の研究』（吉川弘文館、一九六七年）序論第四章四四、五頁。

(7) 「唐の年号名をいた新羅の金石文」（齋藤忠・大和久伸平『那須國造碑・侍塚古墳の研究』所収、吉川弘文館、一九八六年）参照。

(8) 以上、魏晉南北朝時代から隋にかけての曆法の変遷については、戸内清『殷周より隋に至る支那曆法史』（前掲『增訂 南唐曆法史の研究』所収）に詳しい。

(9) 坂元義種『倭の五王—その遣使と授爵をめぐって』（『朝鮮史研究会論文集』七、一九七〇年、三三、四頁）。

(10) 文化公報部文化財管理局『武寧王陵発掘調査報告書』（三和出版社、一九七四年）四六一七、五六頁、大谷光男『百濟武寧王・同王妃の墓誌』（『古代の曆日』所収、雄山閣出版、一九七六年）七〇頁。

(11) 平朔法・定朔法については、戸内清『殷周より隋に至る支那曆法史』（前掲）及び廣瀬秀雄『日本史小百科』（近藤出版社、一九七八年）一七一、五頁を参照。簡単に言えば、平朔法とは、太陽と月の離角が時間に正比例して増加すると仮定する曆法であり、これに対して定朔法は、月や太陽の直の運動に基づいた離角の直角によって朔日が太陽と同方向になつた瞬間を決める曆法である。地球は太陽を一つの焦点とする楕円軌道上を公転するため、地球が太陽に近づいたとき（北半球では冬）には太陽は天球上を遅く、遠ざかることにはゆっくりと動く（月行の盈縮という）。月が地球を周る角度も同様に地球から

(1) 内田正男『日本曆日原典』（雄山閣出版、一九七五年）五七七頁。月兩干支について

③は、前掲書によれば陳と北齊では元日が乙酉となり、正月六日が庚寅に当たるので、鉄刀銘文と一致する。『陳書』において正月に乙酉と丙午の記事があることは矛盾せず、また『北齊書』には「正月乙酉朔」に武平と改元したことが記されているので、確認ができる。

前掲書によれば、北周の暦では元日が丙戌であり、これだと六日は辛卯になる。『周書』には正月の記事はないが二月己巳の記事があり、庚寅は己巳の三九日前になるので、確かに正月中に庚寅の日が入ることは間違いないが、六日かどうかは決められない。ここで参考になるのが鄭術墓誌で、「大周使持節驃騎大將軍開府儀同三司大都督始州刺史清淵公鄭君」とこと鄭術の夫人妻淑姫は(天和)四年歲次己丑十二月丙辰朔十七日壬申に埋葬されたとある。これは庚寅年の前年にあたり、十二月が大の月であったとすれば翌年の元日は確かに丙戌となり、前掲書の曆算の正しさが証される。ただし十二月が小の月であったとすれば、翌年の元日は乙酉になり、六日が庚寅に当たる。

④は、前掲書によれば元日が丁卯となり、六日は壬申になるので銘文と一致しない。『旧唐書』には、この年の正月乙亥と癸巳に記事があるのと、正月庚寅は一六日以降となることが確かめられる。

前節以来の検討を踏まえて、本鉄刀銘文の実年代を推定してみよう。

まず、この鉄刀銘文が百濟もしくは倭國で象嵌されたものであつたとすれば、前節で述べたように、依拠した曆法が元嘉曆であつた可能性が極めて高いことになるが、幸いこの時期の元嘉曆によるカレンダーは、内田正男によつて復原されているので、正月六日が庚寅となる年を探してみれば、それは五七〇年に限られる。⁽¹⁾

次に中国の諸王朝で象嵌された場合も、先の検討により五七〇年に限られる。つまり五七〇年の場合は、既に中国で使われなくなつていていた元嘉曆法によろうが、陳の大明曆であろうが、はたまた北齊の天保曆であろうが、正月六日は庚寅になるのである。従つて、本鉄刀が倭国内で造

られればもちろん、百濟・陳・北齊で造られたとしても、その製作年は五七〇年に限られることになる。また、中国の諸王朝の版図内では、これ以外の可能性がない。問題は新羅や伽耶で造られた場合であるが、これら諸国で用いられた曆法が不明であるため、年代の推定は無理となるものの、新羅や伽耶諸国で用いられた曆法が、朝貢関係にあつた中國の現行曆法か百濟の元嘉曆であつたならば、やはり五七〇年以外には候補が無いことになる。

以上、この鉄刀銘文の「庚寅」年は五七〇年である可能性が極めて高いことを述べてきた。もつとも既に指摘されているように、この鉄刀の銘文には太歲「庚寅」、「十六日庚寅」と、年と日に「寅」が重ねられている。さらに「建寅月」を「歲首」つまり正月としていたという元嘉曆の決まり(元嘉曆に限られるわけではないが)をも採用すれば、本銘文は都合三つの「寅」を重ねる「三寅」を表現していることになり(時)も含めれば「四寅」⁽²⁾の可能性もある、後世の朝鮮半島でよく用いられた吉祥的な意味合⁽³⁾が強く意識されていることは明らかである。そうなると仮想的な、縁起を担いだ日付を彙り込んだのではないかという疑いが生じるのはやむを得ない。

しかし、仮に「寅」を三つ、あるいは四つ重ねることを意図したとしても、その日付を「六日」としなければならない必然性は無い。一月の六日という日付それ自体には、吉祥的な意味合⁽⁴⁾は含まれていないからである。これを逆に言えば、「寅」を三つ重ねようとして年・月・日のそれぞれ寅になる日付を象嵌しようとした際、ある寅の年の正月の中でのどの日が寅の日になるかは、カレンダーに依拠して求めたのであって、あるが故に本来「三寅」とは直接の関係がなく、吉祥的な意味合⁽⁵⁾を全く欠く「六日」が、おそらくはその年・その月の最初の寅の日として日付に採られたと考えられる誤である。その際依拠したカレンダーは五七〇年のものであつたとせざるえない。

国への交代での派遣を確実なものにするよう要請し、それを承けてこれら三博士及び関係する技術者（採薬師と薬人）が翌年来朝したと読む方が穏当ではなかろうか。当然彼ら三博士は、彼らの任務を果たすため「ト書・曆本・種々薬物」も携行してきたはずであり、こういったものを百済に発注している点から判断すれば、当時、倭国には曆本、つまり曆法を記したテキスト（カレンダーではなく、カレンダーの作成法を記した書物）が無かつた、少なくとも書本、あるいは完本が無かつたことが窺えるのである。

こうして欽明天皇一五年（五五四）に到り、ようやく倭国にも曆算のテキストがもたらされ、同時に、それを読解してカレンダーを製作することのできる技術者の百済からの交代での派遣制度が確立した。この時にもたらされた曆本は、前節で述べたように、当時百済で用いられている曆が間違いなく元嘉曆であつたことから、元嘉曆の曆本であつたことは疑いない。すなわち、倭国には五四年にいたつてようやく元嘉曆のテキストがもたらされ、百済から派遣されてくる曆博士が倭国で毎年のカレンダーを作るという体制が確立したのである。ただし、あくまでも百済からの曆博士の交代上番を前提としているものであるから、倭国人による曆算はできなかつたと見ざるえない。

四 「庚寅正月六日庚寅日時」の実年代

これまでに述べてきた倭国や中国の諸王朝、百済等朝鮮半島の諸国での曆法の施行状況を踏まえて、本節では、鐵刀銘文にある「庚寅」年が実年代の何年に当たるかを検討したい。

古墳の玄室と漢道から出土した須恵器の年代は七世紀前半から半ばにかけてとということなので、問題の鐵刀が、七世紀中頃より前に埋納されたものであることは間違いない、また五世紀半ば以前に埋納されたもの

ではないことも間違いない。もちろん五世紀半ば以前に製作された鐵刀を伝世していた可能性も絶対ではなかろうが、金と銀との材質の違いがあるとはいえ、本鐵刀の銘文の書体は、同じように刀の背（ムネ）に銀象嵌で記された熊本県江田船山古墳出土鐵刀の銘文の書体よりは柔らかく丸みを帯び、筆跡が寫される程の技術水準を示しており、金象嵌の稻荷山古墳出土鐵劍や、特に銀象嵌の伝韓國昌寧出土有銘環頭大刀（東京国立博物館蔵、五世紀末（六世紀初か））の銘文の書体に近い。従つて、本鐵刀の銘文が五世紀半ばより遡ることは無いと判断する。つまり銘文の「庚寅」年の候補は、五世紀半ば以降七世紀半ば以前に限られるわけである。

この期間中の庚寅年を挙げるならば、①四五〇年（宋・文帝の元嘉二七年、北魏・太武帝の太平真君一年）、②五一〇年（梁・武帝の天監九年、北魏・宣武帝の永平三年）、③五七〇年（陳・宣帝の太建二年、北周・武帝の天和五年、北齊・後主の武平元年）、④六三〇年（唐・太宗の貞觀四年）となる。

これらを『中国史曆日和中西曆日对照表』で検討してみると、①の元年は宋でも北魏でも壬戌であるから、正月六日は丁卯となる。實際この年、『宋書』には正月の辛未の日（辛卯の二〇日前）と辛卯の日に記事があるので、庚寅（辛卯の前日）が六日になることはあり得ない。『魏書』には正月乙酉の記事があり、これが元日なら六日が庚寅となるが、そもそも当時の曆は閏月が絡まない限り、大きくずれることは無いので、①の可能性は無いとみてよいだろう。

②は、前掲書によれば梁でも北魏でも元日が甲戌なので、正月六日は己卯となる。實際『梁書』には、同年正月の乙亥・丙子・庚寅の日に記事があるので、庚寅は少なくとも一六日以降となる。『魏書』には正月の記事が無いが、二月には丙午・壬子・癸亥の日に記事があり、庚寅は丙午の一六日前なので、正月六日が庚寅になることはあり得ない。

分に考えられよう。

ここで留意しなければならないのは、仮に宋や梁から班賜されたカレンダーがあつたとしても、あるいは百濟から單年度のカレンダーがもたらされることがあつたとしても、太陰太陽曆と呼ばれるいわゆる旧曆は、現在使われているグレゴリウス曆のように単純な原理で運用できるものではないということである。中国伝統の曆法に基づく曆算の結果として出来上がるカレンダーは、閏月の置き方（置閏法）をはじめ、月の大、小（連大法）など、年ごとに変化せざるを得ないものであった。この曆算には、中国における厳密な天体現象の、特に太陽と月の運行の、観測結果に基づく基數（これには、現在でいう小数点以下を、分数であらわす方法を用いている）が組み込まれており、その計算は、平朔法を用いる元嘉曆法にあつては比較的容易とされてはいるが、後述するよう倭國は百濟から曆博士を招請しなければならなかつたのであるから、當時の倭国人にとっては、扱いにくいものだつたのだろう。あるいは曆算法自体が秘伝とされていたと考えるべきかも知れない。こう考えることが許されるならば、五世紀後半から六世紀初頭における倭國での元嘉曆の行用は、かなり覚束ないものであつたと評価せざるを得ない。当時の金石文において、年に干支をつけている例はあるが、日付にまで干支を付けた例が未発見であるのは、こうした背景があるのであろう。

このように見てくるならば、「日本書紀」欽明天皇一四年（五五三）六月条の、

遣内臣（闕名）使於百濟。仍賜良馬二疋、同船二隻、弓五十張、箭筒五十具。勅云。所請軍者、隨王所須。別勅博士・易博士・曆博士・士等、宜依番上下。今上件色人正當相代年月。宣付還使相代。又ト書。曆本・種種藥物可付送。

（内臣「名を闕く。」を遣して百濟に使せしむ。仍りて良馬二疋・同船二隻・弓五十張・箭五十具を賜ふ。勅して云はく「請ふ所の軍は、

王の須るむ隨ならむ。別に勅して医博士・易博士・曆博士等、番に

依りて上下せしむ。今、上件の色の人は、正に相代らむ年月に当たり。還使に付けて相代らしむべし。またト書・曆本・種種の薬物も付送すべし」と。）

とあることの意義が大きいことが理解し易い。百濟からの兵士派遣を請に応える形で倭国から派遣される使者に言付けて、医博士・易博士・曆博士の交代を要請しているこの記事の文脈からは、あたかもこれ以前からこれらの三博士が交替で派遣されてきたよう読み取れる。しかし、倭国からの要請を承けて百濟が曆博士等を派遣してきたことを記す翌年二月条には、

百濟遣下部杆率將軍三貴・上部奈率物部烏等乞教兵。仍貞德率東城子莫古。代前番奈率東城子言。五經博士王柳貴代固德馬丁安。僧晏惠等九代僧道深等七人。別奉勅貢易博士施徳王道良・曆博士固徳王保孫・醫博士奈率王有悛陀・採藥師施徳潘量豐・固德丁有陀・樂人施徳三斤・季德己麻次・季徳進奴・對徳進陀。皆依請代之。

（百濟 下部杆率將軍三貴・上部奈率物部烏等を遣して教兵を乞ふ。仍りて德率東城子莫古を貢りて、前番の奈率東城子言に代ふ。五經博士王柳貴を固德馬丁安に代ふ。僧晏惠等九人を僧道深等七人に代ふ。別に勅を奉りて、易博士施徳王道良・曆博士固徳王保孫・醫博士奈率王有悛陀・採藥師施徳潘量豐・固徳丁有陀・樂人施徳三斤・季德己麻次・季徳進奴・對徳進陀を貢る。みな請ひに依りて代ふるなり。）

とおり、五經博士と僧侶に関しては、確かに前任者との交替の旨が明記されているが、易・曆・医の三博士に関しては、五經博士など異なり、誰の代わりに派遣されたのかの記述がない。このことを重視すれば、從来から交代制度が確立していたのは五經博士と僧侶の方であり、欽明天四年に至つて「別勅」を発し、易博士・曆博士・医博士も百濟から倭

なお高句麗については、安岳三号墳で発見された東晋の修寿の墓誌に

の採用以前の使用暦を明らかにすることはできないことを述べた。

「永和十三年十月戊子朔廿六日癸丑」とあるのは、東晋の昇平元年（永和二年、三五七年）とみて日付の干支が一致し、広開土王碑に見える（甲寅年九月廿九日乙酉）は、泰始（景初）暦を用いていた晋の義熙二〇年（四一四）と見て矛盾しないが、これ以降の使用暦については不明である。

以上、倭国と中国の諸王朝との交渉、及び倭国と百濟との交渉の状況から判断すれば、倭国で儀鳳暦以前に用いられたのは元嘉暦である可能性が大きいことを述べたが、更にもう一つ、倭国では儀鳳（麟徳）暦以前には元嘉暦しか知られていないかつたらしいことを示す微証がある。小川清彦によれば、「日本書紀」の朔日干支を検討してみたところ、神武紀から履中ないし允恭紀までは、本来定期法の儀鳳暦を平朔法で計算した結果と合致し、安康紀から持統紀までは元嘉暦と一致するという。この事実は、少なくとも「日本書紀」の編者達は、安庫・雄略朝ころに元嘉暦が倭国に将来されたとして不自然ではないと認識していることを示すとともに、「日本書紀」の編纂に際して、儀鳳暦と元嘉暦以外の暦法については全く考慮の外に置いていることをも示している。

安康紀より前が儀鳳暦に基づいているのは、言うまでもなく儀鳳暦法によつて後から推算して記したからであるが、雄略紀以降について一貫して元嘉暦を用いているのは、儀鳳暦を使用するようになる以前の倭国において、元嘉暦以外の暦法が行われたことが無いという認識が編者に共に有されていたことを示すものであろう。

以上、元嘉暦は中国では四四五五年（五〇九年）に用いられてきたが、百济では遅くとも五二〇年代には元嘉暦に基づく暦算を習得していちらしく、以後七世紀後半の百濟滅亡まで、元嘉暦法に基づく毎年のカレンダーを作成していたらしいこと、倭国においても唐の麟徳（儀鳳）暦が採用されるまるで一貫して元嘉暦が使用され続けたらしいこと、ただし新羅については、元嘉暦を用いていた可能性を否定はできないものの、麟徳暦

では、倭国への元嘉暦の伝来はいつなのか。この問題に関しては、いくつかの考え方があるが、念頭に置いておかなければならないのは、元嘉暦法に基づいて造られたカレンダー（二年ないし数年分）の伝来と、自ら元嘉暦の暦算法を習得してカレンダーを作り続けることは、大きな段階差があるということである。

前述したように、倭国王が宋に遣使した際、宋の現行暦は元嘉暦であつたから、元嘉暦に基づいて造られたカレンダーを下賜されるということは十分にあり得たことであろう。むしろ暦を頒下されること、すなわち時間を支配する皇帝の制定した「正朔を奉ずる」ことは、朝貢という名目の服属儀礼の一部をなしておいたと言つた方が良く、そういう意味では、暦を押しつけられたとしても不思議ではない。従つて、稻荷山古墳出土銘文の「辛亥年七月中」（辛亥年を四七一年とするのが有力説）という表記や、隅田八幡宮人物画像鏡の「癸未年八月日十」（癸未年を五〇三年とするのが有力説）という表記から、当時既に元嘉暦法が行われていたのではないかという見解も出されることになる。辛亥年の直前の宋への遣使は、倭国王興によるもので、大明六年（四六二）に興への詔書が発出されているから、この年の帰國が考えられ、それは辛亥年の九年前となる。一方、癸未年の直前の確實な遣使は、昇明二年（四七八）の倭国王武によるものなので、帰國を翌年とすれば、二四年前に頒下されたカレンダーに基づいたことになるが、梁の高祖の即位時の遣使を認めるならばそれは五〇二年のことになるので、前年に頒下されたカレンダーに基づいた可能性を考えなければならない。ただし、宋や梁から直接ではなく、單年度のカレンダーが百濟からもたらされる可能性も十

三 倭国への元嘉暦の伝来

年号（道銘には、開元・上元・貞元等の唐年号がある）のみが用いられているのに対し、雁鴨池出土の瓦・博銘の「儀鳳四年皆土」（六七九年）「調露二年」（六八〇年）、その他、六七〇年代以降の新羅で唐の年号を用いていた証左は数多く見いだされる。唐の年号を用い始めて以降は唐の曆を使った可能性が大きいが、それ以前に新羅で用いられた曆についても、後述するように元嘉曆の可能性は残すものの、詳細不明である。

一一 元嘉曆の成立と普及

では、持統朝に新羅の儀鳳曆（麟德曆）と併用されることになった元嘉曆の方は、いつごろ倭國に伝わったものであろうか。

元嘉曆は、南朝の宋（劉宋）の文帝の元嘉二〇年（四四三）に何承天が作成・上呈し、元嘉二三年に施行された後、齊を経て、梁の武帝の天監八年（五〇九）までの六五年間にわたって適用されたものである。天監九年正月以降は、かつて桓沖之が作成しておいた大明曆が用いられるようになり、これは陳でも適用され、その滅亡（五八九年）に及んだ。

一方、北朝にあっては、北魏は初め、三国魏（曹魏）が施行した景初曆を晋（西晋）が改名して適用した泰始曆を用いていたが、後に玄始曆に改め（四五二年施行）、更に正光曆（五二三年施行）へと改め、その滅亡（五三四年）の後も、西魏、そして北周も初めはこれを適用した。一方東魏では、五四〇年に興和曆を採用し、東魏の後を襲つた北齊では、五五一年より天保曆を施行して、その滅亡（五七七年）に及んでいた。北周では、五六六年に天和曆、更に五七九年には大象曆を施行したが、北周の禪讓を受けた隋では、開皇四年（五八四）正月に開皇曆（張賓撰）を施行、更に開皇十七年（五九七年）には大業曆（張胄玄撰）を施行する。隋に代わった唐では武徳二年（六一九年）に戊寅曆（傅仁均撰）

が施行され、その次に用いられたのが麟德（儀鳳）曆であった。

このように中国における曆法の改訂は自まぐるしいものがあるが、元嘉曆よりも後で麟德曆よりも前に中国で用いられた曆法が倭國に伝わった可能性は極めて小さいのではないかと思われる。そのように考えると根拠を挙げるならば、まず彼我の交渉の状況がある。周知のように倭の五王は南朝に使者を派遣したが、その確実なもの最後は、宋の昇明二年（四七八）になされた有名な上表文を伴う倭王武による遣使朝貢であり（『宋書』倭國伝）、『南齊書』や『梁書』の倭國伝に記された將軍号の進号は、遣使を承けてのものとは考えがたいとするのが現在の有力説であるが、仮に『梁書』に見える進号を使節の往来を示すと見た場合も、それは高祖（武帝）の即位直後のことになるので、現行の曆法は元嘉曆であった。中國の王朝との国交はこの後しばらく途絶え、次に行われたのは六〇〇年の遣隋使であつた。従つて、宋に入朝した時に使用されていた元嘉曆法によるカレンダーを倭國使が持ち帰った可能性は大きいが、その後に目まぐるしく改訂された隋より前の中國の曆法を、直接倭國に持ち帰る機会は無かつたと見なければならぬ。

ただし、朝鮮半島経由で中國の曆法が伝来する可能性は残る。そこで先ずは倭國との交渉が最も頻繁であった百濟について見るならば、北朝の周（北周、五五七～五八一年）の歴史を記した『周書』（六三〇年の成立）卷四百九百濟伝に、

用宋元嘉曆、以建寅月為歲首。

（宋の元嘉曆を用ひ、建寅月を以て歲首と為す）
とあることが注目される。既に南朝では元嘉曆が廃止されていた北周と並行する時期の百濟では、なお宋の元嘉曆を用いていたことが判明するが、恐らくは宋に朝貢した際に元嘉曆の曆算法を習得し、中国ではもやは現行曆ではなかつた時期にあつても、百濟で独自に元嘉曆法に基づいた曆算を行い、カレンダーを作り続けたものと見られる。百濟の武寧王

六 庚寅年銘鉄刀の背景となる暦について

九州大学大学院人文科学系研究科教授 坂上康俊

はじめに

一〇一年九月に元岡古墳群G群6号墳から出土した鉄刀に象嵌されていた銘文については、X線写真に基づいた一応の仮説案が示され、いるものの、現在、慎重に銘文を研ぎ出している最中であり、まだタガネ痕の有無や鉄刀の形状についての精細な調査が行われていない現段階では、本銘文の意義を論じるのは時期尚早との譏りを免れまい。しかし、銘文の大半の文字、特に暦日を刻んだ部分「庚寅正月六日庚寅日時」については他の仮説の余地が無く、この読みは確定できると判断している。そこで本報告においては、銘文に示されている当該鉄刀の製作の年「庚寅」年を五七〇年と判断する根拠について簡潔に記し、もつて将来において本銘文発見の意義を論じる際の一助としたい。

一 元嘉暦から儀鳳暦へ

『日本書紀』持統天皇四年（六九〇）一〇月甲申条には、

奉勅始行元嘉曆与儀鳳曆。

（勅を奉り、始めて元嘉曆と儀鳳曆とを行ふ）

とあり、この時、元嘉曆と儀鳳曆とを並行して用いるように命じられたことが知られる。『日本書紀』持統紀の暦日を検討すると、朔日の干支は一貫して元嘉曆に従っているものの、持統六年以降の日食の予報は、確かに儀鳳曆を用いて行われていたことが知られ、更に『続日本紀』では、冒頭の文武元年（六九七）八月一日以降、月朔も儀鳳曆で示される

こととなつた。

このように儀鳳曆は、七世紀末に日本で採用され、天平宝字七年（七六三）八月に大衍曆（二行撰、天平七年（七三五）に吉備真備が唐から持ち帰った暦法で、唐では開元一七年（七二九）施行）が採用されまるまで用いられた暦であり、九世紀末に成立した藤原佐由撰『日本國見在書目録』にも、その名で著録されているものであるが、実は中国にはこの名称の暦は無い。儀鳳というのは唐の年号であり、六七六年九年に当たる。その儀鳳年間に唐で用いられていたのは、麟德二年（六六五）に施行された麟德曆（李淳風撰）であり、唐ではこの麟德曆が開元一六年まで用いられた。

日本では先に掲げたように儀鳳曆という名称は用いられているが、麟德曆という名称は『日本國見在書目録』に儀鳳曆と併記されている以外には史料上に見えない。そこで現在通説的には、日本で言う儀鳳曆は、内容的には麟德曆と同一のものではないかとされている。となると、なぜ日本では麟德曆のことを儀鳳曆と呼んだのかということが問題となるが、これについては、儀鳳年間に日本に輸入されたことにちなむ命名とする説もあるものの、『三国史記』卷七新羅本紀文武王一四年（六七四）正月条に「入唐宿衛大奈麻德福、曆術を伝へ学びて還り、新曆法を改め用ゐる」とあるので、この時に新羅に輸入された暦法に従つて、儀鳳年間に新羅で使い始められたことにちなむ命名とする説の方が、六七〇年に派遣された遣唐使以降、七〇二年に派遣された遣唐使までの間に倭国と唐との直接の交渉が無いことから見て、穩當であろう。

新羅においては、『三国史記』卷五新羅本紀真德王四年（六五〇）に「是の歲始めて中國の永徽の年号を行ふ」とあるように、この時以降、唐の年号が用いられるようになった。これ以前の新羅では、延壽（建元）、開元・太昌・鴻濟・建福・仁平・太和といつた独自の年号が使われており、また川前里書石（原銘五五年）、青堤碑（五三六年）では干支



(1) 3号墳遠景
(南東から、奥が6号墳)



(2) 3号墳石室全景
(上が南東)



(3) 3号墳全景
(南東から)



(1) 3号墳全景（南から）



(2) 3号墳玉類出土状況



(3) 出土遺物 1



(4) 出土遺物 2



(1) 6号墳調査前全景
(東から)



(2) 6号墳調査前全景
(南西から)



(3) 6号墳調査前上石露出
状況 (西から)

PL.4



(1) 6号墳Dトレンチ・前
庭部西側(南から)



(2) 6号墳Cトレンチ
(南東から)



(3) 6号墳Cトレンチ土層
(南から)



(1) 6号墳 Gトレンチ土層
(北から)



(2) 6号墳 Hトレンチ土層
(東から)



(3) 6号墳 C-2トレンチ土層
(北東から)



(1) 6号墳B トレンチ土層
(西から)



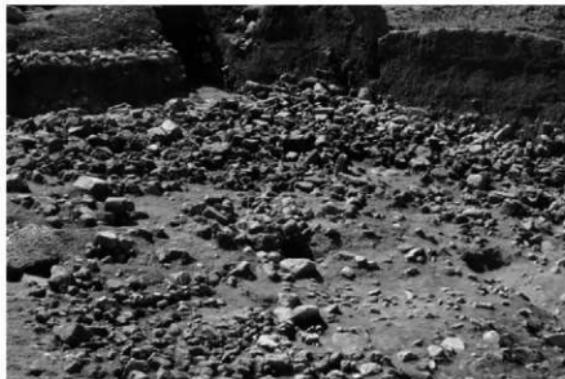
(2) 6号墳A トレンチ土層
(南西から)



(3) 6号墳A トレンチ東部
分 (南から)



(1) 6号墳 A-2 トレンチ土層（北から）



(2) 6号墳墳丘IV区地山露出状況（東から）



(3) 6号墳墳丘IV区北側地山露出状況（東から）



(1) 6号填埋丘III区（西から）



(2) 6号填埋丘IV区（南西から）



(1) 6号墳・56次調査1区全景（南西から）



(2) 6号墳・56次調査1区全景（南から）



(1) 6号墳石室正面
(南から)



(2) 6号墳石室外観
(西から)



(3) 6号墳石室奥壁部分外
観 (北西から)



(1) 6号填石室外観
(北東から)



(2) 6号填石室外観
(東から)



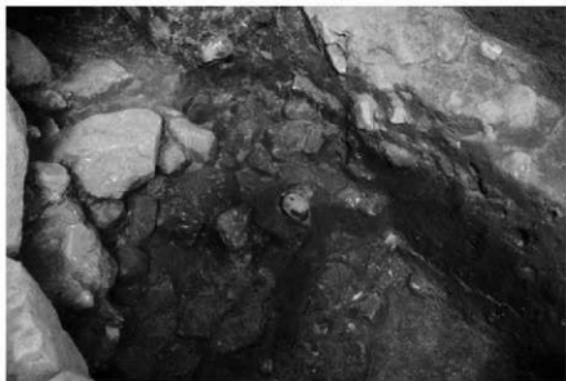
(3) 6号填閉塞施設正面
(南から)



(1) 6号墳閉塞施設検出状況（南東から）



(2) 6号墳閉塞部 青銅鈴出土状況（南から）



(3) 6号墳 青銅鈴出土状況（南西から）



(1) 6号墳墓道部・Dトレ
ンチ土層（西から）



(2) 6号墳墓道1トレ
ンチ土層（南から）



(3) 6号墳墓道2トレ
ンチ土層（南から）



(1) 6号墳墓道前面部 周溝
断面（西から）



(2) 6号墳周溝 須恵器瓶出土
状況（北から）



(3) 6号墳溝状通路 須恵器
平瓶出土状況（東から）



(1) 6号填閉塞部断面
(南西から)



(2) 6号填閉塞施設
(南から)



(3) 6号填閉塞施設俯瞰
(西から)



(1) 6号填玄室内 中世石敷
き面(南西から)



(2) 6号填玄室横断面土層
(北から)



(3) 6号填青磁碗出土状況
(北から)



(1) 6号墳玄室下層縦断面
土層（北東から）



(2) 6号墳玄室内 大刀出土
状況（北西から）



(3) 6号墳玄室内 大刀出土
状況俯瞰（北西から）



(1) 6号墳玄室内 遺物出土
状況（北から）



(2) 6号墳玄室内 遺物出土
状況俯瞰（西から）



(3) 6号墳玄室右袖石付近
遺物出土状況（北西から）



(1) 6号墳玄室内 遺物出土状況（南から）



(2) 6号墳玄室奥壁付近 遺物出土状況（南から）



(1) 6号墳羨道部 遺物出土
状況（南から）



(2) 6号墳羨道部 遺物出土
状況（北から）



(3) 6号墳羨道右奥部 遺物
出土状況（南西から）



(1) 6号墳羨道部下層 遺物
出土状況（南から）



(2) 6号墳羨道右側壁際 鉄
鎖出土状況（南西から）



(3) 6号墳羨道南側 鉄鎖出
土状況（西から）



(1) 6号墳羨道右側壁
(南西から)



(2) 6号墳羨道左側壁
(南東から)



(3) 6号墳羨道部床面
(南から)



(1) 6号墳玄室右側壁
(南西から)



(2) 6号墳玄室左側壁
(南東から)



(3) 6号墳玄室右袖石・羨道右側壁 (北西から)



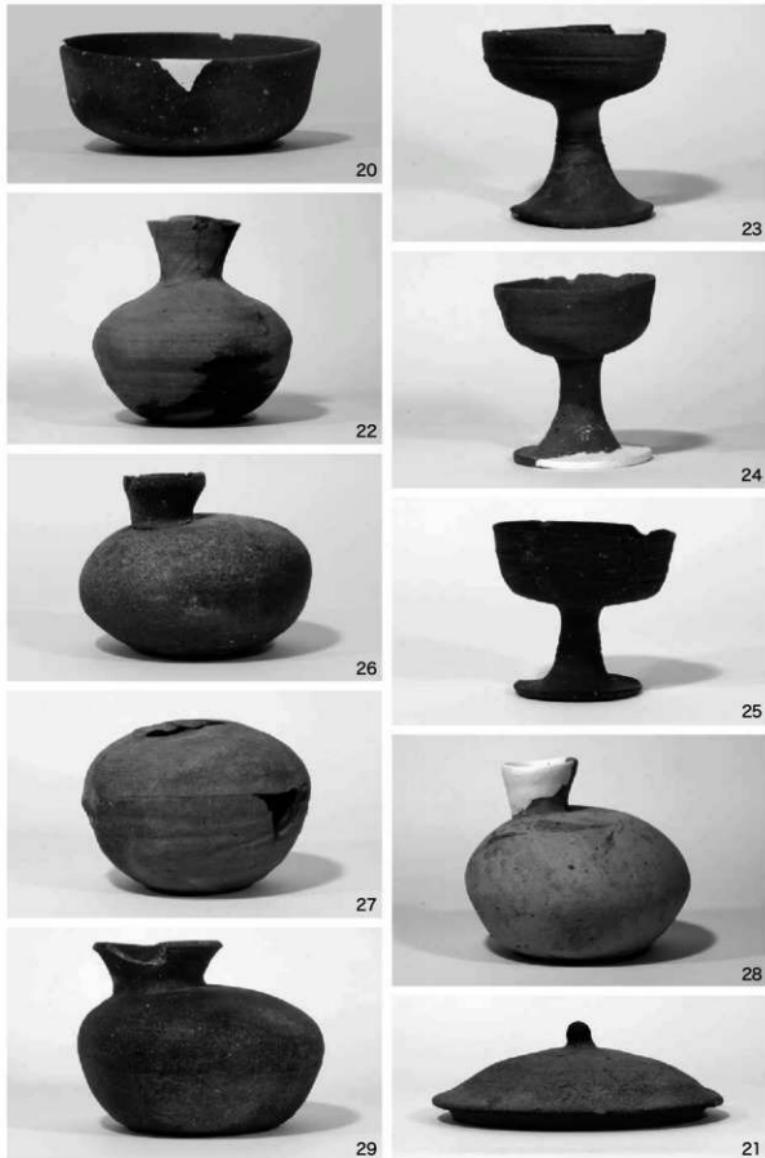
(1) 6号墳玄室左袖石・美道左侧壁(北西から)



(2) 6号墳美道部床面
(北から)



(3) 6号墳閉塞基壇部
(北から)



6号填玄室内出土土器



157



160



161



164



174



172



166



168



170

6号填羡道内出土土器



185



196



191



203



193



213



216



217



6号填墓道出土土器 1



214



221



241



226



243



229

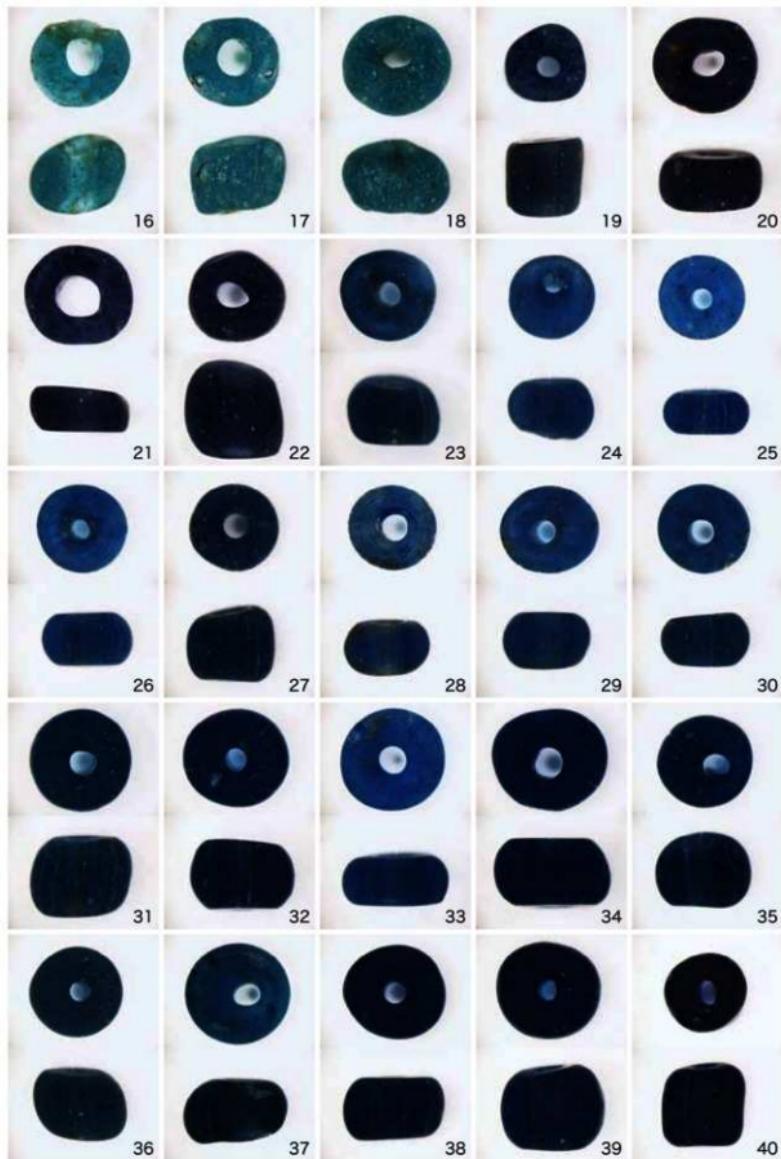


244

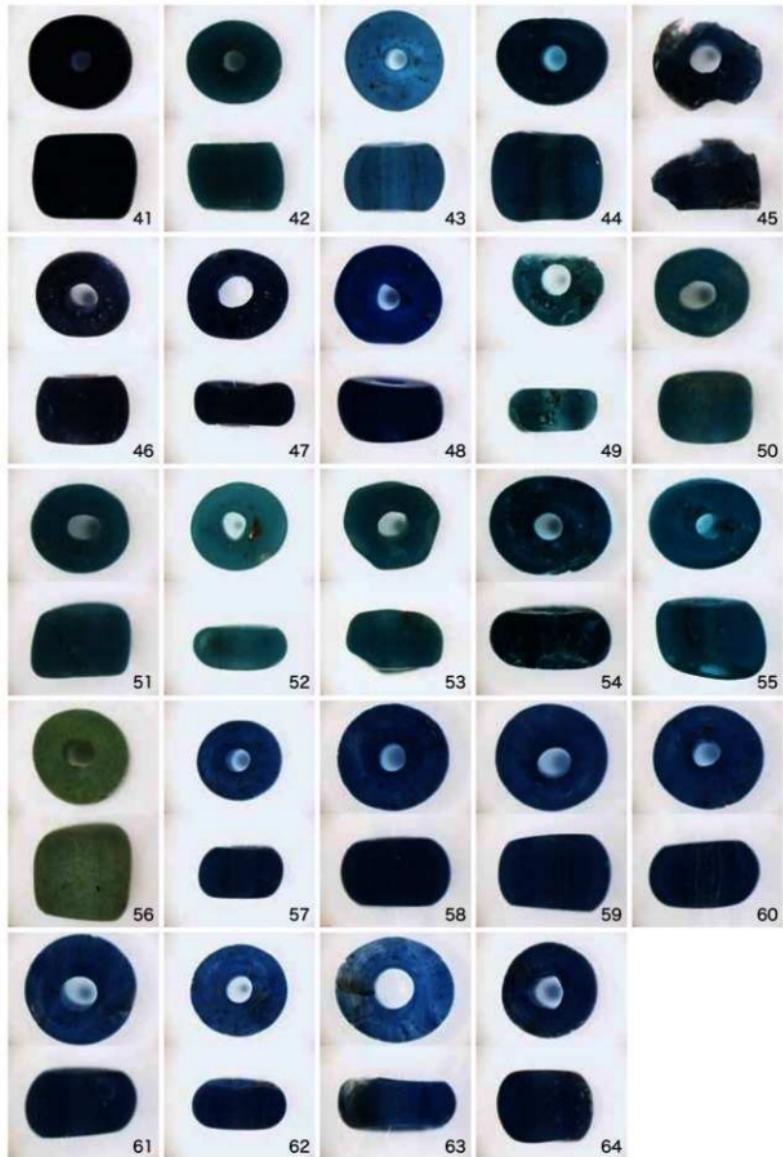


220

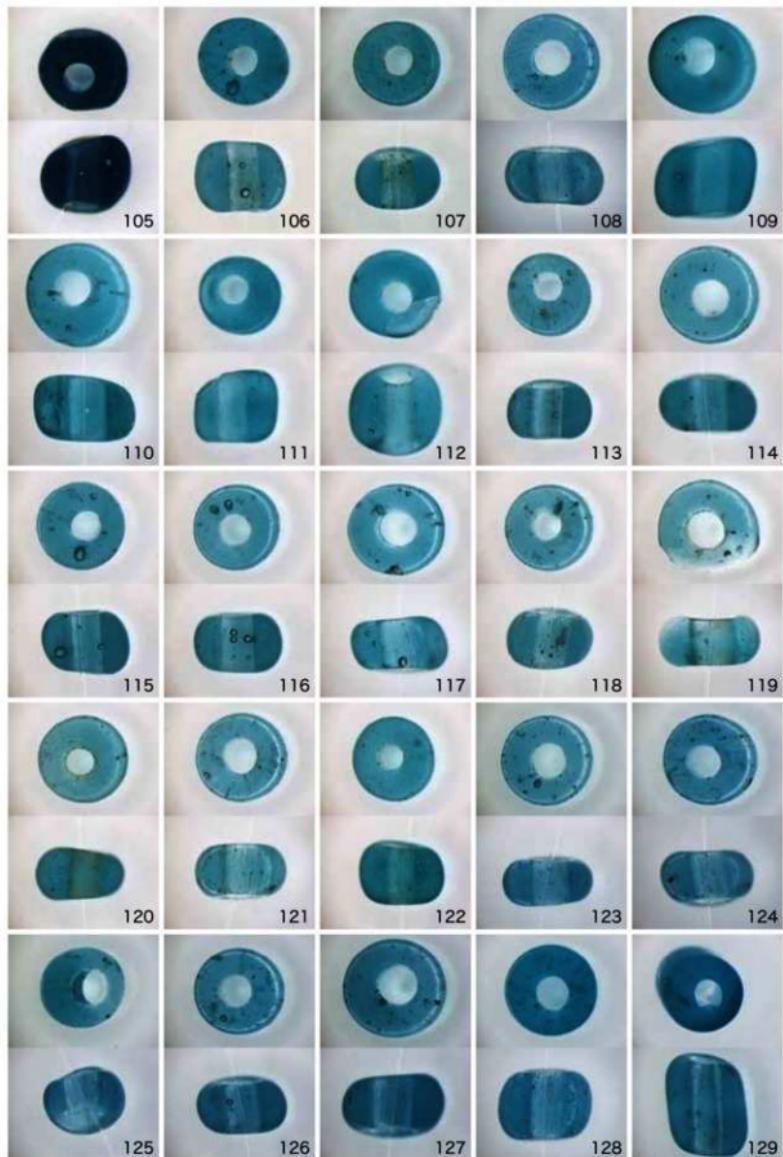
6号填墓道出土土器 2・周溝・溝状通路出土土器



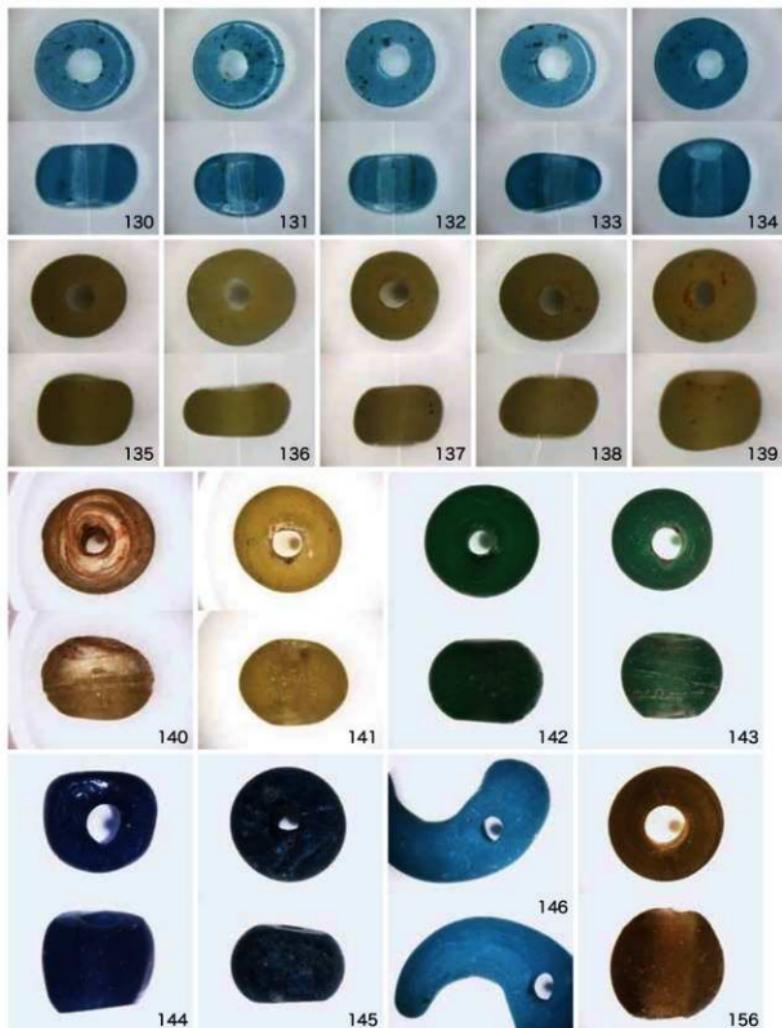
3号墳出土ガラス玉 1



3号墳出土ガラス玉 2



6号墳出土ガラス玉 1



6号墳出土ガラス玉 2

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	もとおか・くわばらいせきぐん 22 元岡・桑原遺跡群 22 第56次調査の報告1 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1210集 大塚紀宣(編)・比嘉えりか・田上勇一郎・上角智希・坂上康俊 福岡市教育委員会 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 2013年3月22日						
ふりがな 所取遺跡名 所在地	ふりがな 所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
もとおか・くわばら いせきぐん 元岡・桑原 遺跡群 第56次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40130 2782	33°35'12" (G群3号墳)	130°12'50" 33°35'15" (G群6号墳)	2010.9.14 ~ 2011.12.28	6,970	記録保存 調査
所取遺跡名 種別 主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
元岡・桑原 遺跡群 第56次調査	古墳 古墳時代	古墳	鉄製武器(大刀・鐵矛)・鉄製工具・鉄製馬具・青銅製鉈・玉類(ガラス・水晶・瑪瑙)・須恵器・土師器 金象嵌銘文大刀(「庚寅」銘大刀)・青銅製大型鉈の他、多数の玉類が出土。				
要約	元岡古墳群G群3号墳、同6号墳の調査を行った。3号墳では遺存状況が悪かったものの、石室の平面形を確認することができ、両袖单室の横穴式石室で玄室幅1.2m、玄室長2.1mの石室規模であることが判明した。3号墳からは多数の玉類をはじめとする遺物が出土している。 6号墳も遺存状況が悪かったものの、7世紀前半に築造された直径18mの古墳であることが判明した。石室は大型の石材を使用し、石室長約6.5mの両袖单室の横穴式石室で、調査段階では石室天井部分まで良好に遺存していた。玄室内から金象嵌銘文入り大刀(「庚寅」銘大刀)をはじめ玉類・須恵器が出土し、羨道から鐵鎌・鐵製馬具・須恵器が、閉塞部から大型青銅鉈が出土した。「庚寅」銘大刀は19文字の象嵌による銘文を有し、西暦570年に作成されたことが判明するとともに、日本で曆を使用した最初例のものとみられる。大型青銅鉈は全長約12cmで、古墳時代の鉈としては国内最大級である。						

元岡・桑原遺跡群 22

—第56次調査の報告1—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1210集
2013年3月22日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 九州チューエツ株式会社
福岡市博多区東比恵2-9-1